

川柳塔

昭和四十一年十一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻九九〇号



日川協加盟

No. 990

第15回川柳塔まつり特集

十一月号

年賀広告募集

本誌一月号に掲載する年賀広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願いする次第です。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、お申込みのほど、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口1/6頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（氏名・住所・電話番号など掲載）

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁 六、〇〇〇円 ③2/3頁 一二、〇〇〇円

②半頁 九、〇〇〇円 ④一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 11月23日

〒543-0052 大阪市天王寺区大道二―一四―一七

花野ビル 201号室

TEL 06―6779―3490

川柳塔社

平成22年 本社句会 開催日程

会場：ホテルアウィーナ

開催日	開場	締切
1月7日（木）	13時	14時
2月9日（火）	13時	14時
3月5日（金）	13時	14時
4月7日（水）	17時	18時20分
5月7日（金）	17時	18時20分
6月7日（月）	17時	18時20分
7月7日（水）	17時	18時20分
8月6日（金）	17時	18時20分
9月7日（火）	17時	18時20分
10月9日（土） 川柳塔まつり 1000号記念大会	同人総会 10時 句会締切 12時 懇親宴 17時	
11月5日（金）	13時	14時
12月7日（火）	13時	14時

★新年号特集★

川柳塔社同人参加（一人一句）

「私の一句」

■今年中に発表された句に限りです。
■締切 11月23日（本社事務所宛）

最新情報

河内 天笑

川柳塔社創立85周年を迎えた今年の川柳塔まつりは、予想された数の2割を越す参加者でアウィーナの会場を埋め尽し、大盛會裡に運営されたことをご報告申し上げます。

午前10時に始まった同人総会は小島蘭幸副主幹を議長に選出、スムーズに議事が進んで予定時間内に無事終了。好天に恵まれたと共に、この日の幸運を予感させてくれました。

記念句会は西出楓楽理事長の開会の辞と私の挨拶に続き、六賞の表彰式へと移り、新同人紹介へと進みました。当日の客人としてお招きした帝京平成大学教授・吉本興業文芸顧問竹本浩三氏のおはなしは、軽妙なウィットに富み実にテンポよろしくあつという間に講演時間が終了となりました。また、再び文芸館の会場を川柳の教室に開放していただけるなど、今後の展がりへ有難いお言葉を頂戴して居ります。

今月の日川協常任幹事会は10月15日大阪駅前第一ビルで開かれ、新しく理事長に就任された大野風柳氏は新潟から駆け付けられ、今後への抱負と貴重なお言葉などをいただきました。お会いする度に教えられることの多い風柳氏ですが、昭和23年秋に弱冠20才で柳都川柳社を立ち上げられ、これまで61年間一度の遅刊もなく、また61年間に亘り主幹を続けられているという体力と精神力にはただただ頭が下がるばかりであります。

昭和45年に設立された日本川柳協会の旗揚げ人の一人である風柳氏は、六大家の全てより教えを受けられたという貴重な体

験をお持ちの大先輩であるに拘わらず、にこやかに親しく私達に接して下さる大人物であります。

正直に芋の長さで芋届く 風柳

は、昨年出版された全日本柳人写真名鑑でお見受けした作品ですが、先生の懐の深さを感じさせてくれます。将に日川協理事長に最も相応しい人物を得たよろこびを感じ、これからの日川協を導いて下さる事を信じて止みません。

「昨今どの柳社も会員の高齢化と人数の減少は否めない事だが、今こそ、会員ひとりひとりの顔が見えるような存在感のある吟社が育って行つてほしい。小さな会合であれ大きな会であれ肚割った自分の意見や自分の川柳観を表に出して論じ合い、お互いの視野やバランス感覚を理解しながら人間としての絆を深める事が川柳の発展につながる」云々がその日の風柳氏の挨拶の要旨でありました。

二年前の日川協の忘年会で隣席させて頂いた折、或る悩みを打ち明けたところ即座に「先ず、何でもええから思いついたことを書きなさい」というお言葉を頂きました。その時は漠然としていたが、この言葉を忘れないで今も実行させていただいています。つまり毎月の巻頭言に行き詰まった時のヒントを教えて下さった恩人でもあります。

二年ぶりどちらもすこしずつ萎み

ふさふさと妻のしつぽがのびている

美化されて恋の痛手は詩になり

泣き面に蜂 関空が見縊られ

ゴミ分別毎日頭鍛えられ

天笑

〃
〃
〃
〃

座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

(薫風)

私の句

過去は過去今前向きに生きてます

野崎 勝

川柳塔 十一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「越前和紙」

■巻頭言 最新情報

生きがいとボランティア

河内 天笑 …… (1)
前 たもつ …… (2)

川柳塔(同人吟)

河内 天笑 …… (4)

川柳塔の川柳讃歌 (59)

木津川 計 …… (47)

自選集

温故知新 …… (48)

水煙抄

川上 大輪 …… (51)

麻生路郎句抄

川上 大輪 …… (52)

愛染帖

新家 完司 …… (71)

第15回

川柳塔まつり …… (72)

同人総会・おはなし・各賞表彰・記念句会・懇親宴

同人総会・おはなし・各賞表彰・記念句会・懇親宴 …… (76)

生きがいとボランティア

前 たもつ

ナルク(NALC)とは

ナルクとはNPO法人ニッポン・アクティブライフ・クラブと称し、自主・奉仕・助け合いの理念を掲げて、夫婦で参加する会員制のボランティア団体である。

十五年前に大阪に創立され、今や会員二万八千人を越え、一四三の拠点を全国に設立するまでに発展している。

主な活動は、
①「時間預託活動」会員相互の助け合い運動。ボランティア提供した時間を一時間一点として時間預託しておき、必要な時に点数を引き出しボランティアを受ける。
②「在宅支援・庭の手入れ・移送ボランティア」
③「奉仕活動」環境美化・特別養護老人ホーム等への無償ボランティア活動(老人ホーム奉仕・子育て支援・環境活動)
他に「各種事業活動」文化・スポーツ活動(事務局活動)

ナルクに入会

ナルクが創立された翌年の平成七年に入会。八年ごろから、庭の手入れ等の時間預託活動や老人ホームの奉仕活動を始め。十三

檸檬抄「灯」……………牛尾緑良・高田美代子共選…(89)
 誹風柳多留一二篇研究 51……………(92)

一路集「丸い」……………川本 畔選…(94)
 「詩人」……………都倉求芽選…(94)

「記憶」……………小谷集一選…(95)

初歩教室「探す」……………鈴木公弘…(96)

秀句鑑賞「同人吟」……………藤井則彦…(98)
 「水煙抄」……………市丸晴翠…(100)

各地柳壇(佳句地十選／小川注湖)……………(102)

柳界展望……………(119)

十一月各地句会案内……………(120)

■編集後記(ひとこと／竹山千賀子)……………尚士・朱夏…(122)

座右の句

目尻からおんなの秋は深くなる

(楓 楽)

私の句

行先のちがう切符をもつ親子

榎 本 宏 子

年に大阪市に移転してからも、会員に川柳を指導する文化活動を十年ほど続けている。

恥ずかしながら、現在預託時間は二四三三(奉仕活動五四点)。私は必要な時には二四三三時間のボランティアを会員から受けられることになる。また遠方の親にも利用できる。

介護保険でできない支援

介護保険ではできない、病院へ洗濯ものを届けるとか、食事等の買い物など家事、介護支援としてナルクは行っている。まさしく、ナルクの時間預託活動は、介護保険ではできない支援を担っている。

ナルクとともに

私の退職後のライフワークは、川柳とボランティアの二本立てであったため、どうしても川柳とナルクを比べてしまう。

高齢化の中で喘ぐ川柳に比べ「天の川クラブ」(枚方拠点)は会員七八〇名を越え、年間の預託時間も奉仕時間も一万時間の実績を示し、他の拠点を群を抜いている。

今年(創立十五周年を迎え、四月二十五日から一ヶ月かけ「中山道五三三kmウォーク」のイベントを高畑会長を先頭に成功させた。これからもナルクを中心に、自分の生きがいとして、自分のためのボランティアを続けたいと思う。



河内天笑選

鳥取市 鈴木公弘

オンボロのバスも通らぬ過疎になり
空さわやかに嘘つきの秋がくる

雨だれの音聴きながら朝寝する
向き変えて回ってみたい観覧車
いくたびも吸われた民の血は薄い
逃げ延びた野良犬星をみて眠る

河内長野市 山岡富美子

ほかほかの芋に戦後の恩がある
裏方でサンドバッグになってます
綱引きにちよつと疲れた秋暑し
秒針は捨ててとことん私流
頼られて苦手なこともしています
彼岸花律儀な秋を連れてくる

藤井寺市 鈴木いさお

喝采はなくてもボクの夢舞台
無言劇妻とふたりの夕ごはん
黙祷のさ中に咳が止まらない

飲み会に飲めないヤツがいつも来る
金持ちと下戸はグループに入れぬ
ためになる話らしいが肩が凝る

西宮市 山本義子

握手したけれども票はお入れせず
お人好しきつと死ぬまで直るまい
矢面に立つとにつこり面替える
お互いに誤解し合って仲がよい
メタボ駄目瘦せたからとてもでもせず
ごちゃごちゃな世間でわたしふわり生き

大阪狭山市 矢野梓

淋しさも一緒につれて秋の風
古里に他人の顔が増えている
パソコンに向かい患者の顔を見ず
三日ほど孝行に子等来てくれる
シナリオと全く違う明日だとは
祈るしか親には出来る事がない

松江市 三島 湫 丘

脱衣籠今日の疲れを脱ぎ棄てる
行き先は問わぬ気ままな秋の靴
おおらかに生きよと諭す風の海
古き良き躰に妻の座り肝臓
時々は一か八かで選ぶ道
赤提灯寂しがりやの抛りどころ

松山市 古手川 光

ひまわりの一途御天道さまが好き
ケータイがスローライフを許さない
選って選って選って買わずに客が出る
札束を数える指はよく弾む
骨拾う 人間たつたこれっぽち
目覚しは要らぬ一番鶏が鳴く

寝屋川市 太田 とし子

この野郎なんと威勢のいいことば
ゆっくりと生きて急いだ玉手箱
輪の中でチューインガムを噛む男
記念品捨てるとずっと過去も消え
やけ糞の酒を相伴して帰る
遠眼鏡かけて余生を楽しもう

堺市 志田 千代

婿殿がすすめてくれた赤い靴
言わないで今はおいしく食べる時
大切なものを失う洗髪

練習はバッチリしてもあがり性
子に背きホーム選んで鳩ポッポ
マネキンの素っぽんぽんに目をそらす

枚方市 丹後屋 肇

あじさいの路を分け入る霊柩車
骨箱の温もりを抱く喪主徽章
亡妻が呼ぶ空耳を敲てる
香くべてラジオ体操する日課
命日に妻の香を嗅ぐ小抽出し
独り世帯慣れて来たよと墓に告ぐ

三田市 北野 哲男

もう少し長さが欲しい赤い糸
ストレスは病院食のうすい味
腰据えた仕事漬物石の役
写経した日は宝くじ買う日です
戒名で呼ばれたことのない仏
よく迷う女を嵌める占い師

八尾市 宮崎 シマ子

大皿に盛ると競争して食べる
敵に後見せず男は引いて行く
主婦の座を譲るとケチになった嫁
若者の喋る日本語ルビがいる
過疎になる村を案じている地蔵
目を合わし子を叱るのも褒めるのも

鳥取市 近藤佳子

母がした通り土用に梅を干す
鯉群れた母の生家の売家札
灯籠の灯に月見草揺れる墓
分かったか鳥取弁で念を押し
各停で来た人生がもう米寿
海を見て建つ墓夕日浴びている

河内長野市 村上直樹

咳ひとつじろりマスクに睨まれる
A型でおっとりしてる暇がない
体温を下げて不況に耐えている
ちびちびと貯金削って食べてます
じわじわと低温火傷平和ボケ
極楽のドアはお布施でこじ開ける

鳥根県 伊藤寿美

大丈夫鬱という字がまだ書ける
口裏を合せて同じ雨に濡れ
歯に衣着せたばかりに舌を噛む
贅沢に馴れた暮しの骨密度
善人の顔をするから肩が凝る
みえみえの言い訳だけ聞いてやる

豊中市 安藤寿美子

お供えをおろす線香あげている
眠るには惜しい刻なり秋の月
初恋はあほらしいほど何もし

グループに小うるさいのが一人居て
顔の蚊をたたいて眼鏡こわしたり
今年また去年と同じミスをやる

鳥取市 倉益一瑠

不意に来る嵐に杭を打っておく
バラさないで下さい鮎を舐めたこと
溜め息を吐いて重たい荷を担ぐ
ジョーカーを拾う思わず薄笑い
キラキラとしていた人も背が曲る
病院の白いベッドにある寒さ

鳥取県 石谷美恵子

溜息をつくなど影に叱られる
息切れを庇い合ってる老いの坂
お互いに生活臭を脱いで会い
傷口へ塩塗りがたがる無神経
傷比べみなさむらいの顔になり
勝ちたくて火の輪なんべんでもくぐる

京都市 高島啓子

賑やかなデパートで買うひとり鍋
お互いに勝ったと思う痛みわけ
ローヒール目線がいつも低くなる
どことなくたががはずれる記憶力
烙印のようにアナログ表示かな
合掌のごちそうさまは本気です

米子市 政岡 未延子

(日枝子改めて)

日々満ちて何となくする口喧嘩
そばかすや小皺で盛りあがるおんな
二世帯の家で仏を分けている
父の尻尾も母の尻尾も見てあげる
歩けなくなった鬼の手ひいている
尾の泥を妻は黙って拭いてくれ

尼崎市 加川 靖 鬼

涙腺のコック急には締らない
清濁を飲んだ男のメタボ腹
白砂青松どの木も風に耐えた形
潮引くと一直線の道がある
陽が昇る天動説は生きている
真似事がいつか本気で燃えている

枚方市 小林 わ こ

後片付けよいしょと食後気合入れ
食後の一服祖父のキセルが嬉しがる
怒って泣いて芝居しました恋をして
大声で笑いうっ憤吹き飛ばす
御先祖さま気力下さい墓洗う
大きな朝日背負って歩き出すシューズ

吹田市 山 本 希久子

木陰くれた御札に落ち葉掃いている
里方にもう味方なし秋暮れる
いやだと言えぬ気弱な面を持て余す

映画館でると現実待っている
音楽葬立ち去りかねている別れ
月光冴えるひとりぼっちもいいものだ

鳥取市 岸 本 孝 子

嫌なこと耳が上手に聞き流す
地に足がつかずたやすく流される
七癖を消したら味のない私
白髪もしわもいとしくなってきた
葬式のチラシはすぐに捨ててます
空手形もらったようなマニフェスト

三田市 久保田 千 代

まだ恋もしたいと思う紅を選ぶ
検査入院一時停止という歩み
鈍行に変えるゆとりを取り入れる
点滴の落差をじっと見つめてる
過ぎ去りし季節に添うていく命
消されるを知って鉛筆よくはしやぎ

鳥取県 山 本 正 光

夏バテも無くて八十路の笑い皺
酒タバコ止められませんが逝くまでは
一日を愉快にすごす趣味の会
やせ腕に重い旨い大ジョッキ
大盃に鯨泳がせ一気飲み
穏やかな長寿目差して生きている

西予市 黒田茂代

死ぬるまで歩きたいからウォーキング
わたくしの美学背筋も膝もびん
食いはぐれぬ顔の黒子を信じてる
句作りをやめたらわたし木偶になる
円形ハゲ見つけてくれた美容院
名水の力トンネル阻止させる

豊中市 水野黒兎

ラップでは包みきれない苦い嘘
ルノワールの女体豊かに秋たわわ
百薬の長が良く効く腹の虫
通行禁止ただいま奥歯治療中
絵模様の違いでテロをするヒト科
結果待つ医院鶏頭赤々と

美祿市 安平次弘道

用意した仮面にいつかだまされる
捨て切れぬ過去が叛旗をひるがえし
物思いにふけり優しくなっていた
風の音水音職は捨てました
解放感ライバルだけはほめておき
自己欺瞞がとつてもうまい胡蝶蘭

松江市 津川紫晃

揺れ止んだブランコ夕陽座つて
仲よしになった病氣と剥ぐ暦
聞き役の方も気長に座りこむ

生きるとは昨日も今日も罰ゲーム
右へ左へただいま老化進行中
死んだふりしてはいられぬ不況風

四條畷市 吉岡修

曲がるところ間違つてから戻れない
輪の中にも色分けついでくる
抜擢の噂仲間をなでてゆく
ていねいな字で欠席と書いてくる
七人も敵を作った覚えはない
あの甘い真つ赤な嘘にけつまずく

吹田市 穴吹尚士

金婚に危機もあったと笑い合う
良心が狸寝入りをして困る
腹いっぱい食べたなら消えていた悩み
ユニクロの安いおしゃれにした財布
ロボットなら部品交換できるのに
底打ちと言うが底抜けかも知れぬ

枚方市 伊達郁夫

ローソクがあるうち母と会っておく
ついて来る影にどなたと聞いてみる
思ひ出を食べて余生を膨らます
妻の掌の中でやんちゃなことをする
顔中を欠伸にしている昼の月
ドンキホーテ君の強さを妬いている

八王子市 播 本 充 子

代表を代わってくれる方求む
一番機格安ツアー詰め込まれ

カラオケも上手いが世渡りも見事

風船も坊やの指に戻りたい

猫メシは好きだが猫は大嫌い

阪神の三連勝を聞く樞

三田市 堀 正 和

長い皿焼いてサンマの秋を待つ

豆ごはん好きな男の頼りなさ

食卓へラップ並べて妻出かけ

冷凍庫開けると妻の非常食

デパートの駅弁足りぬものがある

新米とサンマ日本の味がする

美作市 大石 あすなろ

いのち充電手足伸ばして大の字に

アプレゲールなんて言われた事もある

甘かった余生の構図ひき直す

国訛り名刺がわりに持ち歩く

丁寧にしまい過ぎてた探しもの

秋が来て森の恵みのある暮らし

寝屋川市 籠 島 恵 子

エールを送るなんにも出来ぬものだから

イメージの通りでなくてすみません

運動会まだ柿の実が熟れてない

残された時間と対峙してしまふ
いつからか目礼だけになった人
人伝てに聞いた言葉があたたかい

大阪市 升 成 好

力ない拍手だきつと義理だろう

さりげなく料理をほめて仲直り

手をあげてここだここだと秋を呼び

本当の友は五本の指で足り

眠りたいのに点滅の悔いばかり

新品を買おうと顔出す探し物

松江市 小 川 注 湖

美容院客の化け方知っている

半分は探しものするのが仕事

僕のルール妻はルーズと決め叱る

みえみえのお世辞にわたし笑みもらう

飲み込んだ刺が時々痛み出す

スーパリーのちらしのような嫁料理

吹田市 須 磨 活 恵

しがらみにずっと耐えてる土ふまず

断って十指の先が冷えてゆく

自打球の痛み大人になれと言う

回る日も軋む日もある夫婦独楽

夕焼けの向うに父と母がいる

カーテンを引くのが惜しい秋の月

松江市 川 本 畔

過ちを包んであげる新聞紙
咳ひとつしてから覗く女風呂
気軽な帽子今日も横切る駅通り
梅雨明けて真先に干す足の裏
生誕百年太宰の鼻に傷がある

松江市 松 本 知恵子

エコカーテン日除けのゴーヤおすそ分け
誘導の盲導犬の尾は静か
雲は秋鬼太郎電車孫と乗る
満ち足りた今日虫の音とねむります
どしゃぶりが心地良かったやけっぱち

松江市 安 食 友 子

さあ今日も仲良くしてね布袋さん
楽しくて頼もしいねた模索する
居候気分にはけはなりませぬ
ジグザグで保っていますお嫁さま
念願の手鞠無くした悔恨よ

出雲市 森 茂 美

太陽と向き合う仕事農の友
いたずらの電話に腹を立てている
富士山が背筋伸ばした立ち姿
阿波踊り乱舞の中にある秩序
まだまだ忘れはしない嫌なこと

出雲市 富 田 蘭 水

お神輿を子供がかつぐ夢高く
世が変わる私変わってみたいけど
話し合い黙って聞いてアクビする
台風も出雲大社に遠慮する
さもしいな人の努力をみずひがむ

出雲市 石 倉 美佐子

良い方に考えましよう生き残り
どんぐりの拾い手もないお寺さん
山一つ越せば夕焼まっかつか
恋人とも友ともつかず老夫婦
一番星明日は良い事ありそうね

出雲市 小 白 金 房 子

木戸の橋戻れぬ牛の背を送る
一杯の酒童心をよびもどす
灰汁抜きをされて心が白くなる
畑おえて夕陽と戻る長い影
束にしてわたしの過去を灰にする

出雲市 岸 桂 子

羨望の目で送られる白寿の死
することの一つ金魚の水替える
人柄のB面を知る野辺送り
妥協して妥協しながら歳をとる
近道に思い出がある青春期

出雲市 多久和 敬子

満天の星が私を離さない

あと一人足りないからと選ばれる

人間がロボットの後従いて行く

暑くても熱いコーヒー飲んでいる

寂しい日心の鬼と対話する

出雲市 持田 多輝子

うぬぼれを洗い流した素顔の美

ほんやりとしては居れない一人の灯

ほんやりと追憶つきぬ母偲ぶ

人の名がすぐに出てこぬじれつたさ

歩道橋子供の足はリズムミカル

倉敷市 撰 喜子

子沢山戦争のよう御飯どき

嫁姑のもつれほどきに孫が来る

活動の範囲広がる退職後

家建ててローンの子へと引きつがれ

異端者の一人はいます隣組

美作市 福原 悦子

首を取りまだまだ伸びる葱坊主

物忘れ老いの喜劇か平和ボケ

心ない口出しだった身を責める

皿一枚割って妥協をする夫婦

気苦労はみせず笑顔で介護する

真庭市 国米 きくゑ

高校生クイズ大会老いも湧く

国内最優秀者を賞す知恵比べ

青虫に毒味させてるキャベツ畑

ナツメロで疲れた頭リフレッシユ

ずず虫の鳴き声暑さ忘れさせ

真庭市 福岡 智恵子

気がつけば八十路目の前ああ多忙

うろこ雲郷愁そそる友いずこ

言いすぎて唇さむい帰り道

政権党国旗大事にして欲しい

我が街の日の丸なびくお祝い日

竹原市 石原 淑子

みどりこのえがおまんまるのなか

秋日和笑顔の種を蒔いてます

断り下手八方美人かも知れぬ

日本語のやさしさ孫にねんころり

苦手だと思ふ隣に席の空き

竹原市 時広 一路

プラス思考まだちよっぴりは持ち八十路

同窓会欠席と書く医者通い

元気さは分つてますと万歩計

コーヒーもジュースも共に話し好き

家計簿は妻の入院知っている

竹原市 岩本 笑子

東かがわ市 原 賢

正座していただくまびき菜の命
紅葉の便りは少しずつ秋に
長い道長い休みがあるという
襖絵の紅葉がはらり散るのです
赤トンボ今年の秋は短いね

宇部市 平田 実男

鑑定士贗を掴んだことは伏せ
血も口もなめらかにするワンカップ
踏み切りのない助走路をひた走る
美人にもバラにもプラスしてる棘
絵に描いた餅で食べてる評論家

東かがわ市 川崎 ひかり

判断を親の情けが狂わせる
早寝してさても夜明けを待つ長さ
やり直し出来る若さは宝物
情報で海で浮いたり沈んだり
消防車家でない事だけたしか

東かがわ市 清川 玲子

はやりカゼ旅行足止めされてる
つき放すことも大切子育て記
知らなかった貴方にあつた別の顔
使い捨てカイロのように派遣切り
使いようで超ごちそうになるトーフ

大の字で空をゆっくりみてみよう
人間が好きで愚かな夢をみる
愛ひとつ欲しくて窓をそっと開け
父ちゃんと呼ぶ妻が居る愛がある
二度三度見てもやっぱりはずれくじ

松山市 高橋 宏臣

歯ブラシの上に乗せてる朝の闇
秒針を止めて私の時間帯
最後まで本音は言わぬ秋の月
やりなおし精一杯のラッパ吹く
隣から太郎花子の笑い声

松山市 宮尾 みのり

子や孫でなくてよかったがん告知
屋上の病衣朝日が有難い
あたふたと凡の凡たる生き様で
悪筆の和尚も味が出た卒塔婆
墓参りして一くぎりつけました

大洲市 中居 善信

政権交代見届けていた夜が白む
平均寿命嫌な言葉じゃ無いですか
空き部屋が無いとCT太鼓判
人並みに座骨神経など拾い
ストリートに顔に出てくる若い血よ

高知県 小澤 幸泉

下絵描きまだ人生は青春期

神さまの愛の無情か雨しきり(若き兄連く 一句)

今朝もまだ生きております酔つてます

妻と二人ただベンの音流れ行く

冬の画布小さな夢を描き加え

高知県 小川 てるみ

政変をよそに金魚の丸い息

幸せに慣れて尻尾を振らぬ犬

唐辛子くらしいの意地は持つている

夏バテに羽根をもがれた蟬になる

安静と言うストレスが溜まりだす

唐津市 井上 勝 視

就活に疲れ果ててる親も子も

自惚れに背中押されて米寿越え

振り向けば俺には花の時期がない

足もとと背から醒めてる屋台酒

天寿まで達者が宝粗衣粗食

唐津市 市丸 晴 翠

一つ屋根物を捨てたい嫁と揉め

ダイエットしたのは妻の財布だけ

運勢欄なんとなかなるで行けと言う

子は宝育てた末の宅老所

温暖化季語が探している居場所

唐津市 坂本 蜂 朗

ご近所へ情報走る救急車

大火傷ひりひりひりと生きている

病床の丸太で四日偲ぶ鶴

病院食目は餌を待つ鳥になる

大火傷ひと皮むけた乞う期待

唐津市 山口 高明

転んでも孫が放さぬ焼林檎

薬にも毒にもならぬ不甲斐なさ

夢のない世の中だから夢が売れ

悪党の上前刎ねる方がいる

何所からか都合してくる遊ぶ金

唐津市 樋口 輝 夫

飢えた日の記憶を揺する芋の蔓

八十路坂いまもお酒は修行中

回収日お酒よく飲む家だなあ

回れ右なんどしただろ五十年

方程式解けないままの傘寿坂

熊本市 永田 俊 子

引き出しに何かつかえている小骨

大切にされてる老いの徳俵

仕方なく義理捨ててきて歯が痛い

お喋りへお冷やをまたもつぎに来る

小包みを解くときめきの久しぶり

熊本県 岩切康子

親切で気配り優し茶髪の子
爪の伸び生きてる証切らなくちゃ
留守電の返事退院して済ます
暑さ返り赤いカンナが燃え出した
インフルが多い街なら遠慮する

熊本県 高野宵草

姑として娘を持たぬ嫉ましさ
居酒屋に凶器が並ぶ駐車場
大漁詩みすゞを思う鰯焼く
シャツ代えて汗の疲れに満ち足りる
帰省子に掻きまわされて夏終る

シドニー 坂上 のり子

惚ればれとする歌声で認知症
雰囲気がシャンソンよねとお世辞言う
何だかだ言いつつ倦きず見るテレビ
結局は何を食べても生きている
賢い猫にパソコンできるか聞いている子

砂川市 大橋政良

朝市のイカソーメンに舌つづみ
豊漁の鮭でにぎわう漁港の灯
倒産の噂に暗い街となる
人情の機微に屋台の灯が揺れる
退屈と言わんばかりの大あくび

黒石市 佐藤古拙

イチローの構え孤高の剣に似る
妻の愚痴やむまでしばし爪を切る
情報を交換中の乳母車
こと勿れ主義で今まで生きてきた
意表つく変換ミスに救われる

黒石市 相馬一花

溜め息をつくと少しは楽になる
試行錯誤ばかり結論先送り
番犬のように美人に振る尻尾
遊ばれているとは知らず上機嫌
せっかちとのんき不思議に馬が合う

十和田市 阿部進

いい食材生きる力の源に
年一度据え膳うれし夫婦旅
当たら眠られませんジャンボクジ
普段着で入る温泉探しかて
美しい嘘はやりわりやつてくる

平川市 小寺花峯

賞味期限過ぎてる仏壇のりんご
賽銭が軽くて願ひ遠すぎる
天気予報電車に傘が溢れだす
歯軋りをしてから入れ歯物を言う
貫いた時もあります錆びた釘

弘前市 福士慕情

一人では出発しない縄電車

幸せな日々だと思ふことにする

乾杯の後の拍手が揃わない

数撃てば当るテッポウ持っている

これからは波に任せて浮いている

弘前市 今愁女

四年後は知らぬ存ぜぬチルドレン

日焼けした顔が選挙のパロメータ

百歳が年々増えて少子化で

叢からはやも蟋蟀鳴きははじめ

秋の野にわれも赤いと吾亦紅

弘前市 高瀬霜石

定年の朝だ下駄箱掃除する

騙された数なら他人さまに負けぬ

そつとしておこう計算してる妻

ジョーカーはいつもオンナが持っている

早食いをして腕まくりして 社長

弘前市 高橋岳水

蹴る石が無い舗装路がつまらない

沈黙がつらくて回る風ぐるま

世話役の席はなかなか温もらぬ

神様に無駄かも知れぬ掌を合わす

深々と腰をかがめておく布石

弘前市 岡本花匠

イントロの甘さ辛さに夢補色

終章を読めぬ迷いの老春譜

ほほえみの貌で成仏する願い

トルマリン身につけ八十路越える夢

鳥おどし急かすわが身も粗大ゴミ

弘前市 櫻庭順風

お馴染みに診察されてほつとする

判定の短い時間長すぎる

異変ないかと探し出す聴診器

暴れては生きているさとピロリ菌

カメラから毀れんばかり胃潰瘍

弘前市 須郷井蛙

退院はしたが家族の荷が重し

ボーナスがゼロでも首がついている

貧乏な話知ってる蕎麦の花

寝たきりが増えてどうする長寿国

定年の夫に疲れる食三度

青森県 松山芳生

オクタープ上げて勝利の唄に酔う

目の高さ変えて話が円くなる

割り切れぬ答かかえた日の孤独

渦潮の岬へ何度立ったたら

筆勢でわかる心の置き処

さいたま市 星 野 育 子

追い風が新風になる新政権

人生のクリーンヒットは打つチャンス

新車輛吊皮高く差別する

自販機にお礼言われて返事する

回りで見るほど気楽ではない独り

東京都 清 原 悦 子

真っ直ぐにひたすら歩く靴の減り

肩凝りのツボ親指が効いてくる

穏やかな人がいるから場が和む

来年に備えて仕舞う夏の種

こちらから挨拶をして打ち解ける

東京都 岸 野 あやめ

アイディアは風呂で浮かんですぐ消える

知られたくない人が知る内緒ごと

ギャンブルにある鼻の差と運の差と

年齢ひとつ増える日が来る秋景色

人形を抱いてあやして認知症

府中市 藤 岡 ヒデコ

見渡せば前期後期の高齢者

団塊のパワーみなぎるOB会

墓参りうながすように彼岸花

昔むかしを栗をむきつつ思い出す

本音から伝うやさしさしみじみと

府中市 岩 本 雅 代

孫嫁の言葉うれしいいい育ち

思い出に小さな春を抱いて生き

一日の迷いが晴れる茜空

人の身をうらやむ事もないと読み

床飾り金庫のカギは開けたまま

武蔵野市 亀 井 円 女

我が胃も腸も長生きさせてくれるらし

嫁とはいっても親子に見られえびす顔

そら打て走れ声を限りにばあさんも

毎年殖える皺は宝よ勲章よ

孫十人はいまアラフォーで自慢の子

横浜市 菊 地 政 勝

個性ある庭へ散歩が立ち止まる

鏡拭き老化の具合確かめる

老衰の犬を労り話しかけ

無意識に言って気が付くどっこいしょ

考えた洒落に手応えない無念

横浜市 小 野 句多留

完敗の自公罪人ではないぞ

政変に市民煽ったマスメディア

盆明けはお休みですの美濃の町

不本意な残暑が秋に同化する

朝型と夜型九時に交差する

富山市 島 ひかる

売り物の桃がみんなに触られる
最後には怨んだ神に助けられ
やんわりと結んでいます赤い糸
お願いへ感謝のことば付け加え
あの山もこの山も知る古帽子

可児市 板山 まみ子

ランチしてパワー全開女の輪
こんな日もあるさ落ち込む日のワイン
いくつもの用事はできぬ古希の坂
しのぎよくなれば寂しい秋の色
新品のテレビをつけて昼寝する

静岡県 蘭田 獏 杏

忘却と高笑いして日々を生き
さあ来いと根っこどつしり張った松
本物と信じ込ませる桐の箱
七転び一皮むけて鳩になる
松の根は岩の割れ目で生きてゆく

大山市 関本 かつ子

ブランドも無縁で悔いのない家計
熱燗になって食卓新秋刀魚
福祉バス有難いけど遠回り
名作も少し黄ばんで百五円
筋書きのようにはいかぬ余命表

大山市 吉田 幸子

もぎたてのトマト親子で丸かじり
楽しみを奪い取ってのお節介
やんちゃにも振り回されぬ母の肝
引き際も見事姑の家事さばき
行列にうんざり蟻も道そらす

大山市 金子 美千代

よく言ってくれたと風を避けながら
ペアカップ片方欠けた所在無さ
姑の役も結構難しい
先生より詳しい人の居る講座
罪のなくしゃみへ白い眼が刺さり

愛知県 早川 遯 行

咳をして周りの人を怖がらせ
成りたくはない老人になつていく
百円の玉子へ妻に駆り出され
海外へ行つた自慢を聞き飽きる
歩信号ひとりで渡りスミマセン

京都市 榊本 宏子

だんだんと大胆になる目の化粧
支給日が六回すめば十二月
青春キップせめて高めの地酒買う
大切な祖父の国旗が粗大ごみ
親切のつもりだろうがほつといて

京都市 坪井孝一

乾杯に紙のコップは軽過ぎる
美人とは言えない妻は只陽気
ナツメロでボクの青春確かめる
いやな夜はモーツァルトを聞いて寝る
じゅげむじゅげむ浪華の寄席は天満宮

京都市 西村益子

ギツクリ腰予定表にはバツだらけ
携帯と小銭を持って今日の風
鰯雲もうまい空気も栄養素
隠しても顔に出てますお父さん
親子でも女同士の本音だし

京都市 三宅満子

お茶よりも本音引き出す酒にする
結び目を緩め大局乗り越える
直感で母が見破る子の異変
あふれ出る水に気づかぬもの想い
落選の葉書律儀に詫びてくる

岡岡市 井上森生

クワガタも金魚も孫の置き土産
コツコツと珍アイディアが五百件
一日に一つ感謝の句を捧ぐ
幸せは健康自慢のツボ探し
手も足も顎も鳴らして若返る

長岡京市 山田葉子

身辺の整理まだまだ急がない
見抜いてるくせに言い訳きいてる
賞味期限切れそう重い腰をあげ
白鳥の王子待っているとも思えない
正念場吉と出るまでカード切る

八幡市 結城君子

出来るだけ生きて寿命は神まかせ（親友の旅だち）
弔いをあきらめさせたわが手足
六十路ゆく趣味のふたりは若かりし
わが胸に大穴あけて貴女どこ
あの世のことも夢で教えて下さいね

大阪市 平嶋美智子

待てど来ず手帳の日付ああ明日
ピカピカの靴が弾んで会いに行く
やさしかった君の座ポツン空きしまま（娘婚逝く 3句）
けがれなきま白く太く君が骨
逝きて五日 子は模擬験受けに行き

大阪市 榎本舞夢

責任を果たした笑顔母は逝く
約束をストンと用も忘れてる
待合室人それぞれのドラマあり
母の愚痴昔良かったことばかり
期待して大きなカバン持つて行く

大阪市 古今堂 蕉子

小さな嘘バランスクずす基となり
もういいと言われてもする耳掃除
かじかんだ手で去る人を引き留める
言い訳はするなど父の小言聞く
常識にしばらく丸く小さい人

大阪市 森田 明子

私を生まんと独り旅に出る
スリラーのような新聞記事を読む
雑踏に潜む動機のない殺意
バラン스가ちよつと崩れた温い顔
私が試されている曲がり角

大阪市 大川 桃花

鋳型から出てきたような詫び言葉
あの世へは笑い転げて行きたいな
報酬は満天の星ボランティア
湯水のように使うお金は誰の金
水害の始末に水の要る皮肉

大阪市 谷口 義

二番目に生まれてお目溢しもあり
おにぎりは二つ位が丁度よい
友だちはしつかり二人確保する
血圧のくすりを二錠飲んでいる
目も耳も二つずつあることはある

大阪市 田浦 實

海洋国だ思えば日本でつかいぞ
掛け替えがないと言われりや若返る
緑滴りまた若返る生駒山
老いを敵と思えば老いは牙をむく
駅弁が宝石箱に見える旅

大阪市 板東 倫子

コンコンとお尻叩いて買う水瓜
羞恥心持たぬ女をネタにする
お招きへドレスバッグもレンタルで
日本の文化冷酒に冷奴
曼珠沙華妖しく続く墓の道

大阪市 津守 なぎさ

戎橋なみのラッシュにあう箕面
入道雲あの迫力に逆らえぬ
車窓より稲穂キラキラ満ちたりる
留守電の敬語にわかに他人めく
胃カメラに食生活をばらされる

大阪市 奥村 五月

欲捨てて気楽に生きるこつ覚え
取り出せぬ愚痴がポツケで泣いている
他人の子もしつかり叱りほめてやる
青テント元は堀江の旦那さん
献体の約束ならばまだできる

大阪市 川 端 一 歩

齒が立たぬ露伴鴉外再挑戦

百歳の四万人へ二人とも

チエンジする歴史は民の蜂起から

旅日記こころの痛みには触れず

地を這った落葉が語る派遣切り

大阪市 津 村 志 華 子

満月にちよつと囁くことがある

髪切つて古い頭に風通す

予定外の物まで入れたエコバッグ

もう傘寿まだ傘寿だと翔んでいる

アリバイは駅までだった影法師

大阪市 福 岡 末 吉

ふたり坂手取り足取り声をかけ

窮すれば一旦刻を止めてみる

口惜しさこらえ大きく咳ばらい

病み上り庇ってくれる影法師

我ながら稀に閃き笑いこけ

大阪市 熊 代 菜 月

神だのみまたしてしまふ甘えぐせ

おかたづけ骨折り損にまた終る

友情を信じて乗れば泥の舟

こづかれて未熟な私腹をたて

ボケたかな いいえ私ボケてません

大阪市 小 谷 集 一

上機嫌自慢話が止まらない

ポケットの底に隠してある明日

福の神一度も会ったことがない

記憶より想像力を武器とする

捨て石を打った効果がまだ出ない

大阪市 伊 藤 博 仁

目覚めてもベルが鳴るまで床の中

早々と粧し込んでるバースデイ

わだかまりすつきり流す酒を酌み

わらび餅来ました軽の拡声器

健康でばけず暮らせば子らは寄る

大阪市 江 島 谷 勝 弘

娘のピアノ物置台で生きている

木訥で生きてきたけど損はせず

えんえんと飲んで語れる友が好き

登るより下りの方がしんどなる

お年寄守る政治を期待する

大阪市 吉 村 一 風

揉めごとに間に合うかして呼びにくる

不器用も器用も老いたクラス会

平凡に慣れて小さい怖さ知る

情報がほしくて通う散髪屋

落ち込むと笑顔の妻が背な叩く

大阪市 中村 れんげ

薄皮を剥ぐが如くに暑さ去る
消える身を風と遊んだしゃぼん玉
常識をくつがえす本読みふける
原点に戻って今日を生きなのおす
秋の空心ひらいて軽い肩

大阪市 岩崎 玲子

月曜日花を入れかえリフレッシユ
鼻唄が出てきたわたし軽くなる
時時は電子音にも腹が立つ
髪の毛の抜け方加速してきてる
ストレスが秋を呼び寄せ食べ通し

大阪市 原田 すみ子

年齢に楯を突いたり甘えたり
不眠都市空の青さを忘れてる
食後には敵も味方も一休み
変えてみる相手じゃなくてまず自分
亀でいい努力はいつか花ひらく

大阪市 神夏磯 典子

人生の半分川柳に埋まる
足腰はガタガタなのに川柳熱
人生の苦楽はすべて川柳だ
日本を変える川柳作りたい
川柳で返事をすれば喜ばれ

大阪市 小泉 ひさ乃

年輪が娘気丈に変えていく
優しさを残し足跡消した風
握手した温もり信じ待つのち
おすそ分けゴーヤの貰い手がいない
イケメンブーム売れる男性化粧品

大阪市 伏見 雅明

社に背き内部告発する勇気
終電に遅れにわかに酔い醒める
毒少し混ぜて薬の効き目上げ
職おりて今日の予定を妻に聞き
母親の温みどの子も忘れない

大阪市 川原 章久

妻の目が届かぬ方へ足が向く
ベラベラと喋り過ぎです浅い思慮
秋刀魚焼く煙と秋は急ぎ足
木綿針で堪忍袋何時も縫う
幼稚園どんな芽になる花になる

大阪市 澤田 定子

嫁姑本音おさえて和やかに
ブランドものの興味ないよな振りをする
浴衣着の頃あたりに視線向く
運動会稽古真剣園児達
ドラッグストア同時向かいに店開き

大阪市 榎 本 日 の 出

転んでもまだ起きられる起きられる
出来ますと自分で呪文くり返す
自己診断つま先飛びでためしてる
十年も着ない洋服ぶら下がり
年とって余計仲良くなる姉妹

大阪市 小 糸 昭 子

クーラーをつけるつけぬで別室だ
パソコンもネットもいらぬ生きている
寝たきりの夫の言葉ありがとう
一つでも嬉しさあれば心満ち
追伸のあとをじっくり考える

大阪市 松 尾 柳 右 子

誕生日来て欲しくない齢になり
ていねいに洗い入歯に感謝する
あかね雲早朝の空カラス群れ
定年後旅行の夢を見つづける
生意気に夢を待ちつつ日々送る

大阪市 井 丸 昌 紀

万遍無く熱い視線を投げておく
もうかりまっかばちばちでんなさえ言えず
キッチンで妻の機嫌をじっと聴く
水のように生さればきつと楽しかる
ぎゅうぎゅうの電車体温攻めてくる

大阪市 岡 本 久 峰

虎の子をすっかりはたく退院日
血管に代えてハートにカテーテル
孝心の篤い我が娘にすがりつく
無病息災自慢の鼻が折れ曲がる
生かされた喜び胸に小商い

大阪市 岩 崎 公 誠

曲り角とわかつていたがぶつかった
偉そうに言うが互いに空財布
人生はいろいろという決め言葉
拍手などないが折々自分褒め
笑い過ぎた笑い袋が捨ててある

大阪市 池 上 清 治

紐ゆるいパンツ一日落ち着かず
辞令より噂で早く伝えられ
見もしないチラシメモには役に立ち
取締まり緩むと二輪駅に満ち
回覧板地域で今も生きており

大阪市 坂 裕 之

譲るのか妥協するのか笑ってる
改めるきつかけくれた負け戦
煽てたら上手に乗って伸び出した
声かける余裕もできてひとり立ち
境界を少し譲って値打ち上げ

大阪市 中村 叡子

一票の重み明らかこの選挙
初めてのインフル油断せぬ暮し
超長寿ベッドの上は情けない
何をする三日も対話無く思案
自由なるひとりになって泣いている

大阪市 近藤 正

気前いい男の後について行く
少し距離おいて互いに支え合い
歳時記に鶴彬忌がきつと載る
いがみ合い酒でほぐしていく仲間
秋こそがおしゃれセンスの見せどころ

大阪市 鶴田 遠野

休肝日ビールもどきを胃に流す
昭和史の傷み忘れぬ夏の雲
オレオレと妻に内緒を子に頼み
酒二合喋りの妻と渡り合う
自然増あきらめて買う養毛剤

和泉市 横山 捷也

相植を打って仲間と見なされる
カーテンの隣病名違う人
ふるさとは疎遠永代供養の墓
蟻の列何か定めがあるらしい
優しさが違う何かを隠してる

泉佐野市 山本 蛙城

重陽の節句さておき布団干す
落ち込む日枝雀の芸が目につかぶ
サンマ焼き遠慮要らないとこに住む
生きてやるアツキスカの戦友の分
A型の申でちょこまか浮気性

池田市 栗田 久子

死んだふり蝉はみごとに飛び去った
敬老という日が恙無く過ぎる
せつなくてことばにできぬ事詫びる
言い訳をさせて下さいわたしにも
許すとは誰も言わないだけのこと

茨木市 藤井 正雄

古き良き時代伝わる藁の屋根
響き合う音符互いに抱く絆
過疎の里祖父母は古巣離れない
二日間静かで長い妻の留守
夜遊びの言い訳歩幅縮み出す

交野市 山川 日出子

故郷の幼い頃を語る喜寿
中国に漢字カードを持って旅
ダンサーの友のパワーで若くなる
満月に手を振って寝る三歳児
孫たちに喜寿人生の紙芝居

河内長野市 黒岩靖博

終戦後代用食にだんご汁

悪友と言いつくし居る猿芝居

母さんは何時にも怒ると子が抗議

手のひらで泳がされてる定年後

北の国仲間はそれの千切れ雲

河内長野市 水谷正子

給付金孫の就職祝です

口下手が冗談言う座が白け

少しだけたしなむ酒が荒れている

立ち話貴女の事は褒めといった

少しづつ善意集り車椅子

河内長野市 坂上淳司

奈良漬に酔える幸せ不幸せ

童謡に手を打ち出した二度重

国産の野菜の種は外国産

特産と威張る関鯖回遊魚

紅少しさした女房に惚れ直し

河内長野市 井上喜醉

秋晴れへグランドゴルフ老いの夢

でこちらの老眼探し笑われる

甘党が街の死角で息を抜き

街角の茶髪へ世間の目が馴れる

失礼な挨拶トイレで立ったまま

河内長野市 植村喜代

昨日のように思い出す戦後

一ぺんに自由になって習いごと

戦争で残った子等も減って来る

ツーカーの友居て戦後語り合う

八十路来て淋しいものを感じだし

岸和田市 井伊東吉

早や雲は秋の気配を漂わす

お手並を見ようじゃないか新政府

岸和田のだんじり今や全国区

葬儀屋も不況安値のチラシ増え

早々と来年の題迫られる

岸和田市 岩佐ダン吉

よく転ぶ男が軽い口を持つ

当然のように三度のめしを食う

自給率叫び棚田に人が無い

心まで錆びてなんかはおりません

星ひとつ見えない闇に彬逝く

岸和田市 米富淳風

夏疲れ目が引っ込んで出てこない

短パンの足日焼けして夏終わる

好物は蟹とのたまう孫みつつ

秋の庭油断の足に蚊が止まる

だんじりや男の熱気そーりやそりや

岸和田市 雪 本 珠子

道端の小石に今日も教えられ

川柳が原動力になつてゐる

人生の四季もぼちぼち冬支度

耳澄まし風の小言を聞いている

猫つきでわたし貰つてくれますか

岸和田市 林 力 子

傘一つ二人は清いまま別れ

土砂降りが未練の傷を流し切る

バリバリの現役なのに職がない

難しい漢字をこなす電子辞書

受け継いだ技をこなして三代目

岸和田市 森 元 ふみよ

盆帰省土産一つで五日間

初恋の逢いたい人も喜寿祝

勢いで勘定全部払うはめ

得手勝手記憶がないと惚けたふり

帰省して改めて知りほれ直す

岸和田市 土 橋 房 枝

愛なんて安定のない季節風

日本語がへたな若者どこへ行く

若い娘の遠慮のいらぬすわり方

メンバーにはがらかな友一人いれ

はがらかさモットーにして崩せない

岸和田市 堤 檣 代

小窓から笑つてくれる百日紅

おしゃべりのようなカラオケどこがいい

選挙すみドラマのような泣き笑い

保険切れなぜか寂しい誕生日

老人のホームの前に葬儀場

岸和田市 原 さよ子

老い一人どの坂道も険しすぎ

やる気ない背中丸くなるばかり

傷心の肩に置かれた手の温み

傷心へ元氣を出せと梨が着く

さわやかな歯ざわり梨が元氣呼ぶ

堺市 宮 本 かりん

そこそこに楽しく生きてゆく余生

ぶらんこ二つ余韻楽しむように揺れ

間をおいた丸い答えに諷められ

人間をみがき損ねて喜寿となり

確信があつて言葉に出るパンチ

堺市 村 上 玄 也

説明書読んだけれどもギブアップ

郊外と聞こえは良いが片田舎

豪邸の横につましいマイホーム

美女の前気取つて喋る標準語

天気予報確かめてからする洗車

堺市 大久保 のん子

移り気でライフワークが定まらぬ
あきらめたはずのはむらをもて余す
どん底を知った涙のあたたかさ
消しゴムで消せない過去をもて余す
逃げないで作り笑いをする打算

堺市 荻野 像 山

人のブレ言えても言えぬ私のブレ
千鳥足上司の所為にする夫
外されて口忙しない総入れ歯
バスツアーガイドの顔も旅のうち
土石流昨日通ったツアー道

堺市 柿花 和 夫

見もせずに傷は浅いぞなどと言う
鶴橋で匂いに勝てず途中下車
反応を気にせぬ振りの毒舌家
一応は財布出してるレジの前
音声を切ってもトラは負けている

堺市 奥 時 雄

大阪が狭いか知事が飛びまわる
京都から寺も会社も動かない
舞妓さん白地の上に顔を描き
神戸牛どこでそんなに飼ってるの
十津川の秘湯で鯛の活け造り

堺市 齋 藤 さくら

妻が留守とたんに風邪を引いている
孫の守りだけが役目と念押され
飽きもせず喧嘩もせずに共白髪
借金がないだけ楽と言うてます
目と耳があれば日本狭い国

堺市 大隅 克 博

気まずさのものを辿れば我が心
通夜の席笑ってるやつ偶にいる
結構な品と開けずに礼を言う
案外に出席率のいい法事
エイヤーと投げる柔道見てみたい

堺市 加 島 由 一

はしかだと思ふ息子の反抗期
妻の風邪そんなことより今日の酒
蟬の殻どんな修羅場があつたやら
下り坂転けたら何もかも終わり
逆鱗に何が触れたか妻無言

堺市 山 本 半 銭

水茄子の味は変らず姉妹老い
美しい嘘を自分に言い聞かせ
妥協した痛みをずっと引き摺って
スニーカーが見つけた森の玉手箱
公園の散歩に鳩も早起きだ

堺市 矢倉 五月

ささやかればあばの財布また緩む

酒好きという相性も家族の輪

美女ころび見ぬふりしよか手を貸そか

ふる里が産地とあつて買い過ぎた

ほどほどが出来ず生傷またひとつ

堺市 近藤 豊子

にがうりのにきびほこぼこはじけそう

スイーツになっておしやれなさつまいも

あきなすび おーい嫁さんどこにいる

池袋の駅がみていた関ヶ原(2009・8衆院選)

千里の道へ一歩ふみだす靴の音

堺市 源田 八千代

ハンバーグ嫌いな野菜丸め込む

嫁と孫と女三人京の旅

捨てなけりや身辺整理捗らぬ

のろいけど口では勝てるおばあちゃん

我が身より猫の症状気に掛かり

堺市 西村 りつえ

山動きなめたらあかん浮動票

遊びすぎ型崩れした夏帽子

視野変り無駄でなかった遠回り

熱くてもきつねうどんが性に合い

飛んで飛んで空想追つて逃げた恋

吹田市 大谷 篤子

病室で基礎化粧品だけしています

逆らわず生きて来たので疲れ出る

孫達と面白がつて生きてみる

ポイントを集めに今日もお買物

半身浴くつろぎすぎて寝てしまう

吹田市 太田 昭

自分史の汗と涙は涸れている

研ぎ澄ました正論いつも疎まれる

酸欠の愛に酸素を補給する

一が抜け二が抜け今はおれ独り

貧乏に慣れ後期高齢には慣れず

吹田市 野下 之男

吹く風を気にもかけずにこけました

イメージが溶けてしまえばただの人

相合い傘真似でいいからしてみたい

あの人が真ん中に居るクラス会

報酬があるかないのか蟻の列

吹田市 木下 敏子

花の夢齢に関係なく開き

髪染めて三面鏡をのぞき込み

同じ齢なぜあなただけ早く逝き

耐えて来た肩にやさしい夢を乗せ

気がつけばひとりぼっちのちさい秋

吹田市 瀬戸 まさよ

ビル林立お墓のように見えまする
本の山二束三文世の無情

落葉踏む音色恋しい秋の山

パリ発の服の長短まどわせる

片付けは捨てるとサツと片が付く

高石市 浅野 房子

律儀者なんです私昔もん

年中行事草臥れました飽きました

有耶無耶にした方が良い事もある

日に二膳朝はパンです生きてます

言われたらそんな気になる妥協癖

高槻市 峯村 勲弘

共白髪愛を奏でるコンチェルト

勝ち負けは所詮この世の中のこと

天の時風を生かして与党の座

折れてから悟る無力の天狗鼻

字の乱れ悩む心は隠せない

高槻市 安田 忠子

圧勝の民主党ちと不安です

冗談に本音も少し混ぜておく

しどろもどろ本音つかれた隠し事

今のいま生きる幸せ噛み締める

ジャニーギター大好きでした若かった

高槻市 執行 稲子

餌やれぬお婆犬にも舐められる

ころころと笑って転ぶバースデー

強そうで蛇となめくじ弱いボク

ジェットコースター平気と言った嫁の悲鳴

ピンクのヘアー似合った頃の追憶よ

高槻市 生田 義一

幼な子の笑いに勝る葉なし

傘寿過ぎ昼寝日課の仲間入り

手術跡かくしてそつと露天風呂

お互いに耐えて来たねと老い二人

ドンが鳴り候補お国へ一目散

高槻市 富田 美義

弁解の言葉を拾い恩を売る

不況なりに筋書き直し凛と生き

動揺を隠すお掃除なべ磨き

産声に老いもドラマの幕を開け

有りったけ持たせて母は畑しごと

高槻市 左右田 泰雄

押ボタン一つが決める運不運

流し目の誘いに乗った軽い腰

古き良き時代を偲ぶセピア色

お隣のデイナーがわかる換気扇

頷いて相手を立てる聞き上手

高槻市 井上 照子

にくしみのからみついたか彼岸花

よく生きた印に今日はお赤飯

白い髪染めても切っても伸びてくる

二時間を歩き続ける訓練だ

政権交代民の財布がふくらむか

高槻市 佐甲 昭二

のろのろとしながら的外さない

はつらつと俗論を斬るベンの意地

合併で市になる故郷他人めく

一球を遊んで打者を惑わせる

ストレスが溜まりからくりよく軋む

高槻市 乙倉 武史

高き支持鳩山政権巢立つ秋

ぬるま湯を反省自民甦れ

ざくしゃくの世に人情も枯れかける

すぐやらにやすぐに忘れる老いの坂

底力見せて羽搏くタイガース

高槻市 指宿 千枝子

夏去って旬の秋刀魚で元氣出す

ベルト穴一つ弛める昼休み

雨だれを聞いてコーヒー飲んでいる

好きだとも言えず初恋通り過ぎ

生きている今を大事にして暮らす

高槻市 杉本 義昭

ありがとう飾らず言えるいい言葉

母さんと笑える窓を開けておく

いい汗をかいてる君に嘘はない

玉の汗男の意地が見えて来る

きつと咲く荒波越えた君だもの

豊中市 藤井 則彦

ほくそ笑む豚へヒト科はマスクする

大阪弁使いたくなるたこ焼き屋

つなぐ手もすぐ緩み出すハネムーン

伝令に走る球児の誇らしげ

裁判の雰囲気変えたワンピース

豊中市 松尾 美智代

風にさそわれ歩いていますペアシューズ

月の光冴えてだんだん高くなる

生きてきてまさかに何度遭うだろう

期待してまた背かれる世の習い

焦ったら見えてた物が消えている

豊中市 江見 見清

年寄りに見られほどほどにと言われ

捨てるものたくさんあると思うだけ

妻の愚痴気にかけながら買う土産

歩を合わせ歩いてくれる人がいる

僕の殻歳とり過ぎたので捨てる

富田林市 片岡 智恵子

寝屋川市 森

茜

百聞に勝る一見今日の旅

価値観の差を結婚にしばらくは

向かい合う座席目線がむつかしい

しみじみと演歌聞くのは夜がよい

ガラクタが邪魔で困って捨てられず

富田林市 中井 アキ

ポプラ並木告白したい人という

矢面に立ついささかの恩返し

鬼灯が弾けて里の父母を恋う

捨ててきた里のスキに逢いにゆく

温泉だけあればごちそう要りません

寝屋川市 富山 ルイ子

風呂洗い自分のためにして元氣

皿洗い器に入れて今夜の役終える

二時間も昼寝夜中は闇に座す

それぞれに一病持つてまあ元氣

夏バテで倒れる歳を忘れてた

寝屋川市 平松 かすみ

電子辞書 脳年齢もみてくれる

与野党が代わりお手並み拝見よ

バケツ持ち立っていたひと金バツジ

やっこさ背広一着捨てました

盛り合わせ一人前で差し向かい

父の振る帽子よ駅が遠去かる

溜息か愉快かミイラ展の闇

トランペットひびいて鼓動おさまらず

私の郵便受けは日々多忙

痛むからジョークを言ってみたくなる

寝屋川市 森田 麗

幼児が頷いて聞く黄泉のこと

沈む陽に明日の風向き賭けてみる

もう一度二十歳の顔で会う予定

鬱の日は私の影が踽いてる

貸した方が気になり出した一ヶ月

羽曳野市 酒井 一壺

すんなりと反省されて拍子抜け

遺産なし貸し借りもなく幕を閉じ

妻の影だけは死んでも離れない

裁いても裁き切れない人の罪

好奇心もしやもしやの夢を追いつ

羽曳野市 福田 悦子

紅筆を持って女を取りもどす

秋の絵にミレーの影が見え隠れ

人生の谷間で拾う人情味

面倒見いいから人の輪が出来る

震災を忘れないでとルミナリエ

羽曳野市 三好 專平

当選のためなら自民党も捨て

スーパ一の五時を待つてるおばあさん

味噌汁にパンをひたして食う朝餉

夏枯葉あまいことばにだまされる

鳩よりもカラスが増えたゴミの国

羽曳野市 安芸田 泰子

待つという幸せあつて種を蒔く

我儘な暮しで時間追いかける

本心を言つて嵐を呼んでいる

捨て台詞残して蟬が逃げて行く

夕立の重さに耐えるバラの花

羽曳野市 永田 章司

大喧嘩仲直りして無二の友

向い風顔パス効かぬ総選挙

五十肩古希を迎えて病んでいる

平穏な今日に感謝の終い風呂

こつてりと油しほられ縄のれん

羽曳野市 吉村 久仁雄

常識に背くと明日がほほを寄せ

マニユアルに背くと客の笑みが増え

平熱で育て夫婦の愛枯れず

まっいいかで生きて重荷を軽くする

正論はいざの時まで置いておく

羽曳野市 吉川 寿美

まな板にのつた夫をさばくメス

びつくり水時々差しに来る次男

逢うたいたみも逢えぬいたみも知つて老い

叩き売りヒョイツと寅さん出て来そう

ふんふんと聞くとめどない友の愚痴

羽曳野市 徳山 みつこ

涼しさが私の細腕立ちあげる

星月夜テンカラットもかなわない

婚活をいわずにおれぬ老婆心

鴉にも人にも内緒ごみ袋

三食は一緒にスリルありません

東大阪市 久米 奈良子

ある時はだっこにおんぶ願うなり

鶴折つて鶴に想いをうちあける

咳のわけ聞きたい咳をもて余し

かけかえた時計の位置にまどわされ

ようやくに階段上る杖たよる

東大阪市 佐々木 満作

オレオレ詐欺信じた母を責められぬ

人のエゴ聖なる地球脅えてる

親切を装う人に近付かぬ

無口だが油断のならぬお人です

リタイアの夫支えた妻の労

東大阪市 北村 賢子

それなりの幸をおっとり生きている

酔うほどに仮面剥がれて来た美人

クリームも太刀打ち出来ぬしわたるみ

少年の前途洋広い天

満点の妻がいつでも居てくれる

東大阪市 笠井 欣子

反応のない妻看取るのが日課

いざ米寿これまで通り生きるのみ

箸二膳洗って今日もしかと生き

足の爪一人で切れる有難さ

面倒を掛けないように翔んでます

東大阪市 米田 水昇

会うは別れいつかほどける赤い糸

大空を見上げ生き方雲に問う

惜しい友なくし一人のウォーキング

他人の空似恋しい人をなつかしむ

孫描く小鳥は声も入ってる

枚方市 安達 忠央

百年に一度のからい世に生きる

広い海みんな赦せる気にさせる

ゆるめたり締めたり妻の気働き

やんわりと伝えて急所突いてくる

喋り過ぎ大事なことは伝わらず

枚方市 寺川 弘一

よく光る角度をダイヤ知っている

車間距離詰められなくて片思い

妻は魔女安月給で切りまわす

オヤ鬱の仮面ですかと休肝日

長生きがしたくていつも遠回り

枚方市 二宮 山久

幸せを飲みほす妻と缶ビール

幸せは妻いてくれる万歩計

老い知らぬ旅は道づれ夫婦旅

ライバルをぬいて東京大舞台

朝顔が咲いて輪の中両隣

枚方市 二宮 紫鳳

夏バテもなく活躍の万歩計

足どりも軽くおしゃべり女旅

満月を愛でて手酌の虫の声

たおやかに揺れてコスモス夫婦旅

秋風を切ってさわやかツーリング

枚方市 森本 節子

老姉妹話し合うことたとあり

カウンターの向こうから年尋ねられ

どうしてもメール打ち方消化せず

縁の下に白い蛇見た幼い日

いい曲を聴いた夜の夢甘い夢

藤井寺市 増井 ヨシ枝

柿の実をつるりと剥いて母の味

美しい切手はわたし宛に出す

口うるさい妻に逝かれて呆けはじめ

同居して苦しい嫁の誉め言葉

サルスベリ咲いて思いは鶴彬

藤井寺市 伊藤 アヤ子

もう少し頑張るつもり支えられ

ハンカチが一枚減った秋の風

後悔をくり返しつつ子を育て

赤とんぼ球児が去った甲子園

この人の裏がないのに惚れ直す

藤井寺市 津田 シルク

高笑い笑いのサイン出たらしい

竹トンボ街へ向かってとびたがり

秋風に中傷などは似合わない

今どきの案山子にお洒落負けている

まだゆとり犬も案山子もいいの着て

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

愛情で入れた一番うまいお茶

投函をしてから悔んだりしてる

風邪ですと言えばだあれも寄って来ぬ

気がつけば秋はうなじに迫ってる

何回もお辞儀気持を伝えたい

藤井寺市 俣野 登志子

一人っ娘が一人っ娘連れ里帰り

夢でいい亡母とのんびり旅したい

震度6裸足で飛び出すのは夫

威張ってます後期高齢元氣なり

夫待ち子を持った頃華でした

藤井寺市 若松 雅枝

虫の音が途絶えて嵐来るらしい

秋海棠今年も巡る夫の忌

野仏の周り取り巻く曼珠沙華

お仲間が出来て嬉しい秋の旅

ツアー客食後は各自飲み薬

藤井寺市 高田 美代子

落書きをするわたくしのヒマつぶし

紅すこし足したら消えた青臭さ

見覚えのある駅降りてみたくなり

仮名で書く漢字忘れただけのこと

ハンカチーフ少しお洒落に秋を持つ

藤井寺市 太田 扶美代

うっかりと嬉し涙を舐めました

抽出しを増やせば思い出も増える

趣味四つ病一つと生きてます

胃袋に時々舶来のお味

コンサート緊張感が心地よい

箕面市 広島 島 巴 子

八尾市 高 杉 千 歩

鳥に乗り行つてみたいいな空の旅

ドドザブン心開けと波が打つ

潮時を占うように貝拾う

虫の音に夫婦聴力競い合う

悩む事やめた時から太り出す

守口市 井 上 桂 作

八尾市 笹 倉 ひろし

歌はいい過去再生の思い出に

若ぶった友も白髪のおじいさん

喜びをノートに書いてうつ忘れ

一言が多く年寄り嫌われる

気配りもやめて己の道を行く

八尾市 村 上 ミツ子

大阪府 澤 田 和 重

不満から不安へ変化する政治

交代へまだお互いに慣れなくて

秋眠もありだと思ふきのう今日

レジ済ませ商品持たず帰りかけ

おしゃべりに語彙を豊かにして貰う

八尾市 生 嶋 ますみ

大阪府 粕 山 隆 盛

エコポイント私未だに解らない

空っぽの時間を過ごす立ち話

レシビの本積んで惣菜買うてくる

マスクしたらみんな美人に見える秋

近所の目見てないようで見られてる

手の届く幸せでいい萩の寺

罪のない噂持ち寄り小半日

リハビリの医師に点数つけている

原点に戻ろう秋の絵具皿

ペン皿に箸箱後期謳歌する

甲子園補欠もそつと土集め

故郷ヘラッシュユイライラ持ち帰り

比例区も落ちて大物消えて行く

浄土往きカウントダウンまだ早い

粉もんも服もこつてりナニワ流

四季のある日本が暮らしづらくなり

遊びでも負ければ意地が湧いてくる

お笑いを即効薬にして暮らす

値切るのは今日は止めとく祝い鯛

待ち遠しいこの秋孫の披露宴

好きな人夢をかたちにしてくれる

デッサンのままに終止符打った夢

ポケットに遊び心をしのばせる

朝令暮改誓ったはずの禁酒なり

終い弘法やつと見つけた秘蔵本

大阪府 桑 田 ゆきの

サンマの目青い海原恋しがり
無農薬こだわりの続け菜を間引く
ネオン灯悲喜点滅の大会
アラフォーがラブレター読む神の前
逆風に吹き飛ばされたチルドレン

大阪府 米 澤 俣 子

今という大事にしたいこの時間
手の届く暮らし倅せ豆の蔓
ばあちゃんにも出花の頃がありました
枝葉まで追うマスコミの無責任
国民のパワーチェンジへ民主主義

大阪府 野 田 栄 呼

気持だけ走ってからだついて来ず
五円玉ご縁を願い手を合わす
二病目が居心地よいか住みつかれ
後期とてまだまだ生きるヒトゲノム
野暮ったく見えて中身の粹な人

神戸市 田 中 章 子

ゴミになる物に三坪占められる
心配性やせる思いで太ってる
少子化に保育所のないまっつごと
おふるまい好きで料理を作り過ぎ
雨おんな曇りがちなよしとする

神戸市 山 田 婦美子

頑張れば日の目見る日もあるだろう
ありがとう産んでくれてと子の笑顔
飛べる日待って静かに羽繕い
子のおもひ取れたら風はきつと飛ぶ
明日という白紙に何が書けるだろ

神戸市 山 口 光 久

横並び志向に気分萎えてくる
横っ面張り飛ばされて迷い解け
笑われても下手の横好き止められぬ
横顔の素敵な人に惑わされ
考える輩へときどき唐辛子

神戸市 木 村 貴代子

マドンナと呼ばれていたとクラス会
古日記開けば君の匂い立つ
娘と結ぶケータイ頼り花と生き
満点に遠かったけどいい味に
遣されて酒に逃げ込む夜を重ね

神戸市 山 口 美 穂

二歩下がって青空仰ぎ迷い解く
来年も生きるつもりの手定表
背伸びしても取れなくなった棚の上
幼な児に戻った老母とグーチョキパー
竜宮へもう戻れない玉手箱

神戸市 伊勢田 毅

リハビリの妻にハンカチそつと出し

マニフェストあふれ与党の道多難

誕生日公開しない妻も古い

露天風呂猿がメタバを笑ってる

票入れた顔で飲んでる祝いの酒

神戸市 両川 無限

風と契って少し淫らになるワイン

満点の妻がときどき皿を割る

序列からあふれ人間らしくなる

結び目がゆるみ真相もれてくる

愛に飢え無性に海が見たくなる

相生市 中塚 礎石

汗積んでひたすら模索芸の奥

結果論急げば風に流される

お話が切れても止まぬ砂時計

振り向けば遠い誤算が音を立て

竹槍の過去思い出す原爆忌

芦屋市 黒田 能子

ライバルが素直におめでとうと言う

知らぬ間に尾ひれのついた噂聞く

つまずいて転んで知った歳のせい

温泉の大きな鏡目のやり場

ブランドのタオルそのうち雑巾に

尼崎市 軸丸 勝巳

ともかくも老いに優しい政治乞う

五連休医者が気になる老い二人

手術して埃見えすぎ嫌われる

裏返しシャツに気付かず小半日

野菜高曲り胡瓜に陽が当たる

尼崎市 長浜 美籠

まあこんなもんだと思う夏の底

地球儀のほんの僅かな点に住む

見えそうで見えぬ前途に生かされる

闇に座し闇の怖さに馴れてくる

受止めてくれる愛です月が冴え

尼崎市 山田 耕治

スポンサーのご好意惜しいとこで切れ

丈夫な歯まだ鮎を噛む悪い癖

誕生日その日の晩に思い出し

種のある西瓜に文句いう子供

どっこいしょ言うて女も古くなり

尼崎市 春城 年代

ひまごなどといてご隠居の席に着く

初盆の供花に這うている虫よ

もうあかんおんなじことばかりかえす

体内時計狂う夫のいない家

インフルエンザ菌は怯まず生きている

伊丹市 山崎 君子

久々の雨いい雨でした電話口

フラダンス友若がえるつけまつげ

眼科医のやさしまなざしうつすらと

アルバムに涙がポトリ逝った人

孝行娘二人もいます今の幸

加西市 金川 宣子

祝儀袋年金かじる音がする

写真慣れ作り笑顔でハイポーズ

避難場所実家に決める夏休み

四世代集えばうれし傘寿の日

生き様が答えになって返ってる

川西市 西内 朋月

近道をしたため落ちた落とし穴

しがらみを断ち切るためのコップ酒

瘡蓋を剥すと見えてくる悪事

矢印の通りに歩き迷ってる

痛風のおそれあるのに飲んでいる

川西市 米原 雪子

目が泳ぐ平気装うつもりでも

ゆるくてもほどけなかった夫婦仲

児の寝顔疲れたパパの頬ゆるむ

なまじつか相談に乗り当てにされ

時々結び目ゆるくなる家族

三田市 上垣 キヨミ

温かい言葉に足が脆くなる

憧れた隠居暮らしを持て余す

給付金計報の義理に奪われる

終章の日を知らぬから生きられる

チェンジして吊り橋渡る心地する

三田市 石原 歳子

うなぎ屋の匂いたつぷり換気扇

大勢の中に溶け込めないわたし

世の中が進み美人も今長寿

手間かけた花よりやさし野辺の花

夕刊を顔に広げて大欠伸

三田市 白井 二英

避暑気分の入院でした悪しからず

麻酔切れ痛みを友に生かされる

入院に本持ち込んでかはどらず

品定めされてるナース忙しく

病棟が活気に充ちる日曜日

三田市 福田 好文

嫁のぐち嫁に介護をされながら

妻の留守カロリー無視の酒肴

熱心に勧めるほどに抱く疑問

子沢山親の介護をなすり合い

不意の客開けてはならぬ部屋が出来

西宮市 藤本 直

古希すぎて学んでいます歩き方
酒好きと下戸川柳で馬が合い
永い恩返せる刻が短かすぎ
努力なくいつも安易な神頼み
止められて逆らう子等の目は淋し

西宮市 秋元 てる

三食昼寝お医者付きよと励まされ
ゆつくりと養生せよは永びくな
見舞にはこれが欲しいと言える友
前向きはたまたま健康だったから
享年二十九 九十歳を支えくれ

西宮市 片山 忠

じいちゃんのころはいつも浪花節
裸足では歩いて行けぬアスファルト
敬老会準備係もみな後期
禁煙を成功させた妻の鼻
猛暑でもゴルフ族には通じない

西宮市 亀岡 哲子

波瀾万丈それぞれにあり戦前派
口下手の無口で男上げている
啄木もじっとその手を見ただね
逆風に乘って見ようか秋の空
同窓会どれが生徒か先生か

西宮市 緒方 美津子

コスモスの畠に立てばみんな丸
足りぬもの愛のあふれるパパの鞭
走るまい次の駅まで息上がる
忙しい人に用事を頼むべし
すぐわかる手袋一つ忘れもの

西宮市 牧 潤 富喜子

リバーシブル軽くチェンジをするところ
大体のおかずが判る裏の家
こだわりのバッグも靴もお蔵入り
立往生温いことばに溺れまい
この頃の日課を歩く充電中

西脇市 七反田 順子

頓堀の話題もつきて秋の風
人のため毒と薬になつて生き
菜食が体に馴染む秋の空
階段を一気に登る猫を追
秋風に毛穴が閉じてきた気配

姫路市 古川 奮 水

もう白露蟬鳴く声も苦しそう
土壇場で結局妻に意見聞く
名画観て川柳をして月見宴
永平寺法話が疲れ奪い去る
誕生月カードポイントお負け付き

半世紀自民君臨して 挽歌

奈良市 米田恭昌

主権交代うねりひしひし我が家にも
アンケートつい背伸びする癖がある
テレビ欄だけはしっかり見てる老父
中継で二人の仲を映される

奈良市 天正千梢

石庭の石がわたしに語りかけ
地獄耳聞いてはならん事を聞き
札束でゆさぶりかけるから困る
羅針盤くるわないでよ日本丸
ご馳走は稲田を渡る青葉風

生駒市 飛永ふりこ

月に住む父母に言えます御蔭様
譲られたり譲ったりして血が通う
母が剥く栗のご飯の味越せず
納得をするまで片目つぶってる
お互いが意地を張っての行き止り

橿原市 安土理恵

雑踏を歩くとぶつかってばかり
不安から逃げたいのです 眠らせて
沖へ沖へ流されてます漕いでます
モーニングコーヒー気付け薬として二杯
うす紙を貼ってばかりしておく事実

いい匂い本と育ってきた人だ

橿原市 居谷真理子

ちと恐い骨を隠した祝い鯛
トンネルを出て輝きに包まれる
見たくない聞きたくないとダンゴ虫
亡き人と月光あびて座る部屋

香芝市 大内朝子

生きているだけでハッピー青い空
何葉を唱えて老いの坂登る
災いの口のチャックをつい忘れ
大の字で寝ているけれど気は弱い
イケメンに席譲られた夢心地

大和郡山市 坊農柳弘

肩書を外し気軽になる背広
徒然草人恋ゆる夜にページ繰る
ともすれば独り善がりになる愚直
思惑を見透かされてる月見酒
風紋の戯れに酔う風の私語

奈良県 渡辺富子

頭数の中で拍手をして帰る
歌手の名を寝るときやつと想い出す
老婆心前へ前へとしゃしゃり出る
虫の合奏睡眠薬になつてくる
彼岸花ふる里遠くなつて炎え

和歌山市 田 中 み ね

そう言えば私もしてた孫自慢
自慢話するなど影が袖を引く
出来るはずあなたのお孫さんだもの
八方手をつくし治らぬ首の凝り
華やかな時を肴にするお酒

和歌山市 木 本 朱 夏

秋立ちぬ父の形見の帽子にも
すこし黄ばんだ日記に秋が忍び寄る
冷蔵庫満杯にして引きこもり
素っぴんで歩く人生八合目
満月へひらりと翔んだ白い猫

和歌山市 喜 田 准 一

この辺で理くつは抜きにして気楽
相部屋の世間話が面白い
頃合いもよくて年貢の納め時
逃げ道のない正論に行き詰まる
借金はないと二度書く遺言書

和歌山市 武 本 碧

婿殿も慣らされたらし娘の味に
そよ風に体感温度撫でられる
獣とは思えぬベット抱いている
ほがらかに金環食を追う平和
目を皿にしても切り札見つからぬ

和歌山市 堀 畑 靖 子

前例がないにそこをと食い下がる
いらだちの暑さやわらぐビルの街
本気度を示すに声を大にする
山動くなんて議員もいたよネエ
施錠せぬ賽銭箱を見つけたり

和歌山市 松 原 寿 子

折り入って頼んで心地よい返事
穏やかな日々がほしいと思う秋
去る胸に君の魅力が絡みつく
車椅子夫のストレス聞きながら
まだ夢をめざして胸にたたみ込む

和歌山市 岩 本 美 智 子

みようが攻めもう出し忘れありません
惜しまれて枝雀は古稀を祝われる
カアカアカア庭に雀が来なくなり
処暑迎え蟬の声絶えなお夏日
水蓮の葉に胡坐かく子は仏

和歌山市 玉 置 当 代

また元のふたりに鍋も買い替える
魂を抜かれたような昼の月
明日へと命をつなぐ酒を注ぐ
虫の音に癒されました偏頭痛
ふるさとへ忘れた荷物取りに行く

和歌山市 古久保 和子

田辺市 岡本 昇

栗ごはんから始める秋の試運転

パソコンに笑われている指使い

フリーマーケット疲れた顔で並ぶ服

冷やかしくもう見抜かれている返事

ロスタイム何かが起きそうな気配

和歌山市 松尾 和香

あふれ出る泉の情け輪をつなぐ

命がけで励む人生道ひらく

満足は健康に生き趣味ひとつ

おだやかに黄金の秋ひがん花

歩き旅すっかり結ぶ靴のひも

和歌山市 福本 英子

時計屋の時計めいめいもの思い

地デジ来て私の時計盗まれる

先輩の遅刻へ我慢の癖がつく

下草を刈る手大事にサロンパス

立地条件良いが野良猫たんといふ

海南省 堂上 泰女

カラオケも出る植木屋の上機嫌

人民の力選挙を覆す

放しがいチワワ待ってる散歩道

我が古屋を照らす深紅のサルスベリ

野に放ち孫ファールにさせている

妻の留守遊び心で飯を炊く

勤め先ハローワークようちの夫

旅人の汗で潤う木の根道

効能に個人差ありという欺瞞

そのうちに並ばにや食えぬ時が来る

鳥取市 岸本 宏章

減量へ秤に腹を立てている

惚けテスト今日の日付を言ってみる

森の中だけではカラス生きられず

欲張ると下手な芝居も見抜けない

神が振るサイコロむらが多すぎる

鳥取市 夏目 一粹

ありがとう時どき使いこなす老い

金力は人を泣かせて笑わせて

懐に入れてめつたに出さぬ欲

浪費にはもう会う機会ないだろう

冗談の毒が私を苦しめる

鳥取市 福西 茶子

ありがとう互いに言える四コマ目

窓開けて涼やかな風仏壇へ

さわるなど書いてあるからさわりた

乗り越えた試練の果実枝たわわ

ひと夏の楽しみくれたゴーヤ抜く

鳥取市 横田 春名

鳥取市 池原 天馬

初恋よ小さい秘密持った孫
一滴のしずく凍らす娘の年忌
はた餅とおはぎの違ひ母と姑
嫁いだ日嫂の愚痴こびりつく
もくせいの香り和服を手入れする

鳥取市 中村 金祥

鳥取市 土橋 睦子

ローカル線一番燃えた夏まつり
百円のおもちゃ孫には宝物
年金をはたいて祝う七五三
不快指数一気に落ちた総選挙
この辺で休んでみてはどうですか

鳥取市 山宮 愛恵

鳥取市 永原 昌鼓

百円の秋刀魚迷わず手がのびる
真つ白い皿へ秋刀魚の一文子
おいでませ烏賊そうめんでおもてなし
父の汗届いて梨の丸かじり
今さらを今からにする謳歌する

鳥取市 田村 邦昭

鳥取市 土橋 はるお

いいチャンスいつも逃がしているばかり
正直に恥じない道を選びたい
意地悪がやがてわが身にふりかかる
引退をいい役者だとほめられる
胸中を話して日本晴になる

敗戦後キリスト信じ叔父が死す
八年間アルツハイマー叔父が死す
作業帽棺におさめて叔父送る
夕方のスーパ―嫁のたまり場に
総選挙うちの選挙区自民だよ

座り肝胝亡母のすべてが解る齡
飽き性と凝り性がいてよく転ぶ
年金日流行の服と靴を買う
一輪の花で安らぐ友見舞う
相槌のことばが欲しいこぼれ萩

マニフェスト背負つて重い民主党
心にもない美辞麗句よう言わん
爺さんの投げる直球定まらず
心配の種あちこちで発芽する
娘より孫の一言身に沁みる

天晴れだスポーツ界を目指す孫
嵐呼ぶ男が居ない不甲斐なさ
お隣の境界杭を打つ火花
缶ビール選挙の匂いするもんか
爪に火を点して今を生きている

鳥取市 吉田 弘子

齡という逃げ道都合よくつかう
秋ですね蟬から虫へ一足飛び
心では許しているが意地っ張り
青空にマイクが響く運動会
煙そうな人だジョークが通じない

鳥取市 平尾 菜美

弾んでるあなたと一緒風の
手の裏の誤算拳を握り締め
日溜りを信じて集う落葉たち
地団駄を踏んでは夕陽くぐり抜け
ふくよかさ秘めて羅漢の父の顔

鳥取市 中宇地 秀四

魂胆があるのか熟女うす笑い
テールを叩いて帰る負け戦
足腰は痛むが口は鋼入り
たまるのはお金では無く膝の水
あの頃に比べまだまだ良い暮らし

鳥取市 西川 和子

曖昧にどきっとさせる言回し
何事も妻の意見を聞いている
何だ彼だと腹から笑う仲間たち
大笑いすればぐっすりいい夢を
終点は一つ楽しい道を選ぶ

鳥取市 武田 帆雀

頂点にご褒美がない豆の蔓
家内中レジャー私は菊いじり
種蒔いた畠で犬が来て遊ぶ
竹竿にパンツ濡れてる俄か雨
もう点はいらない時にヒット打つ

鳥取市 春木 圭一郎

苦手とは無理に付き合うことはない
どうしてもできないことはあきらめる
失敗はやり方変えるチャンスかも
格好よくハッピーエンド目指し生き
何もせず待っているのも一策だ

鳥取市 岩崎 みさ江

方言で呟いている独り言
昼下り互いに欠伸移し合う
諍いも今は懐かし遺影の目
忘却に効く歳月という薬
笑っても泣いても西へ陽が沈む

鳥取市 加藤 茶人

三日ほど泣くと涙が枯れる愛
母さんの小言茶がゆのように効き
行列に見栄もメンツもなく並び
嘯み合わせ悪い入れ歯でホラも吹く
貧しさもほどほどならば良い薬

鳥取市 山本 益子

じわりじわ老いの正体鬼ごっこ
喜寿過ぎて旺盛な食ぞつとする
追試験やる気女神が現われる
立ちどまって私と話すちひろの絵
遙か日の通せんば恋う秋の暮れ

鳥取市 奥谷 彩子

朝冷えに紅葉色づく父の山
未曾有不況まだ働ける芽を摘まれ
里山も柿の実うれて冬支度
辛口ジョーク胸でバウンドさせて聞き
亡母の生き様モデルに生きている老後

鳥取市 有沢 せつ子

暦より早目にかかる冬支度
会う度に挨拶かわす知らぬ人
老け顔へせて明るい色を着る
百均のコスト計算してしまう
井戸端の代わり花壇を取り囲む

鳥取市 宮脇 道子

鏡の中ホドホドにして眼をそらす
深い皺苦勞の証同感だ
喜びと悲しみ子等は持参する
老いの友少し譲って話し合う
三途の川友と並んで渡ろうね

倉吉市 猪川 由美子

人間ウォッチングヒントも貰い飽きません
シャツボタン何個も外し媚を売る
日本を壊して男風と去る
身も家電も同類項のガタが来る
小気味よい料理の音が食そそり

倉吉市 松本 よしえ

自慢ばなしボロが出ぬうち止めとこう
読み聞かす祖母に微かな京訛り
カタカナ語溢れしよつちゅうメモと辞書
恋仇に負けて怪我したうちの猫
どうしよう何より怖い認知症

倉吉市 野口 節子

両親のエラーだろうか目鼻立ち
心美人と言われるだけで物足りぬ
マニフェスト不安が募るだるまの目
喜寿すぎて水の流れが早くなる
喉元で丸い言葉にして返す

倉吉市 最上 和枝

八十路坂スポーツの道遠ざかる
可も不可も無いがお腹は減ってくる
値上りを知らぬ卵の優等生
温度計各部屋毎に多少の差
横文字が読めないだから孫が辞書

大漁にあつと驚く民主党

倉吉市 山中 康子

譲つたら届くはんいの出養生
要介護呼吸をあわせた体拭き
わたくしが仲に入ればややこしい
抜け殻にちよいといけずの火をつける

倉吉市 牧野 芳光

淋しくて電話案内でも架ける
つまりた石ダイヤよりよく光る
満ち足りて不満を探す日本人
強がりを残して子等は戦場へ
迷い子になつてしまつた主義主張

米子市 白根 ふみ

白髪も影黒ぐろと残暑行く
ひまわり畑敗走者など置つて
机には座らなかつた夏やすみ
この暑さ遺言などは書けません
天辺という涼風に逢いたくて

米子市 門脇 晶子

仏にも鬼にもなれず卒寿です
噂話尾ひれをつけて大騒ぎ
長電話尻尾の方は切り捨てる
待合室疲れて尻尾生えてくる
あわててもあわてなくても黄泉の旅

米子市 野坂 なみ
新学期待つてましたとインフル菌
シングルが引け目感じたのは昔

二千本安打へ国が盛り上がる
大山の尾に私の現在地
逆回転わたしの生気よみがえる

米子市 青戸 田鶴

古い事みんな覚えている鏡
曾孫が産まれ気合いを入れられる
忘れたい事をしつかり思い出す
何もかも捨てようとして捨てられぬ
温かそうな夕日の中にとけ込もう

鳥取県 竹信 照彦

若者の二倍かかつて骨が付き
固定した足首動くのに二倍
権力にすり寄り出世したい人
官僚もさつとマスクを取り替える
期待だけ抱いて庶民の待ちぼうけ

鳥取県 山下 節子

漫画家がバラす戦争体験記
竜巻が町をバラして通り抜け
首を取れいさんで出たが首取られ
人々が利己主義になる平和ボケ
あまりにもうまい言い訳脱帽す

鳥取県 松川行男

挨拶もめつきり寒くなりました

就活か婚活などと冷えた秋

外食で猫に影響あたえてる

どこかしこ川柳募集眠れない

疲れたか妻の寝言が朝になる

鳥取県 北村稔

晩酌がインフルなんか寄せつけぬ

後悔はしたくないです八十路です

おれだつていい男だと言われたい

いやならばはつきりいと言いましよう

当らぬが夢を年中宝くじ

鳥取県 盛田夢路

家守する婆の日課も忙しい

午後の茶に釣瓶落しの寺の鐘

作物の出来もそこそこ温暖化

それぞれが少し我慢をして家族

親心知るか知らずか無理を言う

鳥取県 深田俱久

あれこれと孫に選んだ褒めことは

余生にもネジリ鉢巻きよく似合い

ユーモアで何時も円満嫁姑

人の和も情けもゆるむ過疎の村

サービスの笑顔に惹かれレジの列

鳥取県 佐伯やえ

仏さま稲がみごとに熟れました

赤とんぼ もう宿題はしたのかい

愚痴は言うまい心の花が枯れていく

子のくれる言葉の裏に真の愛

やがて帰る土今日も打ち明日も打つ

鳥取県 細田裕花

妖怪のウエーブが来る日曜日

エコライフ自給自足へ汗をかく

写真付きの野菜自信に満ちている

ちよつとした心遣いの水を撒く

しがらみが人間らしく生きさせる

京都塔の会第62回 秋の吟行句会

日時	11月24日(火) 午前10時半
場所	嵐山通船乗船場(大堰川左岸北側)
	渡月橋から約200メートル
	京福「嵐山」駅から徒歩約100分
	阪急「嵐山」駅から徒歩約15分
予定	11時乗船 30分~40分
	下船後「らんざん」にて昼食(和食)
	1時から句会—椅子席を利用します—
兼題	(各題3句)
	「当日雑感」 「だから」
	「散る」 「反響」
散費	4時ごろ予定
会締申	五千円(当日いただきます)
	11月14日
	申込票にて 都倉求芽 まで
	〒600-8428 京都市下京区諏訪町通
	松原下る 弁財天町328-202
	TEL075-351-4109
	◎嵐山通船 TEL075-861-0302
	「らんざん」京都市右京区嵯峨天竜寺
	薄の馬場33 TEL075-864-0088

川柳塔の

川柳讃歌

(59)

木津川 計

耳の虫鳴いて退屈しないボク

三好 專平

耳鳴りの奥に浄土が待っている

小澤 幸泉

「心頭を滅却すれば火もまた涼し」、織田信長軍の火攻めの中で甲斐の僧・快川は従容として果てた。身を熱くすれば火といえども涼しいのである。専平さんが煩わされる耳鳴りも虫の音と思えばむしろ風流、退屈する何の暇がある。幸泉さんに至っては、耳鳴りの奥に浄土を思い描いているのである。老いもまた楽しからずやを思ふ。

弔電は本人宛に送りたい

寺川 弘一

妙な習慣を弘一さんは衝いたのである。そうではないか、弔辞は本人に捧げて悼むのに、弔電はもっぱら家族身内に宛てられる。

弔電の文例をNTTは七一も挙げている。代表的例文は「〇〇様の逝去を悼み、謹し

んでお悔やみ申しあげます」。その紋切り型、なんの情感も湧かない。

弔辞を喪主に捧げ（もするが）ない以上、弔電も故人に宛てて然るべきだろう。激変する葬儀風景のついでに、一考を要したい。

香典を断る葬儀にはつとする

福田 好文

ついに事態はこうなったのである。香典を受け取る葬儀は「ほっと」しない、つまりは生じた難儀である。

以前も書いた。香典は貧しき民の相互扶助だった。が、半返しの手間を避け、金持ちたちが断わり始め、しだいに広がり、貧乏人がとり残されたのである。弔いの習俗、その激変は病院から火葬場へ直行の直葬を増やしている。金のかかる墓地を求めず、散骨も広がればこそ、お寺が揺らぎ始めたのである。

長生きを目指せば国に嫌われる

岸本 宏章

子供の日や母の日は期待と感謝につつまれるが、今年の敬老の日ほど無視された年はあるまい。六五歳以上の高齢者は二八八万人、総人口に占める割合は二一・七％、いずれも過去最高である。加えて百歳以上がついに四万人を突破したのである。高額の高齢者医療、長生きするほどに膨らむ年金支給額、いよいよ

よ「老人は死んでください国のため」（宮内可静）が真実味を帯びる時代になった。「少子国遠慮しながら生きてます」（井上桂作）。「懸命に生きてる罪か人間の枠外されし後期高齢者」（三池淑恵）。ご同輩に告ぐ。私たちは懸命に生きてる罪を問われているのだ。

金貸した日からびたつと来なくなり

穴吹 尚士

魂胆があつてしばしばやつてきたのだ。言い出せないまま何度も帰った、といまにしてあの男の胸中を察する。が、借りたからとて全く顔を見せないとは、なんと現金な奴ではないか。いや、もしかしたら、あのまま姿をくらましたのではないか。すると不安が頭をよぎる。人情の機微を衝くとはこういう句だ。

梅雨しとど着いた葉書に顔がない

木本 朱夏

ダイレクトメールが届いてうれしくないのは「顔がない」からなのだ。たまさか顔があつても無表情では似たようなものだ。いちばん面白くないのは顔のない年賀状だろう。だから僕は年賀状のネタ探しに一年を費やす。電話の応待が人柄を現わすように、葉書や手紙はその人物の個性であろう。没個性な便りはダイレクトメールと変わることがない。

（「上方至聖」誌発行人）

自選集

阿 萬 萬 的

河 井 庸 佑

紆余曲折コロコロ話まともらず
四面楚歌小さくなつてさする膝
知ったかぶり口が沁つていた尻っ尾
何もかも面倒くさいちびた靴
限界をさとりこの先考えず

板 尾 岳 人

七五三着ることがなししつけ糸（二歳の恋人の死より）

川 上 大 輪

千歳飴お食べか持つて逝くべしか
もういいよ帰つておいで隠れんぼ
振り向けば飛んで飛んでく赤とんぼ
花に似て短かき人生楽しけれ

奥 田 みつ子

夏涸れの脳叩いても叩いても

木 村 あきら

縫いぐるみ形見に友は遠い国

嬉しさだけ忘れず明日の糧にする

柔らかな心が砕く硬い殻

あふれるもの胸に黙つて米を研ぐ

引き受けた手前後へは引けぬ自負
意外な石打たれて読みが狂い出す
子育てへ自分の過去をダブらせる
なまじつか聞くでなかった悩み事
氣に掛かる予感氣遣う風見鶏

笑い上戸になつてしまった土踏まず
とりあえずお蔭様でと言うておく

先月もまた無駄にした保険金
コンビ二で探す抑えも中継ぎも
返信のハガキに鬱が溜まりだす

短所には触れず一家にある平和
ふる里の風は何時でも暖かい
時々訪ねて欲しい老いの部屋
紅葉を訪ねて小さい旅に出る
落葉炊きお隣同士仲が良い

妹が来ている母が笑つてゐるなにもかも一人で出来るのは罪か
そして私も自分に甘くなつて冬
飛び乗ると女性ばかりが立つていた
天国の父と乾杯でもするか

小島蘭幸

川柳も結婚暦もダイヤ婚
霜月の耳かたむける雪おこし
わが家でも世襲国鉄ＪＲ
中程度の暮しラッパも中音に
大陸を戦車で駆けた遠い過去

小西雄々

この闇もやがてまつりの灯が点る
弾む毬いっぱい詰まる子のカバン
水色になるまで待とう水溜り
仏壇へ花をたやさぬ庭鉢
鳴り止まぬ手拍子森のコンサート

斉藤 姦

国民の考える夏すみしました
新政権何年続くことでしょう
新学期インフルエンザ待つてます
さようならミナミに帰るツバメ達
国民が自公政治やめさせた

塩満 敏

ゴミ箱のゴミの如くに街に人
独酌が好き注いで貰うのも好き
酒なけりやとつくに首を吊つてゐる
あと三年歩いて行けば古稀の門
おトイレで毎朝何か生んでゐる

新家完司

ひらめきがあつて鉛筆削つてゐる
不平不満私は知らぬ白い雲
閉じこもり話の種も尽きてくる
老化かと躰いた石蹴つてみる
人形に似てると孫を喜ばせ

恒松町紅

自己防衛インフル対策練る後期
身軽うに生きる備えも万がいち
生かされて自己流ヨガの健康法
近づけば美し過ぎたバラのトゲ
秋満載グルメツアーに居るメタボ

津守柳伸

ふる里に咲くタンポポも外来種
ライバルの背ながだんだん遠ざかり
やけくその花火不況の夏終る
悪いとこだけがわたしに似ていとし
ずぶ濡れのマイクぐらゐに騙されぬ

遠山可住

都倉求芽

海峡の流れを拒む不発弾
花道の向うにあぶない橋がある
この時世近くの人人も不確かで
棒折った話参考に立ち直る
胸底はいつでも晴れにしたい

土橋螢

松茸の匂いがしたと山へ行く
謎かけて入道雲が消えてゆく
生き下手が探す煙草と小銭入れ
柔道の寝技に虐められている
露となり北斗七星から零れ

中原諷人

朝寒の秋少しづつ遺る気です
氣に入った径を歩ける秋の天
けものみち借りても生きる足を描く
耳鳴りや差し出がましい風を聴く
風の道ふわつと走りアスリート

西出楓菜

イケメンと美女が得する選挙戦
体力と氣力は常に正比例
蛭見ず松茸食べず四季巡る
暑がりて寒がり歳のせいかしら
七十歳まだまだ背負い切れない荷

仁部四郎

母校から一口ほどの義理が来る
義理のある顔は出てない投票所
訃報欄義理のある名にうろたえる
三日ほど生きて金魚が果たす義理
義理で聞く世間話に拾う知恵

林瑞枝

まだロマン消さず長蛇の列に立ち
大砂丘を歩けば笑う膝ふたつ
リフレッシユのみんな真面目な山登り
あせらないで待てば回路の秋の空
五割引きのお洒落着を買う眸が笑う

前たもつ

株主となって見守るマニフェスト
ウォーキング銀杏並木へ妻とよし
朝夕の散歩へ無用医者業
ボランティアの手帳閻魔のお土産に
教会も句会も誘う秋の天

三宅保州

家族だから言えないことと言えること
二つ返事で後悔も倍になり
密林の中では私も餌食
宇宙旅行で迷子になった夢
真相はいずこフライトレコーダー

宮 口 笛 生

リハビリのおかげすすきりした体

氏神への道リハビリの道にする

氏神さん聞いて下さるリハビリ

歩くのに丁度良い道リハビリ

リハビリがすんでぐつすりする昼寝

宮 西 弥 生

転倒の瞬魔夏の白日夢

釜のめし分けて同ンなじ傷の仲

飛鳥路の秋は実りという一字

八起き目の傷は七転遠くする

まだまだの生命と出合うあたりがとう

八十田 洞 庵

まだ色香うつる鏡に燃えるもの

騒音に流れてしまふ正義感

終着駅着く道のりは地図に無い

寂しさの数だけ集めコケシ棚

コップ酒明日は別れる吹きだまり

両 川 洋 々

迷いまだ解けず未完の絵が乾く

午前様の僕にカボチャの馬車が来た

夫婦だろ妻よ足枷解いてくれ

振るだけの尻っぱイデオロギーは無い

使用済みの乳房だけれど夢は見る

温故知新

川柳句集『ふるさと』

須崎 豆秋がうこき出し

みの虫のなんば匍うても壁だった
出勤ヘビヨコがすこしついて来る
どの草も草も見給え実を結び
口髭を生やして猫の子が生れ
骨立てたまま二次会へついて行き
ふるさとの蜚が夢の中をとび
降りる客いとんのんと続くなり
行くあてもなく傘をひろげし
田舎道お地藏さんに首が無く
手ぶらでは鹿も相手にしてくれず
お、青春よ仕事がないのに
街の子よ気がつくまいが昼の月
ほろりつとする名文で金を借り
いわしいわしなすびなすびの日がつづき
阿呆なこと云うてしもうて淋しけれ
一生の小骨を箸でよりわけ
ふところにお金があつてよくしゃべり

初 版 昭和29年11月発行
再 版 昭和30年4月発行
復 刻 版 昭和60年9月発行

水煙抄

川上大輪選

紀の川市 宇野幹子

神さまが手を添えにくる白い杖
からす瓜青い記憶へぶらさがり
てにをはを転がせているベン先の
無精髭いつかの夢を見失う
ささくれた青春にあるためし傷
土壇場の心へ鬼がそそのかす

鳥取県 稲村遊子

ゴミ捨てるときは非情な手になる
リサイクル出来ぬ日が来るわたくしも
手のひらをあふれるほどは望まない
恋人が天狗だったら別れよう
他人さまのネコを手招きしてしまっ
唇が乾く人とは喋らない

大洲市 花岡順子

幼子が脆い私を強くする
小手先が器用で軽く生きている
震度6大動脈が切れちゃった

悪筆と言う遺伝子を持つている
燃えるのは苦手微熱が続いてる
許したらきつと心が癒される

河内長野市 針生和代

正確に鼓動を刻む日の安堵
人と人つながやさしい嘘少し
少し夢増やして老いを遠ざける
少しづつ仮面剥がしてゆく余生
言い勝った舌へ小骨が突き刺さる
身から出た錆が波紋を広げてる

和歌山市 福井菜摘

一歩引くゆとりに風も丸くなる
やんわりと風になじんで丸く生き
ある時はピエロになって和を保つ
愚痴ひとつ言わずに影がついてくる
人生は喜怒哀楽の数珠つなぎ
どの星も生きろ生きろと光ってる

府中市 馬場 利子

どの彩を溶いても秋はさまになる

切れそうで結び直した赤い糸

失意の日涙わたしをはなさない

母の愛つめては軽く切手貼る

風呂栓を抜いてストレス押し流す

リモコンが切れてロボット踊り出す

札幌市 三浦 強一

はっぱかけ受験の孫に嫌われる

思い溢れて表半分書くはがき

再審は白青空を取り戻す

スーパで小銭数えて嫌われる

一步前へ出ると行く道見えてくる

予定表びっしり老いてなどおれぬ

奈良市 岩本 浩二

ど忘れか惚けて来たのか気にかかる

魚心ありそう水をかけてみる

知恵と汗搾り取られて肩叩き

煩惱を抑え浮世を広くする

外面が良すぎて嫁を泣かせてる

団欒の要に何時もお母さん

大阪市 尾崎 ゆめ

わがままをシャワーに叩きつけられる

今日こそは迷わずに割る生卵

御迷惑でしょうか私の笑顔

すずめはすずめなりの楽しみ二つほど

緊張が上へ上へと背を伸ばす

泣きましたあんまり美味しかったので

高槻市 片山 かずお

もう逢わぬ約束をしに逢いに行く

百選の水があふれる里は過疎

妻も暇らしいなケンカ売ってくる

婚活のコンパで探す赤い糸

ご無沙汰をみやげの菓子が詫びている

土壇場で男の器量知らされる

豊中市 谷川 勇治

老いの春大きい声で言われへん

敗戦で拾った命宝です

お若いと墓のセールス世辞を言う

補聴器を無くした妻と日々平和

賛成も反対もせず平泳ぎ

フルムーンストレス倍になりました

横浜市 巖田 かず枝

思い切り笑いたいから歯を磨く

思い切り自分にパンチ食らわす日

人間も干せば旨味が出るかしら

聞いてないようで聞いている孫の耳

安い品なぜか裏側見たくなる

汗流し涙流して定年に

札幌市 小沢 淳

大阪市 寺井 弘子

角のある石の意見は貴重なり
ハードルを下げた余生に陽も温い

笛太鼓みんな子供に帰れる日
片羽根が傷つき自縛するカラス

平和だな妻が旅行で気が抜ける

京都市 清水 英旺

泉佐野市 稲葉 洋

傘に守られ核廃絶を唱えてる

猛暑日は見舞いの筆も汗をかく

思い出は時にとり出し磨くもの

湯上りの肌にさらりと秋気配

無駄遣いしてる凡夫の持ち時間

豊橋市 藤田 千休

来る年の夢はでっかく正社員

出不精が今日も練ってる旅プラン

良いことはみんな信じる輩である

成長の速さに合わぬ子供服

永遠の誓いを知っているリング

大阪市 萩原 大朔

見るまでは誰が言っても信じない

ゴシップでのし上がる人消える人

こつてりと絞られたのに落ち零れ

山登り足の抗議を聞き流す

平成は忘れ昭和を語り合う

時刻表ゆっくり繰ってひとり旅

百点に飛び跳ねているランドセル

里からの荷物ひらけば母の顔

形だけ結び鴛鴦夫婦する

海外で関西弁にホッとする

泉佐野市 稲葉 洋

鮮やかな花ほど陰がよく目立ち

手放しでよろこべないよ歳の数

振り返り左右を見てる間の暦

子守歌聞いて聞かせて三代譜

成らぬこと夢見て戯画の筆運ぶ

河内長野市 辻村 洋子

里芋の煮ころがしは母ゆずり

この美貌炭石嶮がお気に入り

我が舌に油断するなと言いつ聞かせ

巧妙な話にのつた流転劇

掛けた分だけでも年金返してね

河内長野市 山室 光弘

たわいない二枚の舌にしてやられ

大口を小さな口でたたく人

貧しくも礼節という宝あり

目が覚めて新たなページもらう朝

カラスから見ても人間腹黒い

吹田市 二宮 栄子

遺族年金孫にいい顔して暮らす
墓参り父母の笑顔に会うて来る
若い日の約束里に置いたまま
心地よく目ざめた朝の茶がうまい
脳トレに辞書を片手に作句する

豊中市 荒 巻 夢

ステッキを選ぶ心が弾んでる
恐れけどゲリラ豪雨の潔さ
初恋の人逝きし日の赤い月
反骨がくすぶっている姥盛り
幾星霜生死見つめて月静か

富田林市 古 田 千 華

ぞんざいに網戸を抜けてゆく煙
真夜中の内緒話と虫時雨
ばばさんの小言掻き消す虫の声
もどかしい日々ゆるやかに燃え始め
一片の我慢も出来ぬ不整脈

寝屋川市 岡 本 勲

父母逝つてふる里の道遠くなり
好きですと毎日言うの変ですか
嘘少し混ぜてうわさに味を付け
携帯で夫泳がす妻の知恵
うちの人円満すぎて頼りない

羽曳野市 宇都宮 ちづる

虫の音に残暑忘れて飲むホット
やっと秋朝の空気と散歩する
枝豆で満月の夜は小グラス
やっと孫帰る節々本音吐く
無の境地得られぬままに座禅組む

大阪府 神 野 千恵子

こけそうな形で立っている案山子
コスモスが他人行儀に咲いている
挨拶をする楽しみの散歩道
中秋の名月前頭葉は空
水をさすつもりが油注ぐ破目

大阪府 畑 中 節 子

草繁り川は力を音にして
温暖化進む地球にゆがむ雨
二世帯の愚痴を短詩であそぶ趣味
泣きつかれ油蟬も芝生で弱音はく
腰曲げた胡瓜お塩でマツサージ

大阪府 小 栢 こずえ

脳細胞ノックをされる人に会う
裕福でないのに儉約馬鹿にする
嫁の留守歩調合わせる事が無い
みやげよりみやげ話がつと好き
事もなくいつもと同じ朝が来る

明石市 梶谷和郎

和歌山市 坂部かずみ

指を折るたびに昭和が遠くなる
捨てるもの増えてやがては無に還える
愚痴は聞き飽きたと酒がそつぽ向く
堅い本活字の海で溺れだす
ぬるま湯につかったままの平和ボケ

西宮市 足立茂

和歌山市 堀富美子

ネオン街昼間歩けば知らぬ土地
手土産の菓子にまぶした下心
明日こそあさってこそその休肝日
飲む話ばかりになった予定表
赤ちようちん急ぐ私を通せんば

西宮市 吉井菜々子

岩出市 村中悦男

すこしずつ逢えなくなつてそれつきり
海綿のようなハートにウィスキー
木枯らし一号きのうの憂い吹き飛ばす
セラピーをお探しですか長い夜
紅葉より尾花がすきなカップ酒

奈良市 阿部茶々

岩出市 藤原ほのか

手抜きしたおかずしゃべりでカバーして
白黒を決めずに流すつもりだな
景品に釣られて書いたアンケート
この道の他に良い道あったかも
夫よりいつの間にやら三步前

台風も妻の機嫌もエルニーニョ
定年後独り善がりの時間表
腰痛が狭い我家も広くする
詰めすぎた冷蔵庫から忘れ物
買ひすぎた賞味期限を食べつくす

開き直った命ひと泡吹かせたい
身の丈と思えば何もかも楽し
炎天へわたしが病めば花も病む
食欲がないと訝るまわりの目
今日もまた探しものするかくれんば

薬剤師まがいの朝の薬分け
気がかりは封をびつたりした手紙
うがい手洗いマスクも娘から風邪ひくな
身の回り整理をさせる物忘れ
テレビ止め窓全開の秋の虫

帰りたいでも帰れない理由がある
ハローワーク昨日と同じ顔に会う
スイッチを押すと命の音がする
時刻表自分探しの旅に出る
凡人のパワーが変えた日本国

海南市 小谷 小雪

鳥取県 斉尾 くにこ

かぎかつこはずし一途に飛んでみる
寝る前に一日分の伸びをする

一旦はお断りしてから迷い

失礼を重ね一日が重くなり

のそのそと一番あとに着くわたし

紀の川市 辻 内次 根

心まで老いたら明日が辛くなる

単純がいいと教えてくれる水

よく動く心を抑えつけている

百日紅少し狂っている わたし

貧富の差ますます暑くなる地球

紀の川市 北山 絹子

古傷が痛み男は秋を知る

薔薇の首落として罪が深くなる

ライバルの変身雨が降ってくる

優しさが半分残る父の皺

連名が祝儀袋を厚くする

倉吉市 酒井 美美子

裏表あって人間むずかしい

冗談を言つては人の裏をかく

後期高齢身の置き場所をさがしてる

行く雲に亡母の笑顔を重ね見る

観光バスガイドに見惚れ何も見ず

仏の顔へわびているあまつたれ
くじけるやる気ファイトの水をやる

サンブルへ今日の自分をまたひとつ

蟻の列個性を出すと浮きあがる

こころ優しい日やさしい人に会う

鳥取県 西谷 悦子

ふたりから起承転結ふたりなり

肩の荷がまだ降ろせずにいるコンビ

身の丈に合った我慢は得意です

弾むペン修正液が制止する

今日もまた心が弾む風探す

雲南市 渡部 好榮

エコカーもエコポイントも素通りで

野次馬に今日も元気をもらってる

千の風唄いながらに墓掃除

笑い声絶えて久しい露路を見る

古日記ページをめくる風という

竹原市 六田 半徳

オニヤンマ稲の作柄パトロール

目覚めよと休耕田を風急かす

フラダンス見物客の腰が伸び

役解けて手ぶらで歩く広い道

サヨナラと言われて返すお元気で

竹原市 土井輝恵

万華鏡の筒から旅に出たピンク

百歳を目標にする手術室

思春期の心の襷が読めますか

一大事嫁姑が肩を組む

晩酌のチェック孫にはかなわない

阿波市 三浦千津子

初志貫徹汗と涙が美しい

残り火がパチパチ余生騒がしい

スランプを抜ける新たな欲が出る

美しい嘘零れ出るオチヨボ口

こけそうな私に貴方頼りない

雲南市 武島ちよえ

日本人梅干だけは欠かせない

友と言う宝を持っている強味

お人好すぐ同情をしてしまう

値切ってる所はやはりおばさんだ

それからの蜷は口を閉じたまま

唐津市 吉富節子

靴音が聞けず帰らぬ亡夫恋し

オーイお茶呼んでくれない湯のみ泣く

夫逝きて涙の壺の深さ知る

会葬の多い夫が輝いて

頑固者いいとこばかり残り残し逝く

チャネルを変えた途端に人の影

介護する娘の背中サロンプラス

苦しい時少しはやんちゃしてみたら

灯台の灯りが見えてホツとする

混浴に連られて入る足湯とは

お互に若い気持ちで今を生きて

退職し通勤靴を磨く日々

冷えた身に熱爛しみる縄のれん

地震台風今年は逸れて生き延びる

近所三軒でこぼこ絆五十年

女三にんデバ地下めぐり耳飾り

気の楽な夫婦の散歩芋を買う

家の中シンブルにして終る夏

縮んでた心ふんわりゆるむ風

つましくゆっくり生きる今が好き

意欲出て翼が生える背のあたり

絵日記のお日様笑う日本晴れ

秋深し隣も年金暮らしなり

抽選で万札くれた論吉展

後輩の名が出て驚く社長欄

江南市 脇田雅美

大阪市 吉川弘泰

大阪市 片岡松枝

大阪市 笠嶋恵美

大阪市 平井露芳

大阪市 吉内 タカ子

この不況地デジの普及さわぎ出す
言い残し悔やんで居ても済んだこと
感受性みがけど曇る刷りガラス
墓の道待つ一輪の露草よ

大阪市 橋村 容子

選挙戦静かになつて秋の風
しんどいと言つて自分に気合掛け
こんな事語ってくれる古写真
掛けた鍵何度も引いて苦笑する

大阪市 松田 聰

横文字にうなずいてるがわからない
水やりを忘れた花のしたたかさ
複雑や席を譲られ感謝する
紙とペンこれだけあれば別世界

大阪市 山本 加お里

さわやかな朝の挨拶ひびき合う
耳底に優しく残る母の声
生きる旅出会いと別れくり返し
留守電に間違い電話入つて

大阪市 太田 としお

売れに売れ子供店長閑がない
にぎやかなお方のダンナ皆無口
パチンコ屋の二階に住んださみしがり
夏枯れもデイスーパーは忙しい

大阪市 安藤 なつこ

今時の奥さん奥に居てません
バカだなあ泣いてる我を笑つて
セミ合唱アンタもがんばりやに聞こえ
台風が夏劇場の幕を引く

池田市 上山 堅坊

太陽が拭きなさいよと照らす窓
感動の涙で独り見るドラマ
誘いへの返事はさつと出しておく
恐ろしい童話に夢を貰う子ら

泉大津市 助川 和美

コンビニが赴任の夫にありがたい
立ち止り視線を変えて行く一步
朝一番日めくりめくり無事祈る
ほどほどの幸せ欲しい宝くじ

茨木市 島田 誠一

エコ餌にごっそり民の財布釣る
痴話喧嘩酒の力を借りて詫び
腹割れば好人物と知る酒場
左遷地へ先に噂が赴任する

門真市 矢阪 英雄

目薬を一滴おとし秋つかむ
なまくらな皮膚ひきしめる注射針
ふる里を忘れないため句作する
のどもとの暑さしのいでかき氷

河内長野市 山本 莞子

一呼吸させてと言つて脈がとび

少し我慢戦よりましこの不況

懐かしい会話が弾む里訛り

膝小僧礼儀正しく座らせず

河内長野市 宮守 正博

就活は茶髪を黒に染めてから

あの世から献金ですと振込まれ

ボチだけが俺を主人と信じてる

課長より音痴で歌う癖がつき

河内長野市 木太久 正一

半世紀泳いで無事にわが母港

政権交替血は一滴も流さずに

日米のエール交換チェンジして

秋風に年賀ハガキの予約くる

河内長野市 内海 綾乃

薄情かな悲しすぎたの涙出ず

ほしい雨静かに降つてよ童謡歌

この話妻には内緒息子言う

男の子浴衣姿がよく似合う

河内長野市 木見谷 孝代

わがままで存在感を示す父

わがままを聞こう愛してくれたから

また今度言つたつきりです後がない

盆提灯父の遺影がゆれている

岸和田市 中岡 香代

ささやかに生きた証拠を残す日々

愛犬にマスクをつけて散歩道

広口のジャムの瓶だけリサイクル

断りを入れたら急に楽になり

堺市 遠山 唯教

秋の夜にはまる鬼平犯科帳

体重を気にして食べる旬の味

心配を忘れる青い秋の空

庭先で小耳にはさむ虫の声

堺市 羽田野 洋介

好きなのに上達しないもどかしさ

あれこれとやる気に背く足と腰

有頂天どこかに潜む落とし穴

すぐそこと聞いて歩けば息が切れ

堺市 近藤 治子

痛いところについてはくるが目はやさし

ひと夏で伸びた子供の背と心

変る世のめまぐるしさに距離を置く

止り木でくだを巻いてるコップ酒

豊中市 源田 啓生

政権がどう変つても今朝のパン

今はただ流れにまかせビール注ぐ

髪よ髪私を見捨て何処へ行く

ともかくも三度の飯が旨いから

寝屋川市 小嶋 みさと

生き方が下手ではついち仲間入り

連呼する声に人柄表れず

新たな旅立ち前途多難なり

決意して続かないのが我が弱み

羽曳野市 仲谷 真一

コースター命をかけて乗っている

一瞬のスリル味わう半と丁

投票に行った事ない人がいる

眠り姫起こす王子はいつ来るの

羽曳野市 森 下一知

一筋が母の野良着に継ぎを当て

フルムーン宿が計らう夫婦箸

誕生日センス違いを贈られる

故郷の名がトンネルに残される

枚方市 小川 良吉

古代から女ビンチに底力

妻老いて強くなつた涙見ぬ

老妻の日記何冊覗きたい

妻の目が気になる手抜きゴミ掃除

枚方市 河田 洋子

森林浴パワーをもらう老いた脳

古希過ぎて薬にパワー頼る日々

やってみて分かる苦勞とありがたさ

惚け防止あれこれやって若くい

枚方市 坂本 ミヨノ

定年で虚栄も捨てて趣味もなし

庭に飼う虫の音弱く秋の月

友とランチじわじわ語るラストまで

萩薄赤トンボ飛ぶ夕明かり

箕面市 寺井 柳童

好守備の野手のまわりを秋あかね

晴れになることを信じる雨男

ほどほどについ手が伸びる柿の種

ユニクロで秋の装いみなそろえ

八尾市 前田 紀雄

十五夜に風情を添えるススキの穂

身の丈の暮らしと趣味に感謝する

妻の留守ラーメン食べて飢え凌ぐ

敗軍の将秋風と共に去る

八尾市 赤木 妙子

トマトの紅にわたし丸ごとさらわれる

背負うた子の温さ覚えてる背中

ひったくり人科の面を付けて寄る

雀二羽稲の食べ頃見て回る

八尾市 田邊 浩三

病魔とは即かず離れず古希迎え

大不況休耕田が呼んでる

秋祭り年に一度の紅を引く

ずるメガネ鼻のせいだと言わぬ父

八尾市 中島春江

冷ややかに主治医の告知聞く心
自転車にどうにか乗れて八十路ゆく

水茄子の朝餉の香り色も愛で
亡き夫に今年も供うむかご飯

大阪府 坂口公子

あのお月さんに足跡がある複雑さ

ベルトで固める背骨つて齡ね

生徒扱いだったよね教師だった夫

停車場も尻目背を押す里の風

大阪府 高木道子

ひきこもり心の糸が結べない

敬老会待ち兼ねながら母は逝く

昭和史の浪花恋した母の通夜

かみ合わせぬノイズばかりの寄せ集め

大阪府 西川冷子

虫の音も休符あるらしふと止まる

追い風に乘れば行けるか百までも

ソーラン節綱引く小さな手が踊る

防波堤出れば荒海水平線

大阪府 若月祐作

真実はやがて芽も出し花も咲く

墓石の苔むすままに建っている

金バッジ晴れてつけたり返したり

六十年主婦業引退妻曰く

神戸市 早川孝子

選挙しか国民の顔見ていない
普段着の言葉うれしいありがとう

この道を覚えておこう手の中に
一票を本気にさせた今朝の水

神戸市 山崎武彦

後ろから見れば満点淋しそう

明日ひらく蕾が眩し過ぎないか

政権はどうあれひらく鳳仙花

絵手紙にあふれる秋の匂い込め

尼崎市 小池幸子

老木を切つて案ずる蟬時雨

無洗米ついうっかりと米を研ぐ

幸せよ幸せですと暗示かけ

孤独感老いに課された試練かも

尼崎市 藤岡りこ

相槌をほどほどに打つ妻の愚痴

朝の寢床今日の予定を考える

惜しいなあマスクはずすと並の人

思いきり持ち上げられて払わされ

芦屋市 竹山千賀子

日本語の魅力ひき出す五七五

エアポート悲喜こもごものパッケージ

乗せられて喋ったあとの苦い味

食卓に葉が並ぶクラス会

川西市 日野岡 和之

篠山市 永井 かほる

片目あけ片目はつむり遇うた人
負けて勝つコツを掴んだ瘦せがまん
たればを捨てて私の独り旅
ひたすらに平和を念じ第九条

加東市 岩本 美緒子

小走りの歩き気になり杖を付く
姑に似た嫁に不足の的違い
机上では句集と絵の具弄いて
当り前に食べてお通じほっと笑む

加東市 黒崎 美紗子

友情の今年も元氣苗届く
ほん少しカラオケしたら虹の空
白い芽をちよっぴり出した秋野菜
熟れた実を鳥空からねらい食い

加東市 安達 厚

朝露と一緒に野菜持ち帰る
あの時がチャンスだったと今思う
語らずに微笑むだけの愛もある
当たり前それがなかなか出来なくて

篠山市 谷田 多美子

笹蕎麦がきつねに変わる峠茶屋
隅っこの椅子席さがす敬老会
こねきいて老人ホームへゆけたとか
媚びうりに宣伝カーの最終日

敬老会行けぬがすきな事をする
ぬくぬくの御飯に手作りからし漬け
かすりきずそれだけですみ胸なでる
札束が降って来たよな雨もらい

篠山市 沢山 啓子

ヘルパーも利用者も持つ裏の顔
どん底を忘れた義母の他人顔
畦道をとことん歩くダイエツト
やむをえず草食系の膳囲む

三田市 辻 開子

握手するもみじの手にも意地が見え
長風呂を案じて覗く愛少し
リハビリに妥協はいらぬ鬼になる
赤ちようちん笑いも泣きも友になる

宝塚市 丸山 孔一

指揮棒のように振るうな飯の箸
道の駅産者の顔と無農薬
何か落ちた月のうさが跳び起きる
年金に頼り浮気の余地も無し

西宮市 株元 玲子

マニフェストで釣った魚の重いこと
暑い夏投じた一票空に舞い
人生は平凡がいいと教えられ
忘れられた墓石が雨に濡れている

西宮市 泉水 牙子

物価高我慢の虫も音を上げる
リニューアル国の要も議事堂も
時どきは放り出したくなる介護
さよならをいつ言えるのか核の傘

三木市 山口 久子

酔どれの夫に妻の角が出る
宴会の酒に強いが人に酔い
ヨチヨチと歩き出したよ誕生日
毎食後デザート代りに苦い薬

和歌山市 根田 よしこ

脳トレ中老母は腰痛忘れてる
この一票わたしの暮らしよう変わる
マニフェスト期待してます子たくさん
趣味多く悩んでる隙ありません

和歌山市 磯部 義雄

実るほど頭を上げる不埒者
上ばかり見て育つ子へ落し穴
出る杭を打つ手に回る出世組
子が嫌うピーマン腕の見せどころ

和歌山県 森下 よりこ

朝夕の涼しさ夏を生き伸びて
仕事次々退屈のない農家
採り遅れたゴーヤまっ赤に自己主張
子沢山だったが誰も居つかない

橋本市 石田 隆彦

傘借りた家に感謝し通勤路
番犬も今は認める通勤路
すれ違ういつもの人に会えた吉
北風が忍耐くれた通勤路

田辺市 大峠 可動

光陰の速さ点線ばかり引く
過去はみな四捨も五入も冬の底
思い出を語り老々逆上がり
心にも砂漠があつて上の空

鳥取市 坂本 なつみ

言い訳に記憶障害ですと言う
喜びも悲しみも生き母の味
母介護二人三脚長い道
命という母と味わう宝物

鳥取市 山口 千代子

選挙終え急に曲らぬ腰となり
カラオケに心の憂さを捨てて行く
恋歌を唄えば気分若くなる
よくしゃべる妻が黙れば何かある

鳥取市 大前 安子

指先はあなたの疲れ知る按摩
縁側に子離れの猫背丸め
灯ともしに一年の沙汰交わす墓
今日もまた同じボタンのかけ違い

鳥取市 高 浜 勇

首洗い待っているほどあほじゃない
インデイゴをすすいでデニム味がでる
すげかえる首が品切れ自民党
あの角を曲がったらもう戻れない

鳥取市 谷 岡 清 子

生きてゆくその日その日の風まかせ
傘寿坂生きるも力糧もいる
情愛の深さに男逃げよった
立つ時もすわる時もかけ声や

鳥取市 池 澤 大 鯨

車の音孫は聞き分け出迎える
臨月に入りアッシー待機禁酒中
回転ドア満員になり動き出す
臓器まだ年相応に機能する

鳥取市 津 村 律 子

へそ曲がり言われたくないあなたには
太陽に向かって伸ばすくの字腰
亡母の部屋桐の箆笥が語りかけ
ライバルにばやばやしてはおられない

鳥取市 近 藤 秋 星

人類の悲願だ核の廃絶は
快男児の君も親父になり給い(祝・長女誕生)
終戦の頃は寝た切りだった僕
夾竹桃終戦の日も咲いていた

境港市 中 井 虎 尾

打者武装も一つ鎧付けなはれ
我が地方夏をとばして秋に入る
見る月も昨日八月今日九月
ほしかった本愛蔵の棚飾り

倉吉市 田 中 紀美恵

息してるだけでもいいと祈る母
病持ちいつも夫に助けられ
オバサンと呼ばれ振り向く八十路
裏話聞きだしたくて酒飲ます

倉吉市 前 田 喜美子

災いが天から地から湧いて来る
惜しい田も買収される印一つ
別人になりたくて行く美容院
考えて打ったボールが届かない

倉吉市 藤 井 美津恵

秋風が夏物しまいまた夏日
ケータイの操作忘れて孫に聞く
盂蘭盆の迎え火煙目にしみる
秋風を感じて虫の大合唱

米子市 小 塩 智加恵

電話から変り無いかと軽い嫁
無意識に投げた言葉に胸痛む
自民負け腹立ち少し癒えてきた
陽の当る座席が空いた田舎バス

米子市 見山温子
野菜作り孫にほめられ止められぬ
繕うても鏡は見抜く腹の中

嫁と夫の自慢は聞けぬクラス会
吹く風も秋を匂わす萩が咲く

米子市 加藤 正二

元氣こそ生きるねただと心得る
歳とも三食薬糧になる

川柳で老いの五感を研ぎ澄ます
難聴で中とばしでも通じ合う

米子市 吉田 陽子

途中下車また一病と引き返す
病院へ行くと病人らしくなる

ふるさとへ行つてあなたの風に逢う
今日にけり付けるビールをグイと飲む

米子市 野川 宣子

笑いの種を抱えて孫が会いに来る
生き生きと働く背に殊勲賞

お互いの秘話を覗いた保険証
逆風も味方につけて生きる知恵

鳥取県 飯野 菖子

満月の夜は神経も穏やかだ

野薊は自分らしさの葉をまとい
もやもやを白紙にもどす秋の空

白い米食べて明日の夢を見る

鳥取県 加賀田 志延

投げ出した足は正座が楽という
老いの坂誤算ずる引ききつて
脱皮して大きくなれと蟬が鳴く
夕焼けが明日の段取り保証する

鳥取県 下田 茂登子

半世紀添うても見えぬ腹の底
頑固さの取れぬ夫にあきてきた
まだ女捨ててはいない古希の坂
口だけは骨折しない老婆たち

鳥取県 大塚 美代子

一粒の麦に感謝の生ビール
愚痴一つ包んで飲んだオブラート
手を貸したつもりが共にこける綱
幸不幸背負う小さな母の肩

鳥取県 岡村 孝明

汗流す気になり過疎にUターン
店じまいバーゲン終えて出る涙
八十路すぎ親にも感謝自前の歯
謹厳な父へみやげは酒の樽

鳥取県 岡本 幸枝

芋の葉に触れると転ぶ銀の玉
捨てないで葉にもビタミン豊富です
舌足らず忘れぬうちに詫び入れる
語りあい競いあいでき好い仲間

鳥取県 吉野 いさお

日焼け顔汗して生きた証なり
夏過ぎぬ初秋は間近我は秋
熱帯夜屋根を外して寝ています
卯酒五杯も飲んで風邪忘れ

鳥取県 岩崎 和子

予定表句会中心立ててある
いつときは夢中にさせるバズル好き
戸惑いのピッター容器前に置き
からくりの人形でない生きる我

鳥取県 田口 清帆

冷や汗も夢と分かつて深呼吸
民主党政権誕生政策は
五七五退屈しのぐ指を折る
飲酒して車と人生泡となる

松江市 錦織 禮子

クライマックスBGMが盛り上げる
退院はしてもリハビリついて来ず
分けへだてなくほどの幸つかむ
親子連れコピーそのままたい見とれ

松江市 松浦 登志子

気がつけば同じ言葉をくりかえし
辛くって自由きままな事を言い
人恋し話上手に乗せられる
生まれ年知ってじだんだ踏む女

松江市 相見 柳歩

欠点が逆立ち白くなってくる
ジャングルを抜ける頃には深い仲
熟しても腰をなるべく低くする
買わないと損と買ったらさらに損

松江市 山根 邦代

元氣よく伸び放題の庭の草
満月の笑顔見まわりしてくれる
りんご狩り欲の深さと手の弾み
豊作の話が聞けぬ黄金色

松江市 柏井 日出子

ああ義兄樹岳昇安居士なりぬ(八十五歳)
イチローの安打熱狂おさまらず
両陛下和船ろこぎに安堵する
品格の女史は見せないのど仏

島根県 森山 彰

ざらざらとあの手この手のネオン街
盆踊り国際色に花が咲く
ふる里の匂いに和む盆休み
夏ばてで五臓六腑も悲鳴あげ

雲南市 福岡 博利

この僕を退屈そうにみてる猫
古里は熊に猪狼の群れ
散歩みち手すり代りの妻がいる
今日もまた八十路の口の元氣すぎ

雲南市 菅田 かつ子

栃木市 岡野 すみれ

斜めから見ればあの日の彼の顔
幾山河越して来たとは気がつかず
青蛙しばし手摺へへばりつき
それなりに背中伸ばしているつもり

北九州市 小松 紀子

時としてふさぎの虫に苦戦する
底力ここを出さねば陽がしずむ
どん底を知った人柄暖かい
当然の事しただけで礼言われ

福岡県 林 さだき

五種類の葉を飲んで調子いい
孫がまた大きな靴にはきかえる
見る聞く歩くいっぱいあってまだ死ぬ
わあすごい妻が放ったほめ言葉

唐津市 北村 松風

義理堅い父の光で借れた金
護身術孫の娘も少林寺
手酌酒八十路もやはり恋し友
日曜日妻の介護は子供達

シドニー 三谷 たん吉

政治屋は政治屋だけでわめいてろ
政治屋がなくとも俺ら生きてける
投げやりの気分が生んだ一〇〇議席
間違うなお前に期待誰がする

ありがとうこれだけでいい遺言書
よくなつく子も思春期はそっぽ向き
母子手帖確かにわたしあなたの子
金持ちでない友だから気前いい

八王子市 上原 酒坊

近づけば拗ねてみせますダンゴ虫
ゴキブリも歌を唄えば打たれまい
昼飯もワンコインまでなら出せる
気ぜわしい世の中泳ぐヒレ持たぬ

東京都 井上 つよし

パンツ一丁団扇片手に飲むビール
マニフェスト破れ風呂敷広げ合い
落選にノーネクタイがうなだれる
残暑お見舞い兼落選のお詫び状

東京都 高岡 弥生

父母逝って五年の月日流れてる
友達とランチ笑って憂さ晴らし
メモに書くそれでも何故か物忘れ
夏終わり根菜料理増えていく

横浜市 長島 亜希子

歯が悪い いえ歯もですと言いつ直す
シルバー割引使い涼んだ美術館
六十年も生きて知らない字が多数
先は長いあせることないまだ二歳

藤沢市 加藤 スズコ

初ひ孫先祖に告げる里帰り
話はつきぬ卒寿を越えた兄と姉
帰り待つ花を咲かせてくれた人
百日紅燃える街ゆく介護バス

静岡市 渡辺 芳子

大地震対応出来ぬ年と知り
大地震ゆいごん書けとせかせられ
快復のおそきに我の老いを知り
書けた字の思うに書けぬ老いの坂

佐渡市 高野 不二

空白の日記の方が悩んでる
落ちた人の事は考えない選挙
こんな事出来るテレビと知らなんだ
折込みのない新聞がもの足りず

岐阜市 平野 あずま

踊り場に立つて流れを見極める
失敗を笑って許す勝ち戦
皺いっぱいの乙姫がいる村芝居
回り道安くて旨いコップ酒

京都市 藤井 文代

勝ち組の手柄話ですくむ耳
鈍行のリズムに乗って過ごす古希
損得の絡む話題に耳が立つ
スパーで手抜き促すおばんざい

奈良市 辻内 げんえい
顔見知りに間違いないが名前出ぬ

温度上げ能率下げるエコライフ
帆掛け舟大海原のエコカーだ
人類の歩みのあかし宇宙ゴミ

奈良市 尾畑 なを江

自分流通し筏の着く岸辺
七人が二人になりて研ぐお米
命とや土手を塗り替え曼珠沙華
血統書付いてはいるが医者通い

奈良市 加門 萌子

テレビから健康法に惑わされ
アンチ老いあの手この手の試歩三日
立秋が梅雨明け三日だった変
八月を語りたくない語らねば

奈良県 谷川 憲司

どことなく似た顔になる老夫婦
移ろいを早く感じる高齢者
待ってるが井戸端会議終わらない
美味しさに負けた結果の皮下脂肪

奈良市 矢野 良一

下駄履いて仕入れに行った問屋街
家庭菜園家計の足しになる今年
外は雨好きな洋画で小半日
好期到来秋刀魚松茸栗蜜柑

香南市 近 森 功

快復の兆し晩酌がうまい
言い過ぎた言葉が胃にたまり
騙された女が騙す嬉し泣き
点滴の雫にすぎる命乞い

香南市 桑 名 孝 雄

草食の男に消えた力こぶ
金婚の重さ素直にありがとう
雑学は爺がしっかり育てよう
イッキ飲み酒の邪道ぞするでない

美作市 小 林 妻 子

流行風邪敬老会も中止する
人間の迷惑なんか知れたこと
不況低迷自給自足で恙なし
安住のくらしばかりを模索して

安来市 原 煩悩児

愛しさに労わり合うて夫婦道
中腹の寺で程よい涼風に
憎い蚊も我が血を分けた仲だけど
青春を踊ったままの僕の海

唐津市 岩 崎 實

何もないあなたお昼はどうするの
手ぶらでは行けぬと待たせ一升ビン
隅っこで肩身のせまい男物
記念特価大観の富士手に入れる

竹原市 國 實 力

一日の自分をほめている笑顔
好きでない言葉の中にあるもしも
百メートル奥は猪でる畑
記念写真のつくり笑いに飽きてくる

今治市 渡 邊 伊津志

らくしたいための苦勞が未だ続く
生きている事を充実させる業
指揮棒は音を出さない音楽家
動かねば誰も動かぬのが世相

第115回 大阪川柳の会

日時 12月2日(水) 17時開場 18時締切(席題なし)
会場 サンケイホールブリーゼ八階 八〇三号室
宿題 △明日・赤井花城 △プレゼント・森中恵美子
(各題二句) △黒・河内天笑 △ぎりぎり・磯野いさむ
会費 千円 欠席投句12月1日まで 本田智彦 宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706

原稿募集

○エッセー

本文たて20字×70行(1400字)

○ひとこと

本文たて15字×20行(300字)

エッセーは同人に限ります、「ひとこと」欄は同人
誌友どなたでも応募できます。ただし、原稿の採
否、掲載号については編集部一任とさせていただきます。

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

不死鳥

水の垢

嫁にやった娘は娘で困る十二月

伊達巻きの汚れ年子が二三人

誘惑をひそかに待つも松の内

今立った人の盃うけさされ

連れ出すに応援のある三ケ日

十日戎両手でうける気で出かけ

無くなると知ってもさらの傘を貸し

合い住居米がどちらもきれている

仏壇は凡夫の拝む色で塗り

新嫁のやけは襷をなげるだけ

必要なことしか言わぬ国訛り

送り人のない出帆は雲を見る

金拾た夢ぶぶ漬けで聴く

北風へこれだけ売れば帰る気の

逢状のあとしばらくは落書し

行くだけの旅費しか持たぬ腕を持ち

石鹼を忘れ看護婦とりに来ず

爪弾きの主に身受の金がなく

妻に中将湯をのめのめという寒さ

向いの貸家きづけり靴穿きながら

四十では女もあとへひかぬなり

よく怒るようになったにフト気づき

少し貸せと大学教授如才なし

情報天皇に達せず焼け出され

愛染帖

新家 完司 選

藤井寺市 若松 雅枝

ペアシューズ先ずは近くのお寺から

(評) おそろいの新しい靴でハイキングにでも行くのかと思ったら「近くのお寺」とは……まあ、慣れるまでは歩きなれた道が無難。

高槻市 片山かずお

用事などないが夜中に目が覚める

(評) 朝までぐっすりと眠りたいのに、身体は言うことを聞いてくれない。もうそんなに眠らなくても良い歳なのだろう。

鳥取県 加賀田志延

大不況転んだ人を踏んで行く

(評) 転んだ人を見れば手を差し伸べるのが人情であるが、他人を構っておれないほどの大不況。いざとなれば、誰しも自分が大事。

橋原市 居谷真理子

神様が見ているという負け惜しみ

(評) 負け惜しみであり、願望であり、慰めでもある。「天罰が下る」と思えば、横道なことに對しても少しは我慢できる。

鳥取県 斉尾くにこ

握手した手は離されて次の手へ

(評) ほんの一瞬、ここところが繋がったような気がする「握手」だが、次の瞬間には手もこころも見知らぬ人へ移っている。

栃木市 岡野すみれ

貧乏がやってきました夫の死

(評) 働き者の夫のおかげで何不自由なく暮らしてきたが……「貧乏になった」と萎縮しない程度の老齢年金にしてほしいものだ。

堺市 奥 時雄

多い目に飲みたいときは友と会う

(評) いくら飲兵衛でも家では自由に飲めない事情がある。悪友もまた誘いを待っていて、次には誘ってくれる仕掛になっている。

吹田市 大谷 篤子

リハビリの歩幅で秋の美術館

(評) 外の世界とは切り離されて、ゆったりした時間が流れている美術館。俗世間で疲れたこころのリハビリにうってつけの場所。

和歌山市 喜田 准一

美人ナースに痛くはないとやせ我慢

(評) やせ我慢できる程度の痛みは知れている。七転八倒するほどの苦しみになると、ブライドも吹っ飛んで美人も不美人もなくなる。

藤井寺市 俣野登志子

ゴミとする勇気娘に背を押さず
こける時は転ける注意をしないで

三田市 堀 正和

日焼けした球児にしては細い眉

新米のおむすびの味五ツ星
首切りをリストラなどと翻訳す
曇りのち雨のち欠伸窓のうち
気紛れな男の料理はじまった

西宮市 吉井菜々子

豊橋市 藤田 千休

安産を約束してる腰まわり

選曲で歳がバレてる若づくり

堺市 矢倉 五月

健康管理腹を立てないことにする

足の爪夫に見えぬとこで切る

堺市 遠山 唯教

紙幣よりカードで厚い革財布

脇役の母はいつでも残りのもの

西予市 黒田 茂代

こつこつと貯めて仲よくフルムーン

お招きへほんの一口食べてゆく

高槻市 佐甲 昭一

オレンジの皮をむきつつ明日のこと

定年後すき間だらけの予定表

倉吉市 山中 康子

対面で言えず電話でよくしゃべる

一心のお経に愚痴もまぜておく

弘前市 高瀬 霜石

いざという時に役立つ自尊心
養毛剤振ってわたしを引き締める

何が不足かよその夫と比較する
西宮市 片山 忠

東かがわ市 川崎ひかり
藤麻疹今日はお世辞を言い過ぎた

海南市 三宅 保州
人間が檻に入ればよいのです

堺市 志田 千代
行者から借りてきたよなネットレス

八尾市 田邊 浩三
池の鯉だけが迎える里帰り

和歌山市 木本 朱夏
リーダーが古い帽子を放さない

空き缶に薔薇を咲かせている詩人
大阪市 谷口 義

朝ごはん食べると眠くなってくる
一日を振り返らない夕ごはん

坂出市 綾井 嘉彦
転勤を拒み続けて窓際へ

お釣だけでもらって買ったもの忘れ
羽曳野市 徳山みつこ

逆縁の喪主へ只ただ深い札
日の出には手を合わせてる無宗教

枚方市 寺川 弘一
紙ヒコキを飛ばしたくなるノッポビル

困るのはこの世に美人多過ぎる
西宮市 緒方美津子

せっかちの茹でたほうれん草うまい
屑芋の煮ころろが好きな父

大阪市 大川 桃花
タンポポの綿毛みたいな天下り

豊中市 水野 黒鬼
本人は「いい人でした」とは聞けず

海南市 小谷 小雪
雑巾も一張羅も干す同じ樟

枚方市 丹後屋 肇
ゴキブリを叩き潰して掌を合わす

吹田市 穴吹 尚士
長生きはやめよう日本が破産する

寝屋川市 籠島 恵子
懲りもせず夫が誘う甲子園

マスク一〇〇枚まだ足りぬかもしれぬ
大阪府 小泉ひさ乃

晩学に右脳左脳が冴えてくる
九月の誘いクリスマス・ディナーショー

堺市 大隅 克博
張り替えは伝い歩きが済んでから

鮎買わず離れて見てた紙芝居
米子市 政岡未延子

豚々と父母の癖まで受けついで
晴天に優先順位崩れたす

熊本県 高野 宵草
娘のデイト樹上で見てる夫婦鳩

蚯蚓でも助けてやっいたい気持ち
かばちゃ茄子昭和と同じメニユーです

加東市 中上千代子
味噌汁にご飯わたしを離れない

堺市 村上 玄也
テープカット微妙に合わぬタイミンク

藤井寺市 太田扶美代
わたくしにまだ少しある正義感

吹田市 太田 昭
百均の眼鏡で運命線を見る

大阪府 萩原 大朔
熊が出て犬と猿とが仲直り

篠山市 円増 純子
三十歩あるいて休むでも歩く

大阪府 小谷 集一
ただ酒を飲んで男が試される

倉吉市 松本よしえ
おばあちゃんと寝ると言わなくなった孫

堺市 加島 由一
子は背く私が母にしたように

鳥取市 有沢せつ子
睡眠を一匹の蚊にからかわれ

年寄りの繰り言はみな頷ける
生駒市 飛水ふりこ

ぼろぼろと泣いて大食いできた頃
根っこから見れば枝葉のたわい無さ

三田市 石原 歳子
秋風に家事はかどってラジオ聞く

秋風に神話楽しい古事記読む
弘前市 福士 慕情

足元の明るいうちはまだ飲める
気兼ねなく放屁の出来る家がいい

香芝市 大内 朝子
老いはれてゆく魂に紅をさす

松江市 三島 淑丘
珍客へ貴重な時間差し上げる

大阪市 岩崎 公誠
アルコールの滓が詰まっている頭

大阪市 榎本日の出
あんばいを好きと言うのが恥かしい

八王子市 播本 充子
友達の友達の子がイチローで

大洲市 中居 善信
足腰の部品は売っていませんか

岸和田市 雪本 珠子
別れたが心が軋む音がする

鳥取市 岸本 宏章
ハイチーズ作り笑いが続かない

芦屋市 黒田 能子
サプリメント飲んでいるから医者嫌い

羽曳野市 森下 一知
悪戯にボチは黙秘を決めている

松江市 松浦登志子
ことわざの意味間違えて半世紀

神戸市 山口 光久
人並に僕にもあったのは加齢

大阪市 森田 明子
行き慣れた人の小さな旅艸

岩出市 村中 悦男
爆笑に取り残される遠い耳

札幌市 三浦 強一
正直の結果の損は善しとする

鳥取市 土橋 睦子
静電気嫌い木綿と仲が良い

高槻市 乙倉 武史
酒煙草敵に回して闘病記

紀の川市 北山 絹子
大金に縁がないからよく眠る

枚方市 伊達 郁夫
金で済む話と聞いて恐くなる

京都市 高島 啓子
呉服屋の建てかえ葬祭場になる

宇野市 平田 実男
野暮用で埋まる私のカレンダー

鳥取市 倉益 一瑤
生欠伸してやりすぎ愚痴の数

京都市 都倉 求芽
力こぶないがやることだけはやる

箕面市 広島 巴子
久し振りの川に寝る旅の宿

茨木市 藤井 正雄
祈るほかなし産声を待つ廊下

交野市 山川日出子
お見事ね地震に強い五重塔

黒石市 相馬 一花
人生の並木路行く腐れ縁

奈良市 尾畑なを江
うたた寝で久方ぶりに祖母に会い

紀の川市 辻内 次根
のりピーにクスリわたしにアルコール

香南市 桑名 孝雄
無病息災サブリの酒が効いている

八尾市 中島 春江
虫の音に自然と口にならべ歌

今治市 渡邊伊津志
知り合いの声で間違い電話来る

鳥取県 平木 公子
生きていたご褒美保険満期なり

唐津市 山口 高明
秋夜長四大奇書など読もうかな

大阪市 津村志華子
本心を探り合ってるカプチャーノ

松江市 津川 紫晃
大食いを競うテレビの平和ボケ

鳥取県 石谷美恵子
平和ボケこんな良い世に永らえて

河内長野市 針生 和代
嫁と来た息子の腰が落ち着かぬ

高槻市 左右田泰雄
どしゃ降りたたきのめした蟬の殻

河内長野市 木見谷孝代
沈んだら力を抜けば浮いてくる

鳥取市 吉田 弘子
健康へ生ビールより糖質ゼロ

唐津市 井上 勝視
戻れない悔いもみ消しているお数珠

阿波市 三浦千津子
老人に成りきらぬよう歳をとる

八尾市 高杉 千歩
寝てひとり起きてひとりへ秋立ちぬ

大阪府 笠嶋 惠美
四季咲きのバラと同じ息をする

河内長野市 黒岩 靖博
ケタイで指先きたえボケ防止

西宮市 牧湖富喜子
欲しいもの皺にならない包装紙

羽曳野市 吉村久仁雄
自転車に乗れぬ娘一人豪に住む

海南市 堂上 泰女
植木屋さんも鼻歌うたう季節来る

和泉市 横山 捷也
居酒屋の噂通りに延びた票

富田林市 片岡智恵子
警戒心儲け話にすぐ解ける

大阪府 坂 裕之
よその子を叱って親に睨まれた

藤井寺市 鴨谷瑠美子
ハイハイと丸い返事も楽でない

鳥取県 竹信 照彦
パターンが同じになった夏まつり

高槻市 富田 美義
お祭りに弾んだ下駄も過去の音

八王子市 川名 洋子
音もなく攻め寄る老いとバトル中

鳥取県 山下 節子
神経をビリビリさせる褒め言葉

大阪府 米澤 俣子
集く虫も少子化ですか里の秋

四條畷市 吉岡 修
人こみが去ってモラルの落しもの

倉吉市 野口 節子
新兵器孫を師匠にしてこなす

八尾市 村上ミツ子
帰るから行くにかわっていく実家

西宮市 藤本 直
男なら出来るでしょうはセクハラだ

神戸市 田中 章子
思いやる心が欠ける有頂天

藤井寺市 鈴木いさお
回復の兆しか酒が欲しくなる

大阪府 松尾柳右子
三角のむすび作ると亡母思う

鳥取市 岸本 孝子
惜しまれて逝きたいなどと欲を言う

大阪府 奥村 五月
上司には文句言わさぬ三次会

高槻市 安田 忠子
ロングヘアばつさり切って生き返る

池田市 上山 堅坊
飯屋とも懇意になった独りもの

高知市 小川てるみ
ドリンクの代り蜂蜜なめてます

寝屋川市 森 茜
気心の知れた筆ペンまとめ買い

大阪府 伏見 雅明
サヨナラを打ってグラウンド逃げ回り

鳥取市 福西 茶子
底から見せてタンポポ咲き誇る

和歌山市 武本 碧
柳友に磨かれ楯の二二三つ

奈良市 岩本 浩一
新聞はテレビ欄から見る老後

三田市 上垣キヨミ
年重ねどこかに角を置き忘れ

神戸市 山崎 武彦
点数がどうあれ父の背を見る

大阪府 吉内タカ子
ベレー帽すきで写真に収めとく

姫路市 古川 奮水
ごめんねと先乗りされたエレベーター

大阪府 小栢こずえ
相談の無い淋しさも気楽さか

西宮市 泉水 冴子
ロボットがオムツを替える日も来そう

鳥取市 田村 邦昭
先ず一步進めば運も味方する

弘前市 今 愁女
じゃがいもは皮むき楽なメーカーイン

堺市 宮本かりん
わたしから足さねば愛が干からびる

第15回 川柳塔まつり

同人総会

平成 21 年 09 年第 14 期川柳塔社同人総会は、十月十二日午前十時からホテルアウィーナ大阪で開催された。村上玄也副理事長の司会で開会し、河内天笑主幹があいさつ、小島蘭幸副主幹を議長に選任して議案審議に入った。

一号議案の事業活動は井伊東吉常任理事から報告した。具体的な事業活動を、後記の「事業活動報告」に扱い、各別に整理して説明しながら、次の通り述べた。

・同人総会・川柳塔碑合祀法要・特別常任理事会（八十五周年記念大会・一〇〇〇号記念大会打ち合わせ）を開催した。

・第 14 回川柳塔まつりを開催した。

・本社句会開始時刻再検討のためのアンケートを実施した。（結論は夏季は夜間、冬季は昼間の従来通りとした。）

・路郎川柳を毎号掲載し、好評を得ている。

・同人誌友の拡大定着対策を継続して推進している。同人名簿を改訂発行した。

・塔誌販売扱い店を増強し実績を挙げている。本社事務所にパソコンを導入し、事務合理化の端緒とした。

続いて、山口光久常任理事が前年度の会計決

算報告を行い、藤村亜成会計監査が監査承認の旨を報告し、一号議案は承認された。

二号議案の 09 年度の事業計画は、井伊東吉常任理事が、前年実績を基盤にして次のように事業拡充計画を提案した。

・部長連絡会を今年度も積極的に実施し横の連携を図る、また常任理事会への提言諮問事項の準備を行う。

・パソコン導入に伴い、業務内容・手順などの明文化を検討する。またオンライン化を図る。

・路郎師とその門下生の句の紹介を継続し、川柳塔誌の更なる充実を図る。第三回「ま川柳」の募集を行なう。

・同人・誌友の拡大定着努力を継続する。



議長の小島蘭幸副主幹

・各地の塔川柳会との連携強化を継続して推進する。

09 年度会計予算案は山口光久常任理事が提案した。

一号議案も特に問題なく承認された。

新人事業を西出楓楽理事長から別項の通り提案し、全会一致で承認された。

これにて全議案を承認し議長を解任。新役員を代表して河内月子副理事長が「裏方に徹して、川柳塔の運営に役立つよう努めたい」と挨拶した。

閉会の言葉で山本希久子参互が、「現役役員を退任するが、後方から積極的に支援したい。新体制のもと役員同人が一丸となつて川柳塔発展のために努力したい。」と述べた。

■事業活動報告

【事業】

本社関連

2008（平成 20）年

10月5日 同人総会ホテルアウィーナ大阪・80名参加

第 14 回川柳塔まつり（ホテル・アウィーナ大阪・233 名参加）

11月8日 川柳塔碑合祀法要（高野山大霊園・16 名参加）

2009（平成 21）年

6月9日 特別常任理事会（ホテル・アウィーナ大阪・25 名参加）

20 年 10 月、21 年 3 月・4 月 本社句会開始時刻アンケートを実施

9月から選考交代

「水煙抄」

川上 大輪
牛尾 緑良
高田美代子

「主な受賞・表彰」

谷口 義 本社会 月間賞杯永久保持者
八木 千代 (社)全日本川柳協会 80歳以上の
功労者顕彰

「出版・句集の刊行」

乙倉 武史 「つれづれ」
朝日なわ柳壇入選句集

藤井 正雄 「私の百句 パート3」
横山 捷也 「のりしろ」
奥田みつ子 「川柳カレンダー」



同人総会の会場風景

川柳愛好会くろえ合同句集 「くろえ」

早川 潮行 「独 標」

富田 美義 「二人三脚」

もくせい合同句集 「もくせい」

そつりゅう会合同句集「そつりゅう会句集5」

「物語者」(8名)

春城武庫坊 平成20年8月31日没 88歳

長谷川春蘭 同 10月14日没 98歳

早川 清生 同 11月4日没 79歳

宮本三喜夫 同 11月26日没 88歳

小林トメ子 同 11月30日没 94歳

濱野 奇童 同 12月28日没 81歳

山門 タミ 平成21年3月29日没 85歳

吉田あずき 同 4月4日没 85歳

■新任役員(留任は含まず)

副理事長 河内 月子

常任理事 居谷真理子 佐々木満作

参与 水野 黒兎

理事 井伊 東吉 山本希久子

江島谷勝弘 加川 靖鬼

籠島 恵子 鈴木いさお

飛水ふりこ 長井 善純

榎本 宏子 森村 美花

山本 柳昌 河川 無限

■新同人(23名)

小林 わこ枝方市 藤本 直(西宮市)

原田すみ子大阪市 江島谷勝弘大阪市

田浦 實大阪市 安田 忠子高槻市

澤田 定子大阪市 大久保のん子堺市

荻野 俊山堺市 黒岩 靖博河内長野市

松尾美智代豊中市 福田 好文(三田市)

伊藤登志子藤井寺市 福田 悦子羽曳野市

伊藤アヤ子藤井寺市 津田シルク(藤井寺市)

金川 宣子加西市 松山 芳生(青森県)

笹倉ひろし八尾市 伊藤 博仁(大阪市)

岡本 昇田辺市 二宮 紫鳳枚方市

増井ヨシ枝藤井寺市

同人総会出席者(順不同・88名)

北野哲男 村上玄也 井伊東吉 河内天笑

坪井孝一 伊達郁夫 河井庸佑 鈴木いさお

前たもつ 杉本義昭 福田好文 指宿千枝子

吉村一風 三島松丘 西内朋月 山本希久子

岩崎公誠 河川無限 吉岡 修 山岡富美子

水野黒兎 加島由一 小島蘭幸 江島谷勝弘

矢倉五月 藤村亜成 西出楓楽 飛水ふりこ

小澤幸泉 黒田能子 福士慕情 鴨谷瑠美子

山口光久 土橋 螢 長浜美籠 久保田千代

米澤淑子 井丸昌紀 籠島恵子 小川てるみ

山田耕治 森本弘風 小谷集一 佐々木満作

木本朱夏 河内朝子 松尾和香 奥田みつ子

川上太輪 大内理恵 村上直樹 居谷真理子

坊農柳弘 安土理恵 榎本宏子 古今堂蕉子

新家完司 松原寿子 春城年代 榎本日の出

福西茶子 榎本舞夢 大川桃花 太田扶美代

柿花和夫 鈴木公弘 坂 裕之 原田すみ子

長井善純 江見見清 森村美花 竹治かし

山本柳昌 北村賢子 米田恭富 松尾美智代

山本義子 山田葉子 渡辺富子 出口セツ子

谷口 義 加川靖鬼 高島啓子 岩佐タン吉

藤井正雄 堀 正和 川端 一步 穴吹尚士

■おはなし(要旨)

嘘の効用

吉本興業文芸顧問
帝京平成大学教授

竹本 浩 三

「川柳」は年輩の方々の文学と勘違いしている人が多い。

諸語を活かし風刺を旨とする川柳は、世界に冠たる五七五文学で、詠む人間の絶対的な観察力と主張がなければならぬ。私は大学で「川柳」の作り方を教授しているが、学生たちは即座に可笑しい川柳を詠んだ。

漫画を馬鹿にする年代がある。限られた駒数の中で、極端に短く、しかも当の得た台詞



熱弁の竹本浩三先生

内容を表現する技はそう真似のできることはない。それに近いのが川柳だと解釈している。それを知ってか知らずか学生は作り少々手を加えることで秀逸な川柳となった。「わが家では外に鈴虫家に母」(田中純平)「無理に着てああ瘦せたぞと」サイズ」(明日からと決心だけのダイエット」(飯野佑美)「痛風で医者通いするホームレス」(青木彩夏)いずれも三年生である。

かつて「ああ大阪」という大阪文化人川柳集を吉本から上梓したことがある。元OSKのトップスター長谷川恵子の「大阪はホームレスまで皆グルメ」には笑った。笑いは納得である。ウチの島本譲二は「コメディアン酒と女は二合(号)まで」と言う。

川柳とは、常に知識欲を持ち観察力を発揮して、如何に諸語性を高めるかにある。川柳塔社にご在籍の皆様はお分かりと思うが自分だけが分かっていて他人には全く理解不能な句がある。これって川柳なんだろうか。諷刺であり笑いを意識していると力んで詠むものでしょうけど、解釈されなければ何の意味もなさぬ。岸本水府が選者となった「番傘」に掲載の川柳は、相当過去のはずなのに今でもしっかりと解釈できる。川柳とは本来そうでなければならぬはずである。

人間って生まれたてでも笑うことを知って

いる。川柳文学の基本は諷刺と諸語にあり、尚且つ作美精神がなければ成り立たない。長寿を願わば、この極端に短い五七五文学の構成と作句術を会得するべく、常に頭脳の錬磨を提唱したいものである。

「吟行」とか「遊吟」という言葉がある。いつ如何なるときでもメモれる体勢を整えておくことである。その作品を数日捨て置き、気づいて詠み返し作り直せば、数段いい作品に昇華するハズである。

遊吟年齢を思い切り下げ、若者たちにもっと川柳感

覚を養う時期がきている。

彼らに生来備わっているこの感覚を分かれさせ、酷使させ、成長させる意識を働かさねばならぬ。



記念句会の会場風景

各賞表彰・記念句会

受賞者（敬称略）―前列右から、てるみ・理恵・主幹・茶子・淳・ふみ
後列右から、時雄・小雪・和郎・恭昌・真理子



主幹を囲む晴れの六賞受賞者

秋晴れの続く三連休の最終日、体育の日の十月十二日、第十五回川柳塔まつりが賑やか

に開催された。遠く北海道、青森、西からは鳥取、島根、高知、中国、九州、更には海外からも同人が馳せ参じられ、地元に参加を加えて309人の大人数となった。

他柳社からも選者の田中新一氏（番傘本社）をはじめ多数の柳人が参加された。予想を大きく越える参加者数に事務局は記念品の不足を懸念し、壁際に追加の椅子席を用意し、慌ただしく開会を待った。

定刻の一時、楓楽理事長の開会の辞、そして天笑主幹のユーモアたっぷりの挨拶と進み、記念句会の華は六賞の表彰。遠方から表彰式に駆けつけられた受賞者の晴れがましくも嬉しい顔が並んだ。

主幹から表彰状と記念の盾が手渡され、所属の吟社から花束が贈呈された。

引き続き本年度の新同人23名のうち出席の16名が登場。年齢を忘れたような颯爽とした足取りで正面に整列し、穴吹同人誌友部長から紹介され、代表の江島谷氏が抱負を述べた。

お話は吉本興業顧問の竹本浩三氏。

「嘘の効用」と題して、興味深い話術を披露された。（78ページ参照）

月間賞は藤井寺市の鈴木いさお氏。

司会（太田昭、長浜美穂）

脇取り（扶美代・蕉子・ゆ十代・宏子）

清記（光久）撮影（公誠）

兼題「招く」 田中 新一選

美しくなるよとカタログが招く
披露宴招く切手は鶴でくる

気分一新秋の空から招かれる

歳時記に招かれ秋を手掴みに

手招きの秋とじつくり酌む地酒

杉玉の青が招いた初しほり

Uターンしろと故郷の祭り笛

高速に乗っておいでと村祭り

来なければ絶交と書く招待状

おそれるおそれる殺し文句に招かれる

招待状振込用紙ついてくる

ワッハ上方ビリケンさんに招かれる

紅葉に手招きされた時刻表

コスモスに招かれ心解き放つ

業平に招かれ月を愛でてます

いい雨に土がほんのり蘇る

香焚いてお招きしますにじり口

お茶席に招かれ知った美の心

招かれて酒の肴にされた部下

誰かれと言わず招待するタヌキ

人徳が招いた通夜の椅子の数

手招きに顔より速く耳が寄る

運動会来てとかわいい文字踊る

アキ
栄二

緑

朱夏

直樹

幹和

東風

富美子

扶美代

寿子

千歩

光枝

和女

あかね

紀子

加お里

柳弘

忠子

富子

満作

公弘

穂夫

和郎

セツ子

不揃いな個性が招くハーモニ
 イタズラが好きで招いた大ピンチ
 六歩指指して邪魔ものおびき寄せ
 招かれて母は花野に行つたまま
 名月を招き入れた老母の床
 福招く妻の笑顔は小槌です
 招福のかたちに生まれ来た赤子
 招かれてみたい大仏のてのひら
 矢印に招かれて着く弥陀浄土
 てのひらを広げて待つている山河
 どんぐりに招待状がつけてある
 招待状来たので仮面手入れする
 招待のお皿に盛つた下心
 挨拶は抜きで珍客招き入れ
 心地良い招きに時間丸く過ぎ
 温かい招きをそつと持ち帰る
 招かれた個展へお世辞言いにゆく
 正直な言葉でうっかり招く棘
 負けた日の孤独が招く屋台の灯
 閻魔には呼ばれぬように余所見する
 天からの招待状は不意に来る
 招かれて掃除せんたくさせられる
 財布ごと嫁から旅に招かれる
 乗り越えて人を大器にする挫折
 ひたむきな愛が奇跡を招き入れ
 裏木戸から招く氷点下のはなし

則彦 茶子 次郎 桃花 てるみ 一風 朝子 惠美子 黒兎 誠 ますみ 五月 鐘造 鈴子 たもつ 玲子 瑠美子 さだき 好 美花 章子 良一 すみえ 森子

愚痴を聴くことしか出来ぬ招き猫
 住
 大不況商手上げたい招き猫
 招かれて胸の振りが鳴りやまぬ
 寂聴の法話が招く笑い声
 手招きに声をひそめる竹箒
 遠い日の童宮城がまだ消えぬ
 人
 化けてきて下さい月が奇麗です
 地
 散らかってますがと掃除したばかり
 天
 一番来てほしい人から電話する
 軸
 隅々にころを配るおもてなし
 兼題「シングル」 赤松ますみ選

慕情 浩子 篤子 典呼 保子 あけみ 真理子 登志子 恵子

独り言一人笑いをする鏡
 シングルの女何処にも顔を出す
 シングルになりましたのと嬉しそう
 萩ススキ去年二人で呑んだ猪口
 仏飯を下げてひとりの昼がすむ
 一人居の老母日暮れを早くする
 老母一人今日もしもし定期便
 シングルのわたしに角がはえてくる
 シングルに悔恨という抱き枕
 生き仏心に秘めてまだ独り
 シングルを貰っているお月さま
 ニルギリを淹れるひとりに戻る朝
 シングルが増えてベットが売れている
 旧姓に戻ると仲間増えました
 表札二枚シングルどうし仲がよい
 コンビニの袋と帰る一人部屋
 笑いながら散るのもいいと桐一葉
 粗塩の白さうまさに似て一人
 シングルは男の胸で泣くものか
 シングルの肩の軽さと波しぶき
 出張へ妻はバンザイして送る
 浮き雲に歩調を合わす一人旅
 グッドバイ二人三脚から抜ける
 シングルのころは綺麗な人でした
 シングル盤で聴いたビートルズと生きた
 単身赴任疲れて服のまま寝込む

寿之 瑞枝 美和子 穂夫 美千子 節子 毅 早人 耕治 見清 完司 征子 啓子 和夫 たもつ 昭二 朱夏 蕉子 靖博 和子 賢子 航太郎 あけみ 公弘 正明 正雄

独り身の序曲コンビニから明ける
独身のくせに家計薄つける奴

片方の臓器でいのちまだ続く

シングルベッド虹の半ばにさしかかり

戸籍ではずっと続けている独り

弱音など吐けぬひとり保険証

淡い世へ先行くシングルの柩

ワンガラス琥珀が秋の腑をひたす

枯れ具合よくてシングル持てている

愛はまだ未完シングルたちの森

介護ベッドの広さの中にいるひとり

シングルの挑戦脚を組み変える

ひとり居て自分の音をもてあます

一行詩まだ七首は呑んだまま

梯子から下りてひとりになりました

単身の父さらわれたまま根雪

佳

一本になると見捨てられる火箸

君にウンと言わせたシングルヒットです

会心の笑みはひとりで噛み締める

方程式ひとつが立っているのです

わたくしはジュニアライトだったのに

人

おひとりさまの老後鳥獣戯画の中

地

呼びかけてひとりぼっちを確かめる

和宏

正和

次郎

道夫

六点

無限

くにこ

幹和

芳子

森子

蘭幸

大輪

喜八郎

真理子

義誠

美津子

天笑

幸雀

あきこ

典呼

楓楽

好

天
仕方ないことを背負っている独り

軸

シングルをシグナルにして進みます

兼題「長い」 政岡日枝子選

不滅です誰も死なないサザエさん

あまりにも長い夢見た自民党

当分は長い日続く宇宙人

心地よい椅子に長居をしてしまい

窓際へ長い職歴坐らせられ

前置きが長くてうどん伸びている

回覧板長逗留の家がある

長話朝の散歩が昼になる

じつくりと活字と遊ぶ秋夜長

長く寂しい秋が始まる吾亦紅

温もりがほしくなる秋夜長

長いしつば実は隠しているんだよ

なぜにそう沈黙づく拉致の海

長い長い父の一日娘が嫁ぐ

ビビッときてながく愛してまだ夫婦

長いドラマ始まる産着縫っている

金のない余生は長いなと思う

長い旅です白菊黄菊埋もれて

秋深みロダン影も長くなる

人はかる長い物差し持っている

新一

光枝

一步

美津子

鈴子

郁夫

東風

博泉

明子

朱夏

美花

章子

幸雀

正明

富子

希久子

外吉

千津子

美和子

啓子

裁判員にとつても長い三日間
ものさしの長い家族にある温み

長寿国良いことばかりとは言えぬ

じゅむじゅむの名前を聞いて日が暮れる

生命線こんなに長いどうしよう

長生きをしますガマンしています

長い夢から覚めたら後期高齢者

葬列の長さ人柄惚ばれる

命より長いローンと住んでいる

ムダな抵抗を続ける鏡の間

巻かれるには余りに長い帯である

蛇行して傘寿へ長い川だった

待つてます少し熟れてるバラですが

言い出すと尻尾が見えぬ旅自慢

寝たさりの数も入った長寿国

定年を待つてた妻のバスポート

闘病の長さよさくらからさくら

ラミダスの猿人がいてわたし居る

千円につられ長蛇をなす車

ふて寝して十二時間の長い夜

母さんが居ないと長い一日だ

一日が長いな妻が口利かぬ

長いはずだトイレに本が置いてある

ブルートレインに長い昔の借りがある

原風景に昭和を詰めた長い貨車

戦後史がグレーのままで六十余年

保州

公弘

智彦

良一

美千代

美代子

かりん

栄子

(古)和子

卓

一甲

ふみ

隆之

和郎

美智子

緑

無限

(失)五月

淳司

茶子

柳昌

ヤギエ

蘭幸

元紀

孝子

千恵子



景風講披

キリンの恋待ち惚けには慣れている
長い無視これが最後の答です
長い時間かけたが遂に白紙出す
面白い噂尾ひれまで長い
長いこと嘘ついてない年かなあ
佳
お布施はずむと少しお経が長くなる
てくてくとまだてくてくと職がない
長かったねえと氷河の割れる音
帯の長さは母のものとわたくしのもの
寝たきりの母が握っていた時間
たかこ
淳
良子
見清
天笑
聖水
廣子
ますみ
恵美子
喜八郎

人
愛は永久に長所ばかりを想い出す
地
長い人生祭をいくつ見ましたか
天
長編のわたし操る火よ風よ
軸
一年の長さ幾度も花が散る
兼題「回る」
川上 大輪選

瑞枝
年代
森子
わたくしごとと回ってみたい万華鏡
一回りした噂だな太って
洗濯機まわすと恥が浮いて出る
回るのはあなたわたしは真ん中に
回転木馬のころはやがて父を向く
あの事は言えないままの観覧車
昨日より優しさたして風回る
回れ右しても昨日は帰らない
回り舞台の上で足踏みしてしまふ
空き家にもチラシを入れて回ってる
回転が良いが脱輪ばかりする
徘徊と通報された万歩計
回転レシーブ魔女も私も若かった
根回しを忘れた今日の風当たり
人差し指回り回って自分差す
もうとうに諦めている腰回り
ヨメさんと鉢合せした回り道
母さんが動くときみんな回り出す
モノリザと回転ドアですれ違ふ
ばあちゃんを拾って回るシャトルバス
休んだら病気になった独楽ねずみ
一回りして行くところが無くなった
回転椅子くるりと回す天降り
缶ビール一つで頭回りだす
ハローワーク回り弁当食べただけ
環状線一回りして酔いさます

美和子
修
富美子
まつ子
元紀
ひろし
篤子
みつ子
ますみ
志千代
遊子
一志
恭昌
鐘造
楓楽
尚士
見清
郁夫
昭
俣子
美津子
蘭幸
たかこ
すみえ
典呼
毅

交番はいつも巡回中で留守
閉園を回転木馬まだ知らず
回り道お地蔵様と手を結ぶ
軋み合いながらも回る夫婦独楽
回り道してもバンならあのバン屋
時どき回る男ひとりの換気扇
鶴橋で酷使されてる換気扇
遠回りした言い訳とそして嘘
人生はこんなものかと回遊魚
環状線目覚めてみたら同じ駅
恋いちず螺旋階段登り切る
鰯雲キリンの首はよく回る
まわり道ばかりして来た父も母も
輪廻転生次は男に生まれたい
政権はどうあれ地球回るだけ
回れ右したらヒントが落ちていた
則彦
碧
登美代
無限
あきこ
麗
弥生
妙
六点
てるみ
岳人
恵美子
れんげ
完司
光久

則彦
碧
登美代
無限
あきこ
麗
弥生
妙
六点
てるみ
岳人
恵美子
れんげ
完司
光久
わたくしごとと回ってみたい万華鏡
一回りした噂だな太って
洗濯機まわすと恥が浮いて出る
回るのはあなたわたしは真ん中に
回転木馬のころはやがて父を向く
あの事は言えないままの観覧車
昨日より優しさたして風回る
回れ右しても昨日は帰らない
回り舞台の上で足踏みしてしまふ
空き家にもチラシを入れて回ってる
回転が良いが脱輪ばかりする
徘徊と通報された万歩計
回転レシーブ魔女も私も若かった
根回しを忘れた今日の風当たり
人差し指回り回って自分差す
もうとうに諦めている腰回り
ヨメさんと鉢合せした回り道
母さんが動くときみんな回り出す
モノリザと回転ドアですれ違ふ
ばあちゃんを拾って回るシャトルバス
休んだら病気になった独楽ねずみ
一回りして行くところが無くなった
回転椅子くるりと回す天降り
缶ビール一つで頭回りだす
ハローワーク回り弁当食べただけ
環状線一回りして酔いさます

毅
典呼
すみえ
たかこ
蘭幸
美津子
俣子
昭
郁夫
見清
尚士
楓楽
鐘造
恭昌
一志
遊子
志千代
ますみ
みつ子
篤子
ひろし
元紀
まつ子
富美子
修
美和子

回り道これが私の現在地

年に二度回ってきそう誕生日

私には同じ地動説天動説

ひと回りして行き先を考える

砂時計くるり回して生き直す

日傘くるくる言い訳なんか気にしない

時計回りに生きて来ましたオール3

試食して回っただけで引きあげる

手を振って周回遅れだが元氣

住

回り道男に帰る家がない

裏方に回って僕が見えてくる

あなたしかいないと言われ逃げ回る

回るものすべて回して孤独なり

言い訳を探して家を二回り

人

子どもさん回らぬ首にぶらさがり

地

夢を追う独楽なら何度でも回す

天

泣いて笑って回る地球に棲んでいる

軸

回転が少し足りない僕の脳

兼題「歳月」

板尾 岳人選

歳月が妻を空気にしてくれた

弘 風

恵子

桃花

求芽

幸泉

希久子

アキ

幸雀

博泉

東風

雀舎

ダン吉

惠

公弘

良子

勇

のん子

螢

歳月が一本ずつの棘を抜く

悲しみを消す歳月と言う名医

歳月に重しをつけて引きづらす

歳月が尖った男丸くする

歳月という万能の処方箋

悠久の音コチコチと古時計

それぞれの歳月それぞれに命

歳月の海に痛みを眠らせる

歳月の流れに溶けてゆく野心

歳月に路傍の石も拝まれる

歳月よ立食いそばを食いながら

歳月の設計ミスか都市砂漠

歳月がそっくり納屋にある故郷

生きる意味考えながら餅を焼く

歳月が憎しみまでも白にする

歳月が転がしてある子供部屋

美しい嘘で歳月食べている

歳月を埋める手紙を書いている

歳月のはなしを聞きにゆく渚

影法師あなたもそつと老いてゆく

歳月に赦しを乞うて罪と罰

歳月と神の試練に勝つ奥歯

人間になろうと歳月を歩く

昭和一桁あ戦争と闇市よ

歳月を経てアダムとイブのまま

喜八郎

加代

聖水

繁夫

弥生

順啓

和女

柳弘

宏子

いわゑ

ひろし

義博

道夫

たもつ

無限

誠

理恵

淳司

富美子

富子

修

直樹

キヨミ

歳月の重さに耐えた膝頭

花いちもんめ母が童になつてゆく

眠りから覚められたマンモスの鬱

歳月がみんな喜劇にしてくれる

歳月を大事に食べた良い顔だ

歳月をごまかしようもない素顔

歳月が沁み込んでいる手水鉢

歳月に生年月日も古くなり

引き出しの奥から歳月を見つけ

歳月はいくらだしたら買えますか

歳月に翻弄された昼の月

歳月の結びを縫う木綿針

歳月は血圧だけを上げている

悲しみは歳月だけを友にする

処方箋歳月と書く他はなし

歳月を風がさらっていったきり

歳月の脆さ知ってる赤い爪

歳月と言う揺り籠で夢を見る

脇役の歳月だったなあ影よ

歳月は阿弥陀様からもらい受け

床の間にずっと居座る古い壺

歳月がかしまつてる古本屋

歳月はみんなドラマに仕立て上げ

歳月が心貧しき日を洗う

佳

歳月がぼろぼろになる紙オムツ

千鶴子

紀子

早人

あかね

航太郎

好

完司

義

外吉

勇

千里

俣子

勝弘

美智代

(矢)五月

希久子

アキ

集一

朱夏

順子

(久)千代

和夫

淳

元紀

正雄

歲月や落し穴から出られない
南無阿弥陀仏歲月の中の人

歲月を食べて生きてる骨董屋

歲月のじむ写経の墨を磨る

人

歲月の冬の辺りに棲む蛭

地

歲月がいっぱい詰まる丸い石

天

歲月を流して川は蛇行する

軸

莫迦になる為の歲月だったのだ

事前投句「顔」

河内

天笑選

顔写真去年の分を出しとこう

クラス会いじばあばの顔揃う

お名前は存じませんが顔馴染み

どの顔も笑えば上がるワンランク

まっすぐに見たことがない妻の顔

いい笑顔きつと平和な家の娘だ

その地にはその地に似合う顔になる

人間だから五欲の顔で切り抜ける

合掌をされる遺影の良い笑顔

最高の笑顔で言おうグッドバイ

怒った顔見せずに生きてきた傘寿

極楽へ行く気の顔で聞く法話

蘭 幸

恵美子

楓 楽

昭

森 子

昌 紀

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

郁 夫

正 雄

僕だけの顔を造った神の秘技
正直で笑顔つくれず損をする

親の顔見て整形と見破られ

メイクして女たかかう顔になる

お化粧を仕上げそそぐ降りてゆく

妥協癖のつべらぼうな顔になる

二三箇所いっぺんは妻も美人の部

飲みたいと顔に出ている休肝日

顔役者あとは大根だけでよい

聞かんでも顔にあかんと書いてある

チャネルをすぐに変えたい好かん顔

顔のことあなたに言われたくはない

そんな顔するなよ金は貸してやる

五百羅漢にもイケメンを探す妻

まじまじと顔見て名前探してる

母似だといわれ嬉しい顔になる

赤ちゃんに泣かれる顔ですみません

この顔で生きて行きますすしからず

歪に浮んだ医者苦しい顔

ダンゴ鼻よくぞ見初めてくれました

怖い顔した人に席ゆずられる

顔見知りさすが団地の孤老たち

地球もう渋い顔から怒り顔

どんどんと顔が変わっていく地球

タイム誌の表紙を飾る晴れの顔

過労死のホツとしたよなデスマスク

B面の顔も時どき陽に晒す

良 一

勝 弘

玄 也

い わ ん

美 穂

富 美 子

好 文

み つ こ

靖 鬼

栄 子

早 人

義 昭

雀 舍

美 和 子

孝 一

日 枝 子

耕 治

完 司

尚 士

(志) 代

忠 子

幸 泉

み つ 子

蕉 子

茶 々

恭 昌

寿 美

へりくだり過ぎて卑しい顔を出す
不満だが鏡の顔を見飽きない

帯キリリ女が喪主の顔になる

サンクラス外せばもつと怖い顔

エラ張った顔に頑固と書いてある

元は取るそんな顔してバイキング

顔よりも心と顔の負け惜しみ

表情も生き生き夢のある顔だ

素つぴんが似合う雨上がりの羅漢

月光よ妻の寝顔の凜とあり

打たれ強い笑顔に妻は惚れ直す

性格も顔も似て来たいいい夫婦

おだやかな顔に男の気骨秘め

佳

就活にビリオドいい顔になった

哀歓が浮ぶピエロのとほけ顔

ご苦労をされた見えぬ顔の艶

そっけない顔でやさしい事を言う

一目見てすぐにおぼえてくれる顔

人

鬼凡みたいな顔でせまりはる

地

表情のおしゃれして行く初対面

天

いつ見ても退屈しない妻の顔

軸

どこにでもありそうだけど僕の顔

時 雄

弘 一

殺

千 歩

朱 夏

あ かね

順 啓

の ん 子

柳 弘

蘭 幸

一 風

集 一

(久) 千 代

宜 子

雅 枝

月 子

か り ん

恵 美

修

く に こ

参加者の感想

田中新一さん（番傘本社・大阪市）

小学校一年生の頃から番傘本社句会に父に連れられて行った記憶があります。

大会の運営の大変さ、裏方の御苦労がよくわかります。今後とも柳社を超えての交流を一層深めたいと思っています。

小川てるみさん（同人・高知市）

川柳の仲間に温かく迎えられ、ふるさとへ帰ったようなうれしい気持ちを感じました。来年の大会にも是非参加したく思います。

金子美千代さん（同人・大山市）

川柳茶ばしらを代表して参りました。竹本氏のお話楽しく聞かせていただきました。句会では肩肘張らず、素直に句を作ればよかったと反省し、いい勉強になりました。

福西茶子さん（同人・鳥取市）

この度思わぬ賞を頂きましたのも皆様のお蔭です。新家完司さんの車に同乗させて頂いて来ました。誌上で名前だけ知っている方にお会いできて嬉しく思いました。

江島谷勝弘さん（同人・大阪市）

約三百人の大会出席者に感激。私の知る限りでも北海道、青森、福岡、鳥取、島根から

来られ、また番傘からも多数来られていることに感激しました。

小澤幸泉さん（同人・高知市）

同人になって二十年になりますが初参加です。川柳塔のパワーと年齢を感じない若さに驚きました。まさに健康と長生きの秘訣は川柳にあると思います。

小林わかさん（同人・枚方市）



主幹を囲む新同人

大会へは二度目の出席です。今年は新同人としての参加です。昨年入賞された北海道の小沢淳さんが今年も受賞され、再会を果たしました。私を憶えていて下さり感激です。

小寺竜之介さん（番傘本社・堺市）

ずい分遠くから参加されており、座席が一杯で席の確保に苦労しました。耳から入ってくる川柳に大変勉強をさせていただきました。

三谷たん吉さん（誌友・シドニー）

海外生活は五十年、今も日本とは行ったり来たりの生活です。シドニーでの知り合い坂上のり子さんから川柳を知りました。以来川柳仲間との付き合いを楽しんでいます。静岡にいる姉も川柳塔誌の誌友となり、今では川柳を通じて姉の近況を知ることができ、姉弟の交流に役立っています。こんな大きな会は初めての参加、大いに楽しんでいます。

林 さだきさん（誌友・福岡市）

なごやかな大会で、吉本興業竹本氏のお話は大阪らしいパワーを感じました。

病気を抱えておりますがベッドの中でもできる川柳を楽しんでいます。福岡に川柳塔の支部ができればと夢を持ちつつ「川柳しませんか」を送って頂き、少しでも輪を広げよう

とっています。

稲村遊子さん（誌友・鳥取市）

出席者の多さにまず驚きました。とてもいい句を聞かせて頂きました。刺戟されて作句意欲をかきたてられました。鳥取へもおいで下さい。

斉尾くにこさん（誌友・鳥取県）

かねがね柳誌でお名前を知っている方に実際ににお目にかかることができました。大会スタッフの御苦労を思いました。来年六月の日川協鳥取大会へ是非お越し下さい。

遠山唯教さん（誌友・堺市）

初参加です。華やかな大会の雰囲気を楽しみました。実に壮観、貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。

懇親宴

懇親宴は予定より少し遅れたが、一八名の参加で開催された。

司会進行は、木本朱夏、坊農柳弘が担当、開会の挨拶は川上大輪副主幹、番傘磯野主幹からの御挨拶は大阪柳界の繁栄を力説された。福十蒸情さんの音頭で乾杯をした後、余興に入る。恒例の河内月子さんの「フラダンス」からカラオケに。今年のクライマックスは、

第三十四回全日本川柳大会二〇一〇年鳥取大会へのお誘い、壇上端から端までもある大幕に会場からは驚きの声が上がります。完司さんのいつもの「貝殻節」に「鐘の鳴る丘」まで大合唱の宣伝でした。鈴木公弘さんからは、大会開催の苦労話も聞く事が出来ました。目標五



受付の模様

〇〇人皆様の参加を待っていただけるとの事。

そして本社も来年一〇〇〇号大会。再会を約し宴に幕を下ろしました。

十三日は「翌日観光」。参加者は、吉本新喜劇を楽しんだとのことでした。（恵子記）

祝電拝受（敬称略） 番傘川柳本社

御芳志御礼（敬称略・順不同）

西出楓葉 黒田能子 白根ふみ 政岡日枝子

田中新一 鈴木公弘 山口光久 磯野いさむ

山本義子 坊農柳弘 籠島恵子 赤松ますみ

川上大輪 川端一步 鶴田遠野 古今堂蕉子

小島蘭幸 松原寿子 福士慕情 鴨谷瑠美子

土橋 螢 村上玄也 長浜美籠 小川てるみ

福西茶子 河井庸佑 中原諷人 中原みさ子

米澤俣子 山本蛙城 楊元世津 前川千津子

木本朱夏 寺井弘子 鍛原千里 奥田みつ子

小林わこ 小沢 淳 前たもつ 山本希久子

穴吹尚士 山崎重吉 都倉求芽 山岡富美子

岩切康子 清川玲子 板尾岳人 瀬戸まさよ

西口いわゑ 牧渕富喜子 川柳塔まつえ

川柳塔みちのく 京都塔の会 番傘川柳本社

川柳塔鹿野みか月 堺川柳会 いずも川柳会

川柳塔さやらばく 生駒番傘川柳会

川柳ねやがわ 川柳塔すみよし



記念句会の会場風景（主幹挨拶）



天笑主幹のご挨拶



福士慕情氏の乾杯

第15回川柳塔まつり
川柳塔創刊85周年記念大会
四階 金剛の間



番傘 磯野いさむ氏
のご挨拶



楓楽理事長の開会の辞



新旧役員のご挨拶



路郎賞受賞の福西茶子さん



新同人が一列に並んでご挨拶



番傘 森中恵美子氏
田中 新一氏のカラオケ

鳥取勢が全日本川柳2010年
鳥取大会の開催を強烈にアピール



河内月子副理事長のフラダンス

川柳大会参加者

総数 309名
(順不同・敬称略)

【北海道】 小沢 淳
【青森】 金子慕情
【愛知】 高島啓子
【京都】 三宅満子
【大阪】 浅野房子
【大 阪】 油谷克己
穴吹尚士 池上清治
池 森子 板尾岳人
井上桂作 今田和宏
岩井三窓 岩内外吉
岩崎玲子 岩田明子
上山堅坊 碓氷祥昭
榎本舞夢 大川桃花
大谷篤子 大橋鐘造
小栢幹子 荻野像山
荻野浩子 小谷滋彦
柿花和夫 笠嶋惠美
加島由一 片岡加代
河井庸佑 河内天笑
川端一歩 河内賢子
吉川寿美 吉川哲矢
栗田久子 黒岩靖博
河野彦次 小谷集一
近藤 正 坂 裕之
佐甲昭二 佐藤忠昭
沢田和子 澤田定子
庄野澄子 杉本義昭
関よしみ 田浦 實
竹村穂夫

坪井孝一 都倉求芽
山田葉子 松本としこ
安達忠央 赤松ますみ
井伊東吉 阿野寿美子
井丸昌紀 安藤寿美子
岩崎公誠 磯野いさむ
上嶋幸雀 伊藤アヤ子
江見見清 指宿千枝子
太田 昭 岩佐ダン吉
大堀正明 江島谷勝弘
奥 時雄 榎本日の出
大久保のん子 太田扶美代
籠島恵子 大橋あけみ
笠嶋恵美 笠井欣子
亀山 緑 鴨谷瑞美子
河内天笑 神夏磯典子
北村賢子 北川ヤギエ
熊代菜月 桑田ゆきの
桑原道夫 久保田元紀
小林わこ 古今堂蕉子
坂上淳司 小寺竜之介
佐佐正春 小林すみえ
志田千代 阪井美世子
鈴木栄子 佐々木満作
柴本ばつは

高杉千歩 田頭良子
竹森舎 谷達郁夫
田中幸代 谷口東風
谷久美子 谷中新一
津守柳伸 次井義泰
寺川弘一 鶴田遠野
内藤光枝 遠山唯教
中川隆光 中井アキ
長井善純 中野健吾
西川更紗 永田章司
早泉早人 西出楓楽
広岡栄二 林 澄子
藤井則彦 廣島巴子
藤村亜成 藤井正雄
前田紀雄 本田智彦
前田紀雄 前原正美
水野黒鬼 宮西弥生
村上玄也 村上直樹
森本弘風 森田 麗
矢倉五月 安田忠子
山本蛙城 山本三郎
山本柳吉 山本翠公
吉川弘泰 山本珠子
吉村一風 米澤椒子
宮本かりん 若松雅枝
山本加お里 森中恵美子
吉道航太郎 山本希久子
大森一甲 加川靖鬼
石原蔵子 白井一英
加川靖鬼 片山 忠
浅雛美智子

高田博泉 嶋澤喜八郎
田中新一 島田千鶴子
谷口義 神野千恵子
妻谷重風 鈴木まさお
寺井弘子 瀬戸まこと
富田美義 高田美代子
中岡 妙 津田シルク
中村 恵 津守なぎさ
西美和子 出口セツ子
畑中節子 徳山みつこ
日野 愿 富山ルイ子
福田悦子 中田たつお
藤井正雄 伏見雅明
藤村亜成 中村れんげ
本田智彦 前たもつ
前原正美 野田さかえ
好 成 好 羽田野洋介
三好聖水 原田すみ子
森 廣子 平嶋美智子
森村美化 藤島たかこ
山野寿之 俣野登志子
山本翠公 松尾美智代
山本三郎 松尾柳右子
吉岡 修 松本初太郎
米田水昇 松本初太郎
宮崎シマ子

金川宣子 亀岡哲子
黒田能子 桃谷和郎
梶元世津 長島敏子
田中章子 西内朋月
春城年代 福田好文
古川奮水 平山繁夫
村岡奮博 丸山孔一
山口光久 山田耕治
山口美穂 山田耕治
山口美穂 阿部茶々
【奈良】 安土理恵
岩本浩二 大内朝子
岡部幹和 鍛原千里
齋藤保子 笹倉良一
菱 誠 伴 洋子
牧野隆之 藤原一志
宮田宜子 松本根子
山田順啓 森下鈴子
渡辺富子 吉川 卓
和田次郎 米田恭昌
【和歌山】 川上太輪
小谷小雪 松尾和香
三宅保州 武本碧
【鳥取】 稲村遊子
新家完司 鈴木公弘
田中一眸 高根 勇
平尾菜美 西三茶子
【島根】 福西茶子
三島淑丘 森 茂美
【岡山】 小林妻子
【広島】 小島蘭幸
【高知】 小澤幸泉
【福岡】 林さだき
【海外】 三谷たん吉

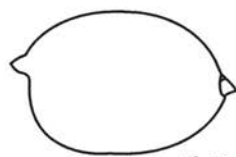
北野哲男 上垣キヨミ
小山紀乃 緒方美津子
長浜美籠 奥田みつ子
萩原典呼 久保田千代
藤本 直 七反田順子
堀 正和 西口いわゑ
矢沢和女 前川千津子
山田耕治 山田耕治
山田耕治 山田耕治
吉井菜々子 居谷真理子
阿部茶々 大村美千子
大内朝子 加門萌子
鍛原千里 柏井かんじ
笹倉良一 杉野まつ子
伴 洋子 飛永ふりこ
坊農柳弘 久田年須美
藤原一志 山下怜依子
三浦芳子 吉富ひろし
柳瀬孝子 吉富ひろし
米田恭昌 吉富ひろし

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 七一〇句)



κ. κ

「灯」 牛尾 緑良選

沈黙を盾に小さな灯を護る
灯台は海の悲劇を語らない
気合い入れ生きているけど灯は揺れる
平和の火灯し続けて未来まで
鎮魂の一灯送るルミナリエ
あの世への道に灯はありますか
万灯会神のご慈悲に導かれ
灯を消して十五夜の月招き入れ
易の灯へ迷う子羊寄ってくる
使わない部屋にも点けている灯
さよならの尾灯見送る人生譜
9・11遺族ならずも灯を灯す
コンビニの灯が若者を誘い出す
ランタンのしじまへ落ちる冬の星
したたかに灯へつのる好奇心

松山市	高橋	宏臣
鳥取県	飯野	葛子
大阪市	岩崎	公誠
和歌山市	喜田	准一
京都市	三宅	満子
神戸市	山口	美穂
大和郡山市	坊農	柳弘
米子市	吉田	陽子
大和高田市	鍛原	千里
川西市	西内	朋月
熊本市	永田	俊子
大阪府	野田	栄呼
岸和田市	井伊	東吉
西宮市	吉井菜々子	
大阪市	津守	柳伸

「灯」 高田 美代子選

薰風師と灯台背なにした写真
灯に透けて見える程度の軽い嘘
峠道やれやれ丘の灯が見える
きのうより少し大きいあかりつけ
夜業の灯消えて淋しい町工場
灯が入る頃にエンジン掛かりだす
昼行灯と言われようともマイペース
馴れ初めは灯台守の映画から
灯がともる頃には帰る秘密基地
ひと言が女の意地に火を灯す
一人居の友とあかりを灯し合う
帰ろうか川面に映る灯が揺れる
街の灯がきらめく星の邪魔をする
提灯に釣り鐘だった玉の輿
妥協点見付けて灯り守り抜く

大阪府	初山	隆盛
明石市	桃谷	和郎
鳥取市	平尾	菜美
吹田市	大谷	篤子
岸和田市	井伊	東吉
大阪市	坂	裕之
和歌山市	武本	碧
堺市	源田	八千代
黒石市	佐藤	古拙
枚方市	小林	わこ
鳥取市	西川	和子
和歌山市	古久保	和子
大阪市	近藤	正
大阪市	板東	倫子
藤井寺市	若松	雅枝

誕生日数えないでねケーキの灯
望郷のうたに心の灯を添える
なりたないあなた海の灯台に
自分の灯貫き通す尊厳死
灯を消して今日をゆつくり休ませる
絵ろうそくを点して母と対話する
ともしびという名の喫茶あつた頃
百態のドラマにゆれる宿場の灯
飲食街灯が点き道を迷わせる
貧しげな家見当たらぬ街灯り
門灯を睨み言い訳考える
灯を点す母の身丈がまた縮む
灯明の前で約束させる母
しあわせが敷きつめられている夜景
サザエさん我家と同じ昭和の灯
祭りの灯届かぬとこで逢うている
灯を分けて妻には妻の愁いあり
常夜灯ひとり娘が帰らない
退院に何はさておきお灯明
燭守るこの身が透ける心地して
定年後昼行灯になり下がる
みあかしが揺れる咳する亡母が居る
家中の灯りをつけて病んでいる

堺市	加島	由一	堺市	奥	時雄	鳥取市	有沢	せつ子	広島府中市	馬場	利子	寝屋川市	富山	ルイ子	芦屋市	黒田	能子	生駒市	飛永	ふりこ	京都市	都倉	求芽	田辺市	大峠	可動									
八尾市	田邊	浩三	西宮市	牧瀬	富喜子	大阪府	大川	桃花	佐渡市	高野	不二	大阪府	岩崎	玲子	奈良県	渡辺	富子	橿原市	安土	理恵	唐津市	井上	勝規	米子市	政岡	未延子	弘前市	今	愁女	東京都	岸野	あやめ	高知市	小川	てるみ

またひとつ灯が消えて行く古本屋
心斎橋とうとう消えたそごうの灯
絵ろうそく花びらしずくして落ちる
燭守るこの身が透ける心地して
マンションにクロスワードの灯がともる
フレンチを食べるかすかな灯の下で
灯台の明かりが邪魔な密漁者
赤い灯も青い灯もない裏通り
ため息をときどき洩らす常夜灯
ありがとう心にはととく灯り
亡父の背の灯台にある道しるべ
秋深し灯下の虫はマンガ好き
灯を消してギター弾いてる恋してる
祭りの灯届かぬとこで逢うている
青テントここにも生きる灯が点り
一軒家ここにも人の住む灯
見送りの母へ尾灯が遠ざかる
交番の赤い灯街を抱いて寝る
走馬灯父母の姿に行き当たる
肝心のヘッドライトが消えました
手の平で囲むと勇み立つ灯
よく当てる八卦見らしいす灯り
易の灯へ迷う小羊寄ってくる

東京都	清原	悦子	大阪府	井丸	昌紀	大阪府	柴本	ばつは	米子市	政岡	未延子	尼崎市	長浜	美龍	大阪市	古今	堂蕉子	愛知県	早川	廻行	八王子市	上原	酒坊	松山市	高橋	宏臣	大阪府	神野	千恵子	香芝市	大内	朝子	大阪市	津村	志華子	茨木市	藤井	正雄	尼崎市	春城	年代	大阪市	小泉	ひさ乃	大洲市	中居	善信	岐阜市	平野	あずま	鳥取市	岸本	宏章	大阪市	升成	好	羽曳野市	三好	専平	八王子市	播本	充子	河内長野市	坂上	淳司	大和高田市	鍛原	千里
-----	----	----	-----	----	----	-----	----	-----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	-----	-----	----	----	------	----	----	-----	----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	-----	-----	----	----	-----	----	---	------	----	----	------	----	----	-------	----	----	-------	----	----

誘蛾灯母の灯りに似て哀し

一日の灯大事に米をとぐ

待つ人のいないひとりの灯をとます

一日の感謝をこめて灯消す

街の灯がとっても好きな淋しがり

ママさんが頑張っている昭和の灯

酒という憎い灯りがぼつと点く

ささやかなくらし零れる灯がぬくい

千の灯に千の苦業がある日暮れ

老いふたりいつも灯りをつけておく

ボランテアの掌から善意の灯が灯る

つけるのも消すのも私ひとりの灯

フレンチを食べるかすかな灯の下で

ともしびになろうかつての母のよに

お灯りが裁いてくれる内輪もめ

生かされて点すいのちの常夜灯

常夜灯まだ踏み外す人の道

母ひとり子ひとり紡ぐ灯といのち

灯をともし田圃こっこして見せる

秀句

哀しい灯もあろうに夜景美しい

一灯の元へ集まる生者死者

マンシヨンの窓は浮世の走馬灯

大阪市 小谷 集一

出雲市 小白金房子

高石市 浅野 房子

尼崎市 長浜 美籠

河内長野市 坂上 淳司

尼崎市 軸丸 勝巳

愛知県 早川 遡行

和歌山市 松原 寿子

大阪市 升成 好

大阪市 神夏磯典子

弘前市 斉藤 昀

豊中市 松尾美智代

大阪市 古今堂蘊子

寝屋川市 龍島 恵子

和歌山市 福本 英子

弘前市 高橋 岳水

美作市 小林 妻子

八尾市 宮西 弥生

大阪市 榎本日の出

和歌山市 福井 菜摘

和歌山市 古久保和子

岸和田市 雪本 珠子

ご本尊うすばんやりのいい灯り

みあかしが揺れる咳する亡母が居る

灯を消して今日をゆつくり巻き戻す

哀しい灯もあろうに夜景美しい

子に残す灯だ真ん中においてある

老いふたりいつも灯りをつけておく

常夜灯里に一つの診療所

千の灯を心にとりともす夫の忌

親讀り赤提灯に弱い質

門灯が疲れた靴を待っている

灯がつくと道頓堀も美しい

灯の消えたシャッター街に整骨医

ローソクは立てずに祝う誕生日

灯をとます母が寂しくないように

茶の間の灯笑い袋が二人分

肩張っているなと思う独りの灯

使わぬ部屋にも付けている灯

外灯が点いて菊師が幕を張る

住所録ひらくとボツと灯が点る

秀句

外灯をつけて帰らぬ猫を待つ

窓の灯が点いた明日は訪ねよう

その家の形になって灯がともる

三田市 北野 哲男

東京都 岸野あやめ

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 福井 菜摘

青森県 松山 芳生

大阪市 神夏磯典子

泉佐野市 稲葉 洋

八尾市 生嶋ますみ

羽曳野市 森下 一知

尼崎市 藤井 宏造

藤井寺市 鴨谷瑠美子

尼崎市 軸丸 勝巳

大阪市 太田としお

紀の川市 宇野 幹子

竹原市 石原 淑子

大山市 金子美千代

川西市 西内 朋月

鳥取市 武田 帆雀

河内長野市 山岡富美子

シドニー 坂上のり子

篠山市 沢山 啓子

米子市 吉田 陽子

誹風柳多留——一篇研究 51

山田 昭夫・増田 忠彦
山口 由昭・小栗 清 吾
伊 吹 和 男
清 博 美

386 昼時分おきて花火のはなしなり

山田 両国の川開きの花火見物などで夜更かししたので、翌朝は起きられない。そこで「昼時分起きて花火の話なり」。昼時分まで寝ていられるとは、結構な身分ではある。

両国の川開きについては、『東都歳事記』五月二十八日の項に、「両国橋の夕涼今日より始まり、八月廿八日に終わる。并に茶屋看せ物夜店の始にして、今夜より花火をともし逐夜貴賤群集す」とある。

人の虹両国へ吹く暑い事
両国へ式軒とばす狐ツ火
清 賛。 六八六
三七〇

387 金ひやうふ生酔に手をあてるなり

山田 当てるは「②」うまく対応するようにする「(日国)」。

へべれけの酔客に金屏風が傷など付けられないように、気を配る。天下祭での場面であろうが、それに限らなくてもよい。

生酔に心遣ひの金屏風 二〇三〇
山口 賛。生酔と金屏風とくると天下祭の気もします。

けんくわといつたら金ひやう風しまへ

小栗 賛。手を当てるは、気をつかう。
寛元誠一

天下祭の「借り物」の金屏風だから、傷つけられないか心配。

清 賛。礎稿「借り物の金屏風」を書き落と

した。

388 姫とよめはなすをきけば雛の事

山田 嫁同士が話しているのを聞くと、雛のことだった。場面は必ずしも明らかでないが、近くに嫁入りした嫁の持参した雛について、近所の嫁同士が品評しているあたりでないか。当時の女性性は、雛には異常な関心があった。

姫のひなかさらぬ内に人だかり 一五二

増田 賛。三月三日が近づくと、若い嫁どうしの話題といえは雛飾りのこと、でもよい。

小栗 賛。増田説のようなことと思う。

清 賛。

389 つき出しの一日二日はれまふち

山田 突き出しは、「初めて女郎として客を取る者」(「江」)。何しろ年若い女が、見ず知らずの男に身を任せるのだから、大抵三日は泣きの涙。それで「腫れ目縁」となる。中には初めから嬉々として楽しんでいゝなんていう天性の女郎もいるかも知れないが、それは例外であらう。

突出しハいけにへの氣てかしこまり

宝九松

山口 賛。よく寝ていないこともあらう。
清 賛。

390 ふもとから来る三みせんはさくらどう

山田 上野か飛鳥山か、兎に角お山でのお花見。麓で借りて来た三味線は、安物の桜胸だといふのだらう。桜胸について『日本国語大辞典』には「桜の木でこしらえた三味線などの胴」とあって、本句を引用している。しかし三味線の胴は花梨が大半で、桑(ヤマグワ)も使われることがあるが、桜は寡聞にして聞いたことがない。或いは桜の花見を引き出す縁語として花梨を桜に見立たか。どうも桜胸の実態が分からない。ご教示のほどを。

三味せんの駒もいさんた桜胸

別中3

小栗 賛。鼓の胴は桜で作るらしいから、三味線も桜胸があると作句して不自然ではないと考えたのだと思う。桜の山へ来る三味線だから桜胸というだけで、実態を解明しなくてもよいのではないか。礎稿「上野か飛鳥山か」とされるが、上野(寛永寺)は鳴り物御法度だったらしい。

清 賛。礎、上野は勇み足ならん。

391 斎日ハちつさなやうに事をかき

山田 斎日は仏に参詣する日のことだが、この句の場合は、正月および七月の十六日、つまり藪入りを指す。藪入りで店の小僧たちが居ないので、一寸した用事にも「事を欠き」という状態になった。

斎日にたちあがつたハ羽織なり

九12

清 賛。

392 通り丁を丁行ばかこいか

山田 通り町は「江戸の日本橋を中心にした南北に通じる大通り」(『日国』)。繁華の通りだから、一丁も行けば「駕籠い駕籠」となる。京ならは東大路や通り町

ケイ二下19

清 賛。

393 葉うら迄見ても女房ハくれぬ也

山田 女房たちの花見。男どものように、あまり呑んだりしないから、葉の裏までも見尽くしても、まだまだ日が暮れないというのだらう。しかし花見時の桜は、まだ葉は出ていないから、単に趣向か。あるいは紅葉狩りか。

のまぬやつ弁当くふと花にあき 三二22
小栗 賛。もう一つピンとこない句。

清 同右。

394 かち原ハ二タこめにハあなをいひ

山田 梶原は梶原景時。源頼朝が挙兵して石橋山の合戦に敗れ、逃げる途中臥木の洞に隠れているところを、梶原景時に見逃されて九死に一生を得、為に景時は後に頼朝に大いに重用されることになる。彼は何かというと「臥木の洞」のことを持ち出して、頼朝に「二言目には穴を云い」、頼朝を脅かすという解釈も成り立つが、彼の場合、その讒言で義経が失脚したことは有名で、判官並肩も手伝つてどうしても穴二讒言のイメージが強い。よって礎稿は、景時は二言目には「人の穴」を云って窮地に追い込む、とする。異論もあるう。

かち原ハ何んぞといふと穴をいふ

明四信2

明二梅4

山口 両方に掛けられている。

小栗 賛。意味は「讒言」と思う。礎説のいわれることに連想が及ぶのが技巧。

清 賛。

丸い

川本 畔選



じゃれている猫もボールで夢を追う
観覧車に乗って地球を確かめに
神様の前では丸くなる心
おとほけも身につけ丸く老いてゆく
やさしい目丸い帽子に見え隠れ
悪いこと出来そうにない丸い鼻
耳も目も時折閉じて丸く住む
難聴も丸いことばは聞き分ける
母の背の丸さに詫びる事ばかり
孫が来てはんわか丸くなる空気が
目を丸くして爺が褒めてる通知表
おはようの声にひと日が丸くなる
絶妙なジョークに会議丸くなる
新任の黒板まるい漫画文字
タコ焼きが四角だったらどうしよう
妥協して少し歪んだ丸になる
地球儀を回して孫の腑におちず
嘘もつきまあるく丸く生きて来た
丸い背の母は偉大なエネルギー
丸いものみな幸せに見えてくる
徳積んで少し丸めのシルエット
婿殿は丸過ぎ少し頼りない

幸子 英子 菜摘 寿美 日の子 洋子 (川) とし子 美千代 賢子 輝夫 (蘭) 黒兎 政勝 高明 一壺 碧 瑠杏 房枝 キヨミ 一 幹子 洋 (編)

円満な判を捺してと離縁状
型にはめ丸い西瓜を角にする
数珠玉の丸みに艶を出している
心配はかけたくない丸い嘘
使いいい煙の丸盆一割引き
丸い背が昔話をしてくれる
きつい事丸い言葉で言ってくる
十五夜と気づき一駅歩く仲
丸く生き夜はぐっすり眠ってる
苦勞とは丸い心になるくすり
丸い顔誰にも好かれ忙し
丸い背の母が法事を仕切ってる
思い出を詰めた滴は丸く落ち
丸い目の輝きにある好奇心
町内を抜けたらまるい背を伸ばす
佳
哲学も刻んで老母の丸い背な
真ん丸いおちよは口から出た懺悔
檸檬撫でしじみ思ふ師の名句
丸い輪の中で喘いでいる個性
あの人が丸くなったら心配だ
人
歯が欠けて反論少し丸くなる
地
人柄が丸いと話長くなる
天
逆上り空から二重丸もらう
軸
裸婦像にいつしか丸く脱がされる

千休 雅明 螢 智加恵 裕花 哲男 堅坊 志華子 満子 美津子 (花) 順子 時雄 菜摘 友子 ミツ子 泰女 修 富子 美義 吉村一風

詩人

都倉 求芽選



すすきの穂詩人にチャンスくれている
いい言葉さらさらさせている詩人
詩人とは名ばかり酒を愛してる
縄のれんすきな詩人ですつと下駄
飴細工屋台に生きている詩人
ひとりと酒詩人にさせるのはノート
淋しいと何故か詩人になるのです
どの人もみな詩人なり通り抜け
一杯の大吟醸でもう詩人
なかなかの詩人と彼を見直した
コスモスの海で戯れ詩を綴る
雨続き詩人になっているつもり
本棚の詩人それぞれ彩がある
量産のハチローさんになんて駄作
メタボには嫌われていて詩人かな
詩人からパンを求める顔になる
いたずらな風が詩人になつて
玉子やき詩人になれぬフライパン
くじをかう列に並んでいる詩人
感性が一期一会にある詩人
日常を脱ぎ捨て旅は詩人なり

ふみ 堅坊 圭一郎 ぱつは 彩男 哲一 准一 正和 満子 (清) 悦子 志華子 千休 ミツ子 (川) 洋子 倫子 一 知子 アキ 古拙 (西) 裕花 悦子

詩人めく保養先から来た便り
特売の卵を買いに行く詩人
葦屋根に詩人気分で泊ってる

残り湯もときに詩人にしてくれる
人間をぶんぶんさせている詩人

ハチローの詩は楽しくて元氣出る
サンマでも詩人が焼けば歌になる

詩人との対話が弾み氣を貰う
現実主義の妻は詩人にはなれぬ

詩人でも秋はおながが空きますか
家計簿をつける暮しの詩を綴る

詩人には遠く青虫潰してる
詩人とは言われたくない丸い芯

酸っぱくて噛めないものもある詩人
盛り返しは詩人のママに任せとく

追憶に苦勞話をする詩人
詩のようなのを書いてる人嫌い

日記だけ詩人で生きたる現実派
あの人は詩人いつでも笑ってる

サブリメントに詩人は夢を食べている
赤貧の詩人は月を噛むばかり

八月の詩人は熱い熱い雲
人知れず詩人は散ったいくさ場で

軸

(矢)五月

富子

日出子

葉々子

朝子

朝子

明子

公誠

いさお

碧

扶美代

勝視

日の出

弥生

(沢)啓子

典子

庸佑

充子

(若)玲子

霜石

弘一

活恵

吉岡修

記憶

小谷 集一選



足踏みのミシンが知っている昭和
反省の中の記憶が生きて来る
叱られた記憶の中に棲む恩師

づらかった昔忘れた認知症
ばらばらの記憶を辿る二日酔い
笹笛に里を出た日がよみがえる

都合上忘れたことにする記憶
読めなくても覚えてる幼児
歴代の天皇名が言える祖母

まなうらにまだほつこりと父母の顔
原点に戻って記憶確かめる
途中下車うすれた記憶たしかめに

絵のような記憶に母の蛇の目がさ
かみ合わぬ記憶はいじめられたから
中の島クルーズ遠い記憶の貸ポート

玉砂利にしみついている負の記憶
出かかって喉につかえている記憶
捨てた石がどれだったのか記憶ない

旧友と再会あだ名思いだす
故郷の変貌記憶追いつかず
三つ指の妻は記憶にありまへん

物覚え良すぎ煙たい姉がいる

(備)輝夫

康子

一壺

あやめ

小丘

小雪

(編)洋

像山

ばつは

朝子

玄也

扶美代

菜摘

四郎

千歩

黒兎

正雄

公誠

弘一

(奥)五月

美千代

自分史の記憶に少し嘘をまぜ
過疎化する村の記憶の母校跡
詰め込んだ記憶が氣化を繰り返す

ほろ苦い記憶の一つ芋のつる
三次会以後は定かでない記憶
今もって脛に浮ぶ震度七

話し込む内に記憶が甦る
童謡を指が勝手に弾いている
苦勞した記憶は脳裏離れない

少しずつ記憶が消えてゆく恐怖
落書きの記憶がふいに浮く机
踏ん切りをつける記憶に蓋をして

札束を前に記憶が揺れている
記憶にはあっても言えぬことがある
脳トレに笑われている記憶力

佳

再会に記憶と違う人が来る
記憶から消すのも生きたる知恵のうち
子の歳を軸に記憶が甦る

記録より記憶 長嶋ファンです
記憶から消したい人とよく出会う
握手してみよう記憶が甦る

愛された記憶やさしい子に育て
初恋の記憶は無菌室の中
耐え抜いた日が輝いている記憶

軸

善信

政勝

(志)千代

庸佑

光久

准一

明子

東吉

いさお

岳水

(花)順子

充子

かずお

富子

キヨミ

房枝

巴子

霜石

賢子

人

芳生

地

みつこ

天

初恋の記憶は無菌室の中

細田 裕花

初歩教室

題 — 探す

鈴木公弘

出題の意図として、音読すれば同じになる「探す」と「捜す」の違いを考え、探査する句を作っていただいたいという思いがありました。しかし皆様からの作品を拝見すると、かなりの句が搜索する意味での「捜す」になっていました。そこで紙面の都合上、この問題は注意を喚起するだけにとどめ、今回は文法上の誤りや、抽象的な句をチェックすることにしました。

【川柳化した背景を見せてほしかった作品】

原 ヨン様の中に探したものがあはる 孝代
添 ヨン様に探した男らしさは 孝代
原 船場でも探す鯖汁ふるまうつて タカ子
添 船場から鯖汁を飲む意味探す タカ子
原 六感で探すモノクロ妻の勘 道子
添 もの探す第六感を掻き立てて 道子
第六感を働かす主（ぬし）は妻ですから、さらに「妻の勘」と念押しすれば、くどくなります。また、男女どちらにも有効な、いわ

ゆる普遍性のある句にするとすれば、添削句のように詠むべきかと思ひます。

【もつと推こうしてほしかった作品】

原 アラ探す目が突き刺さり鎧着る いさお
添 あら探する目を防ぐ鎧着る いさお
原 枝豆がボンとはじけてかくれんぼ 節子
添 枝豆がボンとはじけるかくれんぼ 節子
原 買物しレジの前にて汗をかき 開子
添 買物したままレジに来て汗をかき 開子
「買物し」の「し」を厳格に言えば、禁じ手の「し止め」と同じ効果を持っています。すなわち、上中下のどの部分であれ、サ行変格活用助詞「する」を「し」として使った場合、「しません」（未然形）の「し」なのか「します」（連用形）の「し」なのか、判別できません。ですから主張を肯定的に表す時は、たとえ上六になったとしても「して」と展開するべきでしょう。ただし添削句は、これとはまた異なる作りになっています。

原 実家にて居ない父母探してる 弥生
添 里に来て居ない父母さがしてる 弥生
原 落し物探せどなくて交番に 久子
添 交番へお世話をかける落とし物 久子
原 母がいなくて探してる甘ったれ 綾乃
添 母がいなくて探してる甘ったれ 綾乃
原 本能が乳房探して命がけ 律子
添 本能が乳房探して命がけ 律子

添 母捜す本能あつて乳さがす

原 蝶とんぼ図鑑で探す都会っ子 りこ

添 蝶とんぼ図鑑を採す都会っ子 秋星

原 探し物半日無駄にしてしまひ 正二

添 探しもの半日無駄にしてしまふ 正二

原 幸福の種探して汗をかき ミヨノ

添 幸福の種を採して汗をかき ミヨノ

原 老夫婦探した宿名鶴と亀 文代

真に鶴とか亀とか言う名の旅館があつたの 文代

原 自己の存在探せば私消えていく ちづる

添 自己の存在探せば私消えていく ちづる

原 遊園地冷汗かいたお呼出し 孝明

添 遊園地冷や汗かいたお呼び出し 孝明

原 遊園地冷や汗かいたお呼び出し 孝明

添 遊園地冷や汗かいたお呼び出し 孝明

原 運動会我が子探して一日中 冷子

添 運動会我が子さがして駆け回る 冷子

原 運動会我が子さがして駆け回る 志郎

添 運動会我が子さがして駆け回る 志郎

原 検査正常走って探す縄のれん 孔一

添 検査正常走って探す縄のれん 孔一

原 ドラフトで玉になれよと石探す 振作

添 ドラフトで玉になれると石探す 振作

原 徘徊の親父探しになれた道 振作

添 徘徊の親父探しになれた道 振作

添 いつも来る道徘徊の父さがす

【いま一步の作品】

原 老後なり楽しみ探す百までも

添 楽しみを探す百歳まで生きて

原 逃げ道を探せば迷路待っていた

添 逃げ道を探し当てれば迷路なり

原 目鏡をいつも探してあわてゝる

添 目鏡をいつも探してあわてゝる

原 光る道探す手立てを探してゐる

添 栄光につながる手立てを探してゐる

原 置き忘れ探し求めた恋ひとつ

添 置いてきた恋を探して草千里

原 絶景のポイント探す紅葉狩り

添 絶景のポイント探す紅葉狩り

原 父さんは必ず探す母さんを

添 父さんも母の姿を探している

下六を認めていい場合があると思つていま

すが、今は問題提起だけにしておきます。

原 年重ね色あせてきた探求心

添 探求の心がセピア色になる

原 探し物恋ではなくて愛だった

添 探しもの恋でなかつた愛だった

原 探すのが日課のわたし自己嫌悪

添 探すのが日課になった自己嫌悪

原 誉めるところ探し孫との夏休み

添 誉めるところ探し孫との夏休み

原 陽の当たる場所を探して揺れている 唯 教

清

添 陽の当たる場所を探して揺れている
原 娘(二)の彼のあら探しする父悲し 勇
添 子の彼のあら探しする父悲し
彼に對しての娘です。こういう場合には、
娘は「子」と表記しても問題ありません。
【題が「捜す」なら入選する可能性もあつた準入選の作品】

一人でいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

私の居場所探しの旅に出る
今日もまた自分探しの旅に出る
沙羅の花一輪探す夏木立
元気よく百まで生きる趣味探す
相槌で探る相手の腹の中
秋晴れに日溜まり探す老いふたり
探し物夢の中まで追いかける
はぐれ蝶愛を探してゆく野づら
面影を抱いて故郷の百合探す

【佳作】

気付いてもどこかと探すかくれんぼ
探しの手の鳴るほうへ出ておいで
無理やりに病氣を探す検査好き
いつもあるものが探すと出て来ない
略図など父の辞書では探せない
一冊の本を探して日が暮れる

【今月の推せん句】

黙禱のわずか音がかけぐる 黒崎美紗子
人間をバネに動いている時計
缶蹴りの缶をすーっと探してる 沢山 啓子
原形はあるか少女のアルミ缶
禁煙のライター探す曇り
嘘ついて恋しさ煽る曼珠沙華

【私の句】

スキャンダル探す動物園にいて
峠から綺麗な人の手を探す
(登載漏れの方は役員が添削して返送します)

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

拉致問題探す話をしてますか
杖となり記憶を探すボランテア
これからの私を探す好奇心
今日の覇者明日は汚点を探される
メイドインジャパン探しているのです
認知症自分を探す霧の中

一人でもいい嫁を探すに四苦八苦
我が家でも埋蔵金を探してゐる
あの世へのトクトク切符探し中
DNAほんとの父はどこにいる
お迷いのお祖父ちゃまはとアナウンス
へそくりの隠し場所探す雨の午後
へそくりを探す名人ウチにいる
ケイタイでケイタイ探す家の中
片付けをした後探すことしきり
探している財布の数が増えてくる
余生とは眼鏡のありか探す日々
就活の次は婚活いそがしい
内緒です探して欲しい過去のひと

【入選】

健 柳
忍 人
俊 子
なつみ
さだき
宏 造
遊 子
幹 子
武 彦

克 博
菜 々 子
義 雄
こずえ
菜 摘
嘉 彦

黒崎美紗子

沢山 啓子

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

坂部かずみ

秀句鑑賞

同人吟 藤井則彦

— 10月号から

お静かに いま蜩の羽化さなか

岩崎 みさ江

長く地中に潜んでいた蜩は夏秋のひとつき羽化して短いながらも歓喜の生を全うします。庭で羽化を静かに見たことがあります。文字通り蛻脱の厳肅な儀式に浸る思いでした。

太陽を掴みそこねた豆の蔓

小川 てるみ

「依頼をいただいたときは心臓が一瞬止まる思いでしたが、之も自己啓発への温かい叱咤激励と受け止め、お引き受け致しました。かねて自然の風物や動植物に心情を託される句に惹かれ憧れていましたので、僭越ながらそこに焦点をおいた鑑賞をさせていただきます。作者の想いとは違う見方になっているかも知れませんが何卒お許しをお願いします。」

太陽が欠けて宇宙のロマンを追う

清原悦子

七月二十二日、私も雲間に見え隠れする日食をワクワクしながら眺めていました。久しぶりの聖なる営みでしたから、太陽と月は牽牛織女よろしく目くばせをしたのかも・・

おみなえし咲いて亡母恋う古希の朝

増井 ヨシ枝

おみなえしは秋の七草の一つとして萬葉集にも詠まれている山野草です。きつと背もすらりとされていて、凜とした佇まいの優しいお母様だったのだらうと拝察いたします。

ひたすらに一本道が曲れない

黒田能子

振り返ることも右顧左眄することもなく未来に向かって歩んで行かれる一途な心根が伝わってきます。東山魁夷の「道」も真つ直ぐに伸び、やがては緩やかに曲つてゆきますがそこには桃源郷が待っているのでしょうか。

どこまでもスローを通すかたつむり

岩崎 公誠

柳田国男によると、かたつむりの異称は三百余りあるそうです。それだけ全国各地で可愛がられてきたわけですが、スピードと効率化が叫ばれる今の時代にこのような句を詠まれると、かたつむりもさぞ本望でしょう。

不揃いのキュウリが持っている個性

横山 捷也

いろいろな形をしたキュウリがずらり並んでいると異様に思いながらも血湧き肉躍る気分になります。個性派の集団は運営が難しいのですが、名伯楽の手にかかると一プラス一が三にも四にもなるパワーを秘めています。

陽だまりのカボチャのようにゴロ寝する

藤本 直

ごろ寝は寝床も数かず着替えもせずに横になって寝ることですが、その醍醐味を陽だまりのカボチャに譬えられたのは言い得て妙です。ひねもすまじろんでいる風ですものね。疲れたらおいでなさいと森がある

升成 好

森には不思議なオーラが漂っています。私もちつてストレスが溜まつたり疲れを感じたときはよく京都・札の森を一人で訪れました。無心になつて彷徨っているうちに明日への英気が養われた記憶が甦つてまいります。

ひたすらに背かず媚ひず亀の意地

村上直樹

亀は重く平べったくて動作はのろく、抵抗や媚態を示すこともなく過こしています。また一ヶ月絶食しても平気で生きており、それでいて長生きです。身につまされる句です。

ひまわりの涙を誰か見ましたか

安土理恵

太陽の花「ひまわり」にも思わず涙を流す瞬間があるのではと仄めかしておられます。そういえば、楽天監督の野村克也からかつて「ひまわり」と崇められた長嶋茂雄が一度だけ引退の時に涙を見たのを思い出します。

日没へ夕日あしたの化粧する

津川紫晃

今日の活動を終えて静かに没してゆく太陽ですが、ここは慎ましやかな寝化粧なのでしようか、風景画家・曽宮一念が幾重にも雲をデフォルメして描いた夕映えなのでしょう。

一生を愛し合ってる二枚貝

神夏磯典子

ハマグリやホタテガイに代表される二枚貝の美しい色模様は絶え間なく繰り返されるへの成長によつて出来上がってゆきます。終生変わらずに合わさった二枚の愛の結晶なのでしょう。実に羨ましい限りです。

荒波にもまれて丸い石となる

中村れんげ

私達の周りにも寸善尺魔の世の荒波にもまれて角が取れていく人がおられます。それも一つの成長過程とは思いますが、折角の荒削りな個性が薄れてゆくのは一寸寂しいですね。

戦争を知らぬ脆きよモスキート

武本碧

不気味な羽音で人の神経を逆撫でし、狙いをつけて刺す気随なモスキート(蚊)。たしかに戦いを知りませんから、血を吸い過ぎては狼狽え、下手をすると叩かれて無惨な姿を呈します。時々そんな人がおられますね。

夾竹桃律儀に褪せていくんだね

森茜

夾竹桃は夏の暑い日をもとめせずに元氣よく枝を伸ばして白や桃色の花を咲かせます。ただ実をつけることが少ないために気が引けながら褪せていくように見えたのでしょうか。

どん底のまだ底がある蜘蛛の糸

加藤茶人

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」に思いを馳せてみました。ある男が独り蜘蛛の糸に縋つて地獄から抜け出そうとしたところ、他の人達が追ってきたために糸が切れ、また深い奈落の底へ落ちてゆきます。無慈悲な心への罰です。

病室の窓に止まった赤とんぼ

喜田准一

とんぼの顔つきをよく見ると随分面妖ではあります。まことに愛される昆虫です。殊に赤とんぼは何とも人懐っこいのです。退院も間近なのでしょう、心安らぐひとときです。

除草剤効かぬ十葉したたかに

井伊東吉

名前の響きで損をしている十葉(じくだみ)ですが、木の下闇などに咲く可憐な花です。根が深過ぎるために除草剤ではなかなか枯れませんし、抜いてもまた生えてきます。時にはこんな生き方にあやかってみたいものです。

入道雲いつだって手が届かない

籠島恵子

入道雲は本当にいつ見ても堂々としていて時に人を寄せ付けない威厳すら感じさせます。橋高薫風師の「夏雲の死ねば越ゆべき峰ならん」を思い出しました。

ばら満開第九の歡喜うたってる

天正千梢

ベートーヴェンの交響曲第九番「合唱付き」は毎年十二月に聴かに行つていますが、合唱団はまさしく咲き匂う薔薇の趣です。その一方で「苦悩を通じて歓びへ」という巨匠の人生訓にはいつも考えさせられることです。

— 水 煙 抄 —

秀句鑑賞

— 10月号から —

市丸晴翠

生一本昭和の森が出られない

宇野幹子

戦時下、終戦、戦後の復興と、目まぐるしい昭和を懸命に生き、今や後期高齢者。どこまでも昭和の森が立ちほだかります。

布おむつ捨てた育児が狂いだす

稲村遊子

便利な品が出て来たことが子供との触れ合いを減らし、気付けば子供は異次元の世界。

老いたとて心に花の種をまく

木村忠義

老いてなお、心に花を育て続けられ、いつまでも瑞瑞しい句が生まれることでしょう。

特製のうぬぼれ鏡隠し持つ

松尾恵子

うぬぼれ鏡から勇気を貰ってこそ、この混沌の世を生きて行けるのだと思います。隠し持つが効いています。

怠ければすぐ雑草の生える脳

三浦強一

逃げ水をもう追いかけることしない

清水英旺

二句共に納得の行くご指摘です。

セールの息子を思い断れず

中岡香代

親切です。息子と同じ年格好の青年が、一生懸命勧める言葉に、ついほだされます。

原爆忌知っているのか蟻の列

源田啓生

眩しい太陽の下、一瞬にして焦土と化した大地。黙々と歩く蟻の列にも問うてみたい。

意地解けばこんこんと湧く澄んだ水

斉尾くにこ

意地という栓を外せば、清く澄んだ水が湧き出し、周囲の人にも潤いが広がります。

叱られしこともなつかし墓洗う

中島春江

今となつては仏と対話を重ねながら、しみじみとお墓を洗うことしかできないのです。

生きていること働くこと同じこと

岩崎實

働くには傍楽（はたらく）という意味があると聞いています。生きる限りそんな気持ちで過ごせたらいいな……としみじみ思います。

汗流す氣になり過疎に移り住む

岡村孝明

後継者不足で荒廃の進む農耕地。過疎に汗を流すこと、は勇気が要ります。私共も定年退職後、郷里の山畑を耕し、土に癒され、自家菜園の恵みを受け、八十路を歩いています。

「機械の悪い日はない辻地蔵

小林妻子

変わらぬ穏やかな笑顔で、通る人を見守って下さる地蔵様の温顔が目に見えそうです。

死ぬるまで頼むぞと膝撫せてやり

田邊浩三

いずれは行く彼岸。膝を撫でたり、鍛えたり大切にして自分の足で行きたいという念い。

遠い日の母はやっぱり避雷針

野口忠

幼い日を回顧して……。避雷針が光ります。事件です！

子孫ヨタヨタ初歩き

加藤スズコ

まさに事件です。待ち望んで見守る家族。ひ孫のおむつでふくらんだお尻が浮かびます。

くちは皆一人言ですOFFにする

渡辺芳子

愚痴はOFFに限りません。不満を心に溜めては、健康に良くありません。間違ってもONで発散させないことです。

出雲総合芸術文化祭

川柳大会ご案内

日時 11月14日(土) 午前11時～

場所 パルメイトホール 4F

兼題 (各題2句)

「旬(しゅん)」 「鳩」

「端」 「添える」

「尽くす」 「ころころ」

席題 「 」竹治ちかし謝選(出雲)

出句締め切り 午後1時

会費 1,500円(昼食費含む)

賞 市長賞 教育長賞 他

欠席投句の方は、参加料1,000円(現金ま

たは小為替)を添え10月31日までに

〒693-0006 出雲市白枝町423

伊藤玲子宛 お送り下さい。

第31回出雲市川柳大会、お誘い合わせ
ご参加下さいますようご案内いたします。

主催 出雲市・出雲市教育委員会

出雲総合芸術文化祭実行委員会

出雲市川柳連盟

第51回 豊中市民 川柳大会

とき 11月23日(祝) 正午開場

ところ 豊中市立中央公民館 1Fホール

(阪急宝塚線曾根駅東100米)

挨拶 豊中川柳会 会長 田中 蛭柳

落語 桂 三若

宿題 「各題2句」締切 午後1時

「義理」中田たつお選(堺 番 傘)

「歯車」たむらあきこ選(川柳瓦版)

「はいはい」上野多恵子選(番傘みどり)

「試す」住田英比古選(くらわんか番傘)

「魂」久保田半蔵門選(川柳天守閣)

「ポスト」大堀 正明選(豊中川柳会)

「おやおや」穴吹 尚士選(川柳塔社)

会費 1,500円

(発表誌、記念品、軽食 呈)

賞 豊中市長賞他 各題に呈賞

連絡先 〒560-0033

豊中市蛭池中町2-3-1-411 田中 蛭柳

電話FAX 06・6853・0470

主催 豊中川柳会・豊中市立中央公民館

お 願 い

川柳塔社では2010年10月
に『川柳雑誌』『川柳塔』通巻
1000号記念大会開催に当り
『麻生路郎読本』(仮題)の出版
を予定しています。

麻生路郎に関する書簡・写真
或いはどんな些細な情報でも、
お持ちの方は川柳塔事務所まで
ご連絡下さいますようお願い致
します。

川 柳 塔 社

(06-6779-3490)

むぎぬた

毎月24日締切・35句以内厳守

編集部

八尾市民川柳会大阪 富西 弥生報

政権が変り世の中不透明

夕暮れて夫婦劇場二幕目

ほどほどの暮らしそれなり幸がある

捨て石が活きて形勢逆転す

亀石と秋を分け合うワンカップ

夕焼けを吸ってあしたのエネルギー

心の壁外すと変わる風の向き

ほどほどに主張と譲歩嫁しゅうと

ぱったりと息子と出合う墓参り

刈り終えて父はミレーの絵の中に

ありがとうほどほどが良い車間距離

従順だった妻が覚えた変化球

晩鐘の余韻へ落ちていく夕日

矢面の風夕暮れきれいすぎ

川柳塔なら

坊農

柳弘報

難題と知らず気軽に引き受ける

彰治

満月を浮かべ露天の湯に溶ける
浴衣着た夫が少し男前

慣いの湯の香しみこむ宿浴衣

甲子園熱気と活気満ち溢れ

年金の所帯満ち潮知らぬまま

あんたまた気軽に受けて来たりして

逃げる子の浴衣手で着せ口で着せ

甘い水滴ちて闇夜にホタル舞う

会席で隣の鯛が気にかかり

ひっぱって任期満了した総選挙

酒止める自信に満ちた声が出ぬ

お気軽な総理もやっと腹くる

母乳満ちベビーベッドの王子さま

わけありの席へ手土産提げて行く

銀河へも浴衣でふらり参ります

少しすねて川面の花火見る浴衣

宿浴衣お国訛りを聞いている

満ち足りて静かに聞くコンバクト

日溜りは僕と子猫の指定席

指定席孫にとられる夏休み

助手席の夢路もう早や故郷の山

浴衣掛け原爆ドーム見る平和

卒寿とや卒に似合う浴衣だな

西行のおもい満ちてる奥吉野

人間を脱いで気楽なひなたぼこ

浩二 萌子 次郎 満作 隆子 千梢 郁夫 章久 博一 勝弘 弘風 修 富子 和夫 富子 のりこ 洋子 秋泉 集一 一風 恭昌 隆盛 翠公 保子 辰雄 朝子

末席の意見が痛いところを突く
秘境の湯にんげんを脱ぐ宿浴衣

宴会のはてりを冷ます宿浴衣

新盆のあなた見て下さい浴衣

運命と思っています宿浴衣

万灯会神のご慈悲が満ちてくる

登りつめた席に押しピン置いてあり

鍵のない田舎が好きで風と棲む

尼崎尾浜川柳会(兵庫) 田原 一兆報

山頭火の一人ばつちは真似できぬ

またしても寝言で何か喋ったか

忘れ物ふえて慌てる八十路地

死神も縁を探している寿命

うまいまずい見ためで決めるいやなやつ

映画館そつと鼻かむ花粉症

口出してまずい話に引き込まれ

縁のない証拠に電話つながらぬ

長幼の順序も乱れ世の流れ

お袋の味はまずいを死語にする

浄土にもデイトスポットあるかしら

先着に一人違いではずされる

身の上を順序話せば朝になる

連絡網るす電に言う頼りなさ

豊かさを深追いし過ぎ迷う道

順番に死んでいくとは限らない

完次 道子 美千子 真理子 理恵 柳弘 寿美 國治 一兆 政江 亀与子 よしひさ あかり 野薫 江美 菜々子 美代子 勝巳 里江 五月 奮水 耕治 孝一 靖鬼

招き猫煤けているが旨い蕎麦

嘘がバレ不味い空気が取り囲む

好きなこととしていて金に縁がない

焼きサンマすだち絞って五ツ星

ありがたい水も時には牙をむく

水をやる花は素直に返事する

アスファルトに影を焼きつけてる残暑

牛井の大盛り青春まつさかり

ああ故郷空気はうまし水うまし

わかあゆ川柳会(島根) 松本はるみ報

幸せを真下に見ている白い雲

かがやいて生きてきました花時計

子と歩くこんな平和があつたのか

年金がにこにこ孫をまつている

出発の膳に梅干添える母

この先を歩む尺度は計れない

歩いて歩いてもまだ悔いの上

ポケットに古里の愛ねむつてる

日の丸の千人針に残る染み

川柳茶ばしら(愛知) 板山まみ子報

お説教みんなお舟を漕いでいる

当選の議員そろそろ長い舌

贈取賄記憶ないのが合言葉

白い歯がニツと笑った新学期

イサミ

美義

朋月

枯康

キヨミ

雪菜

かずお

哲男

美籠

角はいや気持なこます丸い人

記憶力アップ脳トレ三ヶ月

記憶にはないがわたしのやつたこと

長過ぎて二つに切れば短か過ぎ

南大阪川柳会 吉川 寿美報

前髪をアップにできぬ訳がある

名優のアップの顔に皺がある

アップダウンあつて浮き世は面白い

一言がアップとなつた師の教え

どないどす儲かりまつかばちぼちや

大阪弁昔アチャコで今三枝

上品な船場言葉もおますがな

純行列車わが余生には異常なし

純行ではあるが狂わぬ脳回路

純行の旅に仮面を置いて来る

純行がもどかしかった逃避行

狭くても自分の部屋はお城です

狭くても幸せでした観覧車

サブリメントとれが効いたか元氣出る

微笑みを投げて窮地をすり抜ける

クリップで小さな幸を貼る暦

いい夫婦せまい我が家を丸く住む

婚活に付いて行きたい母心

お似合いと悪魔ささやく試着室

八月が過ぎて戦争忘れられ

百合江

美千代

由美子

まみ子

昌紀

太郎

尚士

憲太郎

柳弘

忠昭

章久

たもつ

祥昭

清

克己

勝弘

修

和雄

栄子

郁夫

更紗

タカ子

弘風

滋郎

佳句地十選 (10月号から)

小川 注 湖

よるこびはひとりになって満ちてくる

老人がひとり降りたら空のバス

目標へ向つてのびる朝顔だ

呑みこんだ言葉はすべて日記帖

おまじないのように常備のセイロ丸

太陽と言われたこともありました

中心にアンパンマンがいる家庭

精一杯生きた証の深い皺

医者でなく財布が止める酒煙草

勝ち戦だけを放送した戦時

蚊帳の中雑魚寝楽しい里の宿

変化球直球も受け夫婦の和

時おりに風を入れてる玉手箱

釣り竿に未練残した西雲

悠然とプールサイドの赤トンボ

労りの言葉を聞いて負けを知る

噂話拡大コピーしておこう

のんびりと時刻表繰るひとり旅

まけてんかパリで値切つて五割引き

あきまへんぼちぼちでんな儲ける

マスクだけ確保しあとは引き籠る

海外旅行狭い考え捨ててくる

みつこ

次根

静江

一粋

みどり

章子

重風

光久

洋一

蕉子

弘康

あや子

志華子

なきさ

柳伸

集一

楓楽

弘子

直樹

東吉

直子

ルイ子

左遷とはどこにも書いてない辞令
しんどのんとちやいますかちやいませ
マニフェストずらり並んだ肩に唾
寿美

川柳塔おつばこ吟社香川 川崎ひかり報

追憶の過去引戻す敗戦忌
追越せる位置を保って着けている
追伸の一字一字にある重み
夢を追う海の男の血が騒ぐ
捨て切れぬ未だ持つ夢を追っている
一番手に着けて追い越し賭けてみる
追い越した処で待ってたネズミ取り
酔いさめて大風呂敷は何処へやら
はつ恵

川柳花の輪大阪

妻谷 重風報

なつかしい赤いポストに旅便り
離れてもポスト知ってる淡い恋
人の心と愛を届けるポストマン
子が育つ妻の味方が増えただけ
妻だけは生涯味方と信じてる
四面楚歌仲間にはみんなトラファン
長男で威張っているがあかんだれ
ボク長男姉三人に鍛えられ
やすの

長 柳 会大阪

村上 直樹報

胎動に父性目覚めた遠い過去
直樹

学び舎は廢墟の廊下走る風
塩加減一つで決まる母の味
敵に塩贈りたいけど余裕なく
色白は七難隠す強い武器

竹槍で日本が勝つと信じてた

悲しみは心の底で塩漬けに

塩加減丁度いいよと甘い声

答案を出しても鼓動治まらず

嫁姑少し気くばり仲が良い

少しぐらいいんじやないと魔の手のび

父母の愛温もり籠る塩加減

浮気した傷口に塩ぬたくられ

塩加減母に習った家の味

だんじりの鼓動に稲穂頭垂れ

はつ恋の鼓動はにかむおさげ髪

汗タラリビールで洗うのど仏

九つ差も身がまう姉妹高齢者
前向きに生きて草まで笑ってる
猫好きの話題介護の手が和む
ニコニコと線香花火に家族の輪

二児育ち父似母似で日丸く

親に似て顔も仕事も譲り受け

につこりのお地蔵さんに癒される

優勝へ選抜球児の一握り

夏の夜を彩る花火も寄附次第

過労死の遺影やっぱり笑ろている

墓参りにつこり笑う盆の風

三和子

淳司

けい子

正子

芳野

美緒子
美紗子
啓子
多美子

開子

照代

かほる

幸子

美智子

哲男

可住

伊達 郁夫報

美代子

美智子

容子

静枝

のんびりと過せる日まで先が長い
マニフェスト狂った国を直せるか
特価にはおっとり型もすばしい
曲者のウイルス菌が大あばれ

大地震起きるときまる国に住む

戦時下を思い出させる不況風

今んとこ自分で切れる足の爪

おつとりがやつと掴んだ残り福

毒少し飲んで狂気を確める

イケメンは女が決める時代です

人生を狂わせた九・一一忌

ひら仮面で生きてもいいじゃないですか

憎まれる正直すぎる姫鏡

増まれる正直すぎる姫鏡

純子

可住報

美緒子
美紗子
啓子
多美子

開子

照代

かほる

幸子

美智子

哲男

可住

伊達 郁夫報

美代子

美智子

容子

静枝

パソコンがとうとう狂い動かない

あの口調イライラ誘う起爆剤

れんこんの穴から覗く明日の幸

イケメンが歩く蟻の行列だ

一寸した曲者でし猫の知恵

賛成も反対もせず座を仕切る

無党派の風でセンセイ狂い咲き

無印と言うブランドの自己主張

総選挙済んで失業率上がる

イケメンに見とれ葬儀の不謹慎

おっとりの息子にキワイ嫁が来る

おっとりと喋りチクチク刺してくる

左団扇のあてが狂って職探し

恋は曲者心晴れたり曇ったり

上げ底を履いて余生の見得を切る

狂人のふりして守ることがある

曲者の足跡小さく美しい

イケメンに魂抜かれノラとなる

おっとりとした姑さんで安らげる

紅ひととせば私が生き返る

世渡りの切り札ひとつ隠し持つ

九条が狂わぬように手をつなぐ

川柳若葉の会大版

宮崎シマ子報

真夜中に近づいてくる救急車

松並木戻り静かな救急車

勝弘

弘風

章久

満作

萬的

正

直樹

集一

一步

順三

倫子

和夫

修

柳弘

昭

たもつ

典子

ルイ子

志華子

賢子

野鶴

朝子

能子

喜美子

救急車止まると窓を開けて見る

ブランドのタオルは老いの手に余る

仁王様に椅子すすめたい夏盛り

実際はこの目で見た電気椅子

充電をしなくて椅子に座ります

動かせぬ社長の座る重い椅子

愚痴こぼす赤提灯の椅子が待ち

東大阪市川柳同好会

宮崎シマ子報

胸元を扇ぐ団扇が妬ましい

ひまわりで飾ると元氣湧いてくる

飾らない若さが胸を張っている

自分史を飾る言葉が何も無い

心配をかけない嘘をひと飾り

飾っても所詮蛙の子は蛙

飾るほど年齢はかくせるもので無し

裸と跣太陽の子はまっ黒だ

太陽の光りを闇にした被爆

お日さまを見たい豪雨の被害地区

残照へ河内音頭の試し打ち

茹で上げた幼児を包むバスタオル

ネクタイをタオルに変えて鉄を持つ

変らないことの幸せタオル干す

合縁機縁びつたりだったガラス靴

妻よ許せボクと酒とのくされ縁

良縁を求めて旅に出る釣書

慶子

加津子

弘直

香住

烈

シマ子

ますみ

穩夫

克己

和代

秀夫

八郎

敏子

美子

シマ子

朝子

かね子

湖風

章久

風子

美弥子

賢子

一志

太一

これも縁居ついた野良に癒やされる

これも縁シェークスピアを舞う歌舞伎

決別の薄いえにしに髪洗う

縁の下から力を貸してくれる蟻

富柳 会大版

古田 千華報

少しならいいと自分を言い負かす

咲くよりも咲かせる土になる彼女

そよ風になって許しを乞うている

止り木で明日のスタミナ貰うてくる

ちっけけな不満を天日干しにする

浅知恵が大事な場面で仇になり

白百合の無欲に少し桶をつく

出鱈目と見えた軌跡にある誠

人人流転生きる仮面を用意する

雨の日は大事なことを決めかねて

キッチン発いろんな匂い送ります

強運を受けとめようと身構える

忍び寄る痴呆に備え飲むサブリ

スタミナを付けて準備が整った

安心と言う非常食おいている

少年はカーブでちよつと立ち止まり

損得へ少し迷っている返事

用意した言葉が消える妥協癖

スタミナを溜めてあしたも和やかに

その時は風の姿で違いに行く

三重子

あや子

雅文

和子

仲雄

武人

奏子

鐘造

和子

七朗

アキ

未知

紅紫朗

田鶴子

安希子

壽峰

高鷺

糺

登子

恵

佳子

澄子

加央里

扶美代

傘立てに破れた恋が二つ三つ

百均の梅の辛さを信じ合つ

消しゴムが僅かな時間消しに来る

もう少し飲めば仮面がずれていく

温もり人に集まる路地の裏

わけへだてなく人間を括るボス

織姫となつて貴方と星祭り

風さやかいのちの音符確かめる

スタミナが切れたと言つてまたも飲み

目に青葉鯉の替りさんま焼く

不用意な一言それからの阿修羅

毒舌も明日はスタミナ切れるころ

川柳塔鹿野みか月(鳥取) 福西 茶子報

沿道の応援浴びているタスキ

母の愛入れた夜食の塩結び

露払い八十路の母は秋の田に

三世代風も済んだ三毛が寄る

信じてと決めて二人の半世紀

マニフェスト不可能なと言つけれど

通信簿良はあつたが可は知らぬ

マンネリに空気に入れかえフルムーン

子供らとラジオ体操秋の朝

後少し生きる可能を大切に

スポーツやゴール感動もう一度

六十路とやフルマラソンの折り返し

彦次

晴美

よしみ

寿之

千恵

欣之

深雪

鬼焼

信子

美恵子

森子

千華

茶子報

クニ子

八重

孔美子

睦子

和子

弘子

久枝

彩子

螢

和枝

節子

茶子

千振の可憐な花が咲いている

日本が勝つと五輪の種目消え

可決した強味があるが一步引く

爺さんと玉露を呑むか秋の朝

秋の朝亡夫のこのみで想われる

夜食にはのど越しるりうどん好き

スポーツの楽しい秋の地球儀だ

マニフェスト夜食ひろげて練り直し

スポーツも不景気廃部せがまれる

鯛が一人占めする寺の朝

甲子園涙なみだのスポーツだ

徹夜する夫へおにぎり置いておく

競うだけ競つて魅せるアスリート

誘われて気の向くままのストレッツチ

秋の朝風がやる気を誘い込む

老いて今楽しんでるホールワン

傷心のこころ癒した秋の風

ステコで外へ出れない秋の朝

空蟬の仰向けを見た秋の朝

売り出しの準備に夜食だしてくる

秋の朝蒲団あなたにそつと掛け

岬川柳会大匠

八十田洞庵報

計報欄互いの歳を比較する

ストレスを大がくわえて食べちゃった

青い空見たくて磨く窓ガラス

重忠

照彦

実満

はるお

房子

和子

汲香

永子

小生

美代子

稔

みさ子

諷人

富久江

みどり

かおる

満

蟹郎

忠良

かつみ

宣子

令子

範子

俣子

不景気を支える主婦の底から

セールスへわたし留守番といつても言う

句作りも希望の一つ隠居さま

あれこれと無言指図風のいろ

ずぶ濡れで応援つづく熱い息

病院費重なる老いを娘には説き

楽園に禁断の実がひとつある

こはれ種立派に育つてもうけた気

風評に悩むキャンセル観光地

下心あつてふらふら戎橋

奥底の本心を見てみたいだけ

薫風の中でカメラが汗をかき

ワイシャツのルージュしはらく晒し首

川柳塔きやらほく(鳥取) 大塚 恵子報

どこまでも信じた人の眼をみつめ

六月のウツ「トラ」の上昇気配なし

裏のひまわり今年も咲いて下さいね

水面より睡蓮のぞき大丈夫

快気とは言わず退院祝いとす

青葉風朝から蝶に鳥になる

探し物今日も難なく日が暮れる

有難い親にもらったほがらかさ

何時の日かどんでん返しくらうかも

笑顔ほど良葉はなし朝のお茶

遠い日の浜辺の砂と貝拾い

富美子

蛙城

禮三

みやこ

年子

洋子

和美

覚治郎

和香

利武

とみ

茂平

洞庵

恵子報

章江

麗

なみ

恵子

寿々子

瑞枝

春枝

未延子

亜弥

晶子

初枝

梅雨時の幸せ受ける草木花

予定をずらし最後のまわり道をする

生ぬるい風に浸って今日も暮れ

「がんばろうな」朝一番に会う鏡

逝った子の歳数えつつ卒寿坂

子につづく平和な道へ花の種

植山から戻って欲しい友一人

川柳クラブわたの花大阪 西川 義明報

病魔退散させる呪文は笑い声

電柱の陰で待つてる赤信号

百歳と赤子の笑顔仏とも

紅筆に気合を入れてクラス会

風向きのままに曲っている枯木

職終えて愛の谷間を埋め合う

墓守り長兄の嫁米寿前

百歳の山や谷越え深き皺

つかの間の夢が埋めれる無縁墓地

副作用無縁を祈り試薬する

哀愁の背中漂よう御堂筋

親不孝詫びてお墓へ缶ビール

面倒なこと後に回して雪だるま

一度だけ家事の仕事を怠けたい

たこ焼でホームドラマになる我が家

心地よく昼寝むさぼる蟬時雨

しなやかに手振りも弾む風の盆

晴子

ふみ

蘭

富美子

紫泉

やえ

千代

義明報

晴美

浩三

孝子

和子

ますみ

はじむ

たえ子

美代子

耀一

知佐子

民

君江

博子

愛子

宏至

義明

いつみ

弁当に彩り添える紅生麦

マニフェスト嘘をついたら舌を抜く

夕焼けが朝を迎えに山に入る

残り火が燃え尽きるまで万歩計

余生のんびり飯面のいらぬ日向ぼこ

はたる川柳同好会大阪 水野 黒兎報

親ばかり焦る不惑の独り者

超高層赤血球がチョット増え

うちとけて口も空気も軽くなる

なまじつか妻を褒めたが運のつき

一人相撲と分った日から焦らない

エコポイント買い替え時期を焦らせる

なまじつか小銭をためて早死し

八十年空氣の底ではろろと

おでかけの服に似合わぬ風邪マスク

思いっきり土竜に空氣あげましよう

犬任せなまじの散歩やせもせず

空氣読め見ざる言わざる聞きません

適齡期とつくに過ぎて臍かじり

空氣読める事も一つの処世術

大鏡ノーと言ってる試着室

空氣読め声聞く政治待ったなし

川柳塔みちのく青森・前月分小寺 花峯報

器量ある男きつちり締め括り

宏

正春

妙子

俊子

一風

黒兎

信男

久子

幹治

桂子

雪子

いさむ

勇治

春代

契子

長一

禮子

柳童

美智代

祥風

勝

茶菓箭の底から小出しする器量

一円も騙しはできぬバーコード

付着した百合の花粉に手をあげる

本当のわたしをそつと飾りたい

ライバルの急所を狙う花粉症

赤ちゃんのホッペソットさわってみたくなる

膝頭優しく騙しながら行く

十六夜の月とひとつそり悩みごと

真夏日が続き稲穂が安堵する

杉花粉ふるふる道祖神にふる

秀才がそつと抜け出す縄電車

才覚を隠し続けた石地藏

横綱の器量問われる心技体

以心伝心一人はそつと輪を抜ける

投げられた小石をそつと温める

ひとつそりとあじさい寺にぬれて行く

高知川柳社

小川てるみ報

ストレスを眠りに誘う膝枕

代用の芋に日が差す美容食

共稼ぎママの代わりの哺乳瓶

影武者も代役もないこの命

代替のバスに黒子は求めない

代走はきかぬわたしの行く道た

身代わりになろう黙秘を覚悟する

点滴へ代わってやれぬ母の腕

吞舟

洋子

ヒサ子

芳生

一吞

隼人

ふさゑ

愁女

井蛙

黙人

岳水

花峯

慕情

一花

荔

五楽庵

哲史

正躬

てるみ

健

暖

幸子

京子

三千世

妻病んで妻の代わりが見当らぬ
大事にしようあなたの代わり居ないから
不信感チエンジに決める人がない
終列車月の明かりと帰る家

泣きに行く実家へ誘う月明かり
不景気の出口の明かりまだ見えぬ
足元を照らす明かりが道しるべ
年重ね人の情けが身に沁みる
そつけない言葉の裏に情があり

川柳塔唐津佐賀

仁部 四郎報

戻るまで貸した小銭は忘れない
三時間の花嫁役は孫友子
鼻薬効くか効かぬか待つ返事
ペランダで布団叩くと苦情くる
ピンポンを聞かないことにする裸
亡き兄の枝折り挟んだままの本
校旗社旗国旗が測る忠誠度

川柳らくだの会(鳥取)

岸本 宏章報

ひまわりの笑顔に負けぬよう生きる
朝ごはん味わう余裕ない我が子
村一番のマイクはあさん古希らしい
ひとつずつ欲を削って成仏す
築百年味わいながら住んでいる
選挙戦マイク素通り遠い耳

良雄 千鳥 美々 典雄 三郎 三郎 千恵子 徳子 房恵

孝子 寿賀子 仁子 大鯰 紀子 清帆

レシビにはない妻だけの隠し味
身をけずり戦中過し今生きる
ビョンヤンのテレビマイクで芝居する
さくさくと夏を味わうかき水

岸和田川柳会(大阪)

土橋 房枝報

ふるさとに青い記憶を置いたまま
ふるさとの土の香りが友を呼ぶ
故郷でイービス艦を見て泳ぐ
現役で合格孝の始めなり

死ぬまでは現役のまま趣味川柳
最後まで現役でいる膝なでる

五時までは死んだふりして夜元氣
嘘ひとつ消化不良になったまま
小指立てまだ現役と見栄を張る
現役を終える貴方へ感謝状

肩書の取れた名刺が深呼吸
古びてる脳でこなれぬ四書五経
下積みを耐えてこなれぬ芸の道
月例会こなれた一句光ってる

今日もとうふ明日もとうふの夏の膳
放浪記芸がこなれて二〇〇〇回
別れてもさばさばしてるのは女
さばさばと今日から僕は自由人
笠智衆気取りさばさば生きている
悩み事なんか一切ございませぬ

邦昭 富貴子 宏章 せつ子

蛙城 はるえ 洋 愿

笑司 弘子 泰弘 柳昌 清

若芽 力子 呂万 隆昭 珠子 浅子 幸子 玄也 柳風 義泰 俊昭

拗ねる子に母さばさばとはぐらかす
さばさばと涼しい顔で物忘れ
熟練の名人がいる町工場
世間慣れしすぎアラフォー縁遠く
全力を尽くして覇者の手を握る
こなれてる幹事は敵を作らない

ジャム避ける頭の中は血糖値
白髪之父ジャムセツションに若返る
女われ淋しい時はジャムを煮る
梅ジャムの酸っぱさ背筋のびてくる

川柳ふうもん吟社(鳥取) 夏目 一稔報

さいのうな信長天下驚づかみ
組み立ててバラして技術盗みとる
氣持ちよく酔わせて鬼の首を取る
平和ボケ頭上の危機に気がつかぬ
荷をバラす母の匂いがごろげ出る
優しさに遭うと残り火燃え盛る
さいのうに金庫番などさせられぬ
派遣社員社長の首を取れという
首を取れあと私が考える
合掌で心の鎧をとりのぞく
童巻が町をバラして通り抜け
血税にたかる毒蛾の首を取れ
町内会さいのうな人重宝だ
首を取れ皺の首でもあるまいに

淳風 寿海 香枝 房枝 仁緑 東吉 檜代 和美 すみえ 美花

洋々 美雪 無限 金祥 一瑤 孝男 美恵子 振作 圭一郎 菊香 節子 秀四 春名 清信

首を取れまだまだ芽吹く葱坊主
平和ボケ歳を取るのも忘れそう
年金を使わず死んだ平和ボケ
長雨で農作物がバラされる
選挙戦天下分け目で首を取れ
鍋囲む解決策が煮えたぎる
米ないが核の金ならあるのか
日本の仇だ核の首を取れ
現金が届きバラすの止めました
首にするなら社長の浮気バラしたる
九条つて何の九条なんですか
平和ボケ毒にも薬にも成らず
綿棒の先で男の首を取れ
骨抜きにされた日本の平和ボケ
平和ボケオレオレ詐欺にかかる姑
容疑者になれば過去までバラされる
蟹バラし先ず父母の皿に盛り
バラすならどうぞと女足を組み
あの男さいのうめいて落ちつかぬ
力抜くコツを来た道から学ぶ

サークル檸檬大阪・前月分西出

楓葉報

悲しみはいつでも不意にやってくる
若いわね歳のわりには隠れてる
そのまま出来る事だけすれば良い

悦子 一京 行男 千代 信子 妻子 稔 昌鼓 善夫 蟹郎 大鯰 清帆 諏訪男 秋月 茂登子 義徳 南花 穀子 菖子 益子 一粹

活断層も木の根も抱いている大地
やわらかい什種で手話の輪がまるい
眠らない都会を解す国なまり
とりあえずで後回しすることが増え
やわらかい頭で軸がぶれぬ人
やわらかい男に胡椒振りかける
肩書が取れて影までやわらかい
マシユマロのほっぺ食べてしまいたい
やわらかいベッドは眠れない育ち
女の約束やわらかい花結び
やわらかい日差しが障子開けにくる
しゃべってる割に肝腎抜けている
一呼吸おいた拍手をして貰い

松露川柳会(鳥取)

小西 雄々報

名園の池に似合いの錦鯉
葦茂り泳いだ川の過去想う
世の中をうまく泳いで出世した
気が付けば平均寿命泳ぎ着く
すいすいと泳げたわたし夢の中
泳がねば雑魚の群れにも遅れそう
泳ぐより美肌を見せに海開き
先人の日の丸胸に泳ぎさる
北島の王座を守るブレッツシャー
泳ぐより歩くブルへまず通う
気持よく泳ぐ金魚に励まされ

楓楽 美籠 遠野 義子 光久 昌紀 たもつ みつ子 美智代 希久子 千代 蕉子 加お里 澄江 裕 敦子 興 廣子 智恵子 鈴枝 公美枝 和代 弘子 静江

大盃へ鯨泳がせ一つ気飲み
泳いでる元氣を見せて鯉はねる

ロース川柳会(兵庫)

山崎 君子報

茄子の花その生き下手は親づり
説明を聞いて納得ピカソの画
絵になつてはくつろぐ場所がない
不器用はいいなんにもせずすむ
幸せの絵にあなただけ足りません
青春を尋ねば一途な絵巻物
ソフトラーム紙めてるよときの平和論

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

過疎の村小さな家に広く住む
夏休み社会の広さ知るチャンス
広い広い釣り舟にひとり
七人の敵から学ぶ広い視野
顔の広い妻と離れて歩きます
人間が好きで罪は広く開け
母元氣テレビの総理叱りつけ
潮風に元氣をもらい深呼吸
歳重ねだんだん元氣になるお口
一病と仲良く元氣に紅をひく
免許証返して足が元氣呼ぶ
段々畑に元氣の種が落ちている
元氣が一番嬉しいエールあるハガキ

正光 雄々 藍 みつ子 いわゑ 哲子 貴代子 年代 義子 淑子 汎美 蘭幸 静風 節夫 万年 栄恵 慶子 敬子 半徳 笑子 幸子

職ひいてから主夫業のむつかしき
職一つしかと守つて来た誇り
職場では掃除もすると言う孫で
七十七歳定年のない職に生き
若ければ宇宙で職を探します
大臣が無職となるか正念場
職人の育つ風吹く町工場
梅雨末期金時豆のコトコト煮える
シャワー全開今日の悩みを流し切る
夢に見る地獄の鬼の怒り顔
ゴシゴシと洗う汚れもストレスも
だんご虫バケツいっぱい宝物

和歌山三幸川柳会 武本

野心抱く一足歩行をした日から
短足で休まず歩く僕らの道
昭和史を歩いた母の深い皺
青春讃歌マーチ高らか甲子園
歩かなくなった私を笑う膝
どの党も五十歩百歩驕に疵
青臭い尻尾が落ちてから無口
青いほおずき少女の微熱まだ続く
冤罪を晴らした青いあおい空
妥協して青いトマトが熟れてゆく
群青の海の深さよ父の墓
かき氷に薩摩切子がよく似合う

房子 一路 現代 比呂子 節生 白狐 輝恵 厚子 栄香 太虚 千枝 史子 碧報 倫子 愿 登美代 俣子 大輪 碧 朱夏 理恵 町子 幹子 山海 和子

青い実が一気に爆ぜる好奇心
反骨を出して内はまだ青い
青い目のお児が近所のマスコット
伸びしろを信じ天衝く青い竹
青空へジャンプしている瘦せ蛙
梅雨明けてさらさらはじく半夏生
青の時期わたしも判るピカソの絵
元氣出せ鼓舞してくれる空の青
立ち直り信じせつせと愛紡ぐ
茶柱が立つて愛大病癒え
立ち寄った店で見つけた一昔
流行も負わずびしつと洗い立て
樹齢百年立つてばかりで辛からう
言葉尻へ波風が立つ膝頭
好奇心余暇の埋め立てしています
逆立ちの勇氣が欲しい老いの夢
読点も句点も打てぬ立ち話
島中を棒立ちにする皆既食
正念場四の五の言わず受けて立つ
傾いたままのいのちと立っている
ほとばしる想いにも似て夕立ちぬ
岐路に立つ眉はすくくと上げるべし
立ち入りは禁止と顔に書いてある
川柳塔打吹(鳥取) 野口 節子報

菜摘 准一 みね 義雄 絹子 桂香 孝子 東吉 イセ 房代 かずみ 幸 美花 柳昌 昇 重治 彦一 章子 当代 すみえ 保州 スミ 八重子 久芽代

若者に裏だと注意恥をかき
まっ白な花も咲いてる裏街道
横槍で突いても耐える面の皮
隠岐の島牛の角突き客力む
追突の瞬間醒める夢だった
初詣で孫に手を添え鐘を突く
目で合図わからぬ人は肘で突く
地下茎で仲良くつなぐ毒だみ草
マニフェスト突き合わせれば乙や丙
宗教の城は連鎖で入れない
生あくび連鎖反応会議の席
お隣が試食するので手を伸ばす
連鎖する不幸断ち切る黄財布
収入が子の成績に連鎖する
勝ち見えてぞくぞく兵が寝返った
土砂災害連鎖の雨が降り続く
悠久の連鎖の果てに僕がいる
みんなが買えばやはり買っちゃうバスツアー
しあわせの連鎖の隅で生きのびる
三世代共につないだ縄電車
年金よ連鎖倒産ないように
おいお前ちきりんな関係だ
あら不思議に曾孫が爺に似る
巧妙な言いぐさ信じ詐欺にあい
妙技見て真似してみたが目が回る
巧妙なロボット人に命令す

道子 芳光 いさお たかこ 清 勝憲 紀美恵 京子 滋 小生 勝誉 くにこ 孝恵 みち子 義人 和子 玲坊 龍枝 照彦 美代子 重忠 美英子 禎元 貴恵 富恵 和枝

日食は神の匠の技の妙
妙策に辿り着くまで酒を呑む
妙薬に迷つて一生棒に振る
たとえばの話が妙に後をひく
流れ星妙に気になる盆の月
打吹山妙なる母のおっぱいよ
口紅が妙に女を若くする
妙齡な淑女が秘めた火の匂い

はびきの市民川柳会大阪 徳山みつこ報

暗黒の青春でした戦中派
立役は黒子の苦勞忘れな
苦むした墓に仲良く眠る父母
眠る時そばにあなたがいてほしい
アンコールしたい夢には母がいる
哲学は眠ったままのマニフェスト
添い寝して先に自分が夢こち
悩み晴れ今日は良い夢みられそう
水やりは交代でする百日紅
さようならミナミに帰るツバメ達
冷汗かくスリルが欲しい熱帯夜
急ブレーキ間一髪に血が凍る
妻の目を盗んだスリル身の破滅
満場の中反対の手を上げる
スリルからやがて虜になる大麻
分数の出来ない人が大学生

公恵
三津子
たけ代
美知江
睦子
石花菜
螢
節子

久仁子
庸佑
いさお
千鶴子
悦子
みつこ
フジ
ちづる
美喜
敏
りつえ
恵子
一壺
ダン吉
泰子
真一

歩道橋下にきよとお地藏さん
鼻先にとまった蝶にきよとん
酔い覚めてきよとんとしての留置場
だまし絵の中できよとんとしています
なぜここに居るのかきよとん病衣着て
叱られて心当たりのない私

京都塔の会

都倉 求芽報

首すくめ七十五日待つ噂

恋人に抱きすくめられている安堵
生真面目な誘いにすくむのは男
名も知らぬウィルス占拠する地球
すくんでも萎えても人は立ち上がる
イエスウィキャン大阪弁でさあ行こか
手短かに的を突きますわたくし流
行くまでがルンルン気分旅支度
バーゲンと聞けば行く気になつて
野辺に行く地蔵の笑みに会いたくて
ワクチンが行き渡らないと言う不安
保険屋が行く末の事置いて行く
鬱憤を晴らすも一度逢いに行く
目標が大きすぎてか行き詰まる
耳鳴りか蟬か暑さが急にくる
異変起きる言葉足らずの裏表
異変かどつきり夜の電話ベル
図書館で欠伸している哲学者

猿杏
ヨシ枝
喜久子
美代子
一知
章司

由美子
欣之
美義
宏子
朝子
ますお
ふりこ
綾子
かずお
孝一
としこ
公子
昌乃
文代
篤子
比ろ志
庸佑
鹿太

途中から予期せぬ川がはだかった
冷蔵庫変な音して喘いでる
一番に母親気づく娘の異変
定年後足腰異変過敏症
異変への感度下げれば生きやすい
何かある隣の芝生枯れだした
足腰に異変なんだ友もそう
胸底の異変へ落とし蓋をする

川柳塔みちのく青森

小寺 花峯報

妻の遺影拝むと笑顔返される
拝み倒され夫婦になつたはずなのに
親馬鹿を越えて余計な神頼る
遠い日の打ち水ははの声しきり
あの日からぐったりしてる自尊心
打ち水のたらいに写る終戦日
肩越しに日の出昇んでいる至福
逆転の一打に夢は崩れ去り
打ち水で店主の情が惚れる
ぐったりと背なに重たい豆しほり
打ち水してお目出度い客を待つ
不惑過ぎてガラスの靴は諦める
昼酒がぐったり夜を通過する
玉音をぐったりと聞く油ぜみ
仏壇と親の介護を押しつける
仏壇の奥に先祖の森がある

典子
満子
求芽
則彦
弘之
福子
葉子
啓子

一路
きよし
吞舟
ヒサ子
芳生
一吞
順風
銀波
花匠
愁女
井蛙
黙人
花峯
慕情
一花
島

沙羅一輪熱中症にいたぶられ

五楽庵

翠洋会大邸

安土

理惠報

国民も政權代える術を知る

げんえい

子の野球妻のフアイトのほうが上

正雄

四捨五入しても情けは割り切れず

れんげ

煩悩を捨てきらぬまま枯れ芒

浩二

億シヨンに知り合いがいるだけのこと

すみ子

無病息災自慢の鼻がひん曲がる

久峰

執拗にヒロインを追うテレビ消す

千歩

点滴がボチの貌する長逗留

桃花

痛々し点滴続く終末期

叡子

元アイドル世間欺く逃避行

恭昌

鳩山家妻がライトを浴びている

茶々

吉野落ち静御前は捕われる

知之

ヒロインが小さな城を守ってる

志華子

つくばいにボトリ朝露落ちて春

舞夢

脇役の牙えヒロインを光らせる

弘子

点滴に一度も縁のない暮し

日の出

点滴の秋の夜長の孤独感

満作

企業戦士点滴をして追うノルマ

富子

点滴のリズムで鳴った古時計

昭

食欲にたすきを掛けてバイキング

尚士

愛憎の構むすんで五十年

理恵

老いぬよう心にかけておくとすき

楓楽

ヒロインは一人だけですサユリスト

集一

咲き残るコスモスにみる強かさ

照子

つかの間のヒロインでいる披露宴

捷也

千年後光り続けている式部

千梢

コスモスをヒロインにした秋の風

蕉子

点滴を見つめ恋とは命とは

みつ子

米子住吉川柳会(鳥取)

渡辺多美子報

神様のくれた命をいとおしむ

登美枝

やれやれとお客送って昼寝する

多美子

盆になり故人をむかえ賑やかに

宏之

朝早く朝顔を見て声をかけ

欣子

一二三腰の痛みを吹きとばす

正二

指折って待っているのは始業式

礼子

暗雲の予感新妻起きてこず

公一

花束にリボン色気を添えている

すみえ

降る雨にいつとき詩人らしき顔

未延子

滝の涼暮らしの匂い消えてゆく

ふみ

川柳大阪

長井

善純報

ひたすらに走る私を探す旅

ダン吉

呆けてないうちに探しておく記憶

笑風

年金の財布にやさしい店探す

まつお

一円の安さを求め主婦走る

東吉

老人を探す役所のスピーカー

美花

いつもです電車のカード探してる

美世子

青い鳥探して希望を持ち続け

比呂志

花道を探し続けた長い坂

芳香

子育てでも終り余生の道探す

一風

素直さで幸せ探し一歩から

信醉

ひき出しは何処探しても過去ばかり

章久

麦飯の中から探し得た平和

義明

良いところ探して褒める年の功

一步

早朝の空気おいしい散歩道

功

人次第良くも悪くもなる空気

照月

トゲのある言葉会議の座が白け

五月

同窓会空気見定め輪に入る

青道

一言で空気が変わるありがとう

かよこ

空気でした亡くして気づく貴男です

和

不一致でも阿吽の呼吸でいい夫婦

紀雄

上役の隣で空気まずい酒

鉄心

いつからか空気みたいになる夫婦

朝子

口笛の魔法にかかる牧羊犬

川童

笛吹けど妻は踊らず我踊る

花笑

船旅の霧笛で咲いた恋の花

珠生

笛太鼓浴衣でかつぽ古都の夏

司

口笛が吹けぬ入れ歯が落ちてくる

いつふみ

宇宙からの警笛だろう温暖化

美籠

霧笛未だ祈り届かぬ拉致家族

柳弘

横道に逸れると響く母の笛

善純

川柳さんだ(兵庫)

北野

哲男報

オレオレと電話の向こう他人様

裕美

敗戦の将に下剤の処方箋

秋風が投句日迫り背中押す

善人の顔に着がえて外出す

意気盛ん人生半ばの網わたり

人生も旬があるよう思う歳

カーテンコール何と不思議なご挨拶

中年の手綱は夫と子を束ね

ぼつくりと逝つたお隣褒める嫁

年金をせめて頼りに生きている

外国に行つても妻がとりしきる

妻だけが女じゃないと思う年

セリに出す牛にビールと言う別れ

これ抜け毛そんなに急ぎどこへ行く

中年をあつと言う間に通り過ぎ

中年に欲しい待つくせ譲るくせ

酒ぐせの順に奥から詰める席

岩美川柳会鳥取

石谷美恵子報

勢いが余つて鯛と海に落ち

勢いを衰えさせぬ夢がある

勢いがたらぬ息子の嫁探し

勢いのあるうち少し翔んでみる

勢いが衰えボスの孤独の日

寝た振りで秘密聞いているうちの猫

秘密持つ花の魅力にときめいて

灰皿を真ん中に置く秘密基地

(辰) 哲夫

雅司

見

ちあき

一 泉

千代子

キヨミ

好文

朋月

章子

忠

哲男

忍人

歳子

祐康

正和

蟹郎

公子

幸子

節子

たぬ

忠良

一 瑤

螢

同罪にする気か秘密打ち明ける

何となく秘密があつて魅力増す

楽しかったちよつと秘密の喫茶店

正直な人には秘密語るまい

残念だ秘密寝言でバレました

はつきりと道案内はまだ出来る

はつきりと言えない過去に傷がある

はつきりと眉毛も描けた許そうか

はつきりとさせず融和を図る策

日本語も舌の動きでフランス語

おぼえてた舌はやつぱり母の味

ほろ苦い旬の味覚に舌鼓

この味を忘れずにいてくれた舌

嘘八百舌が器用で忙しい

ラーメンのスープと言えど秘伝なり

好物は舌転がして微笑んで

勢いはまだある老木の力こぶ

サークル檸檬大匠

松尾美智代報

決めかねる思いがあつて暮参り

空しいと思えば何もかもむなし

真実が手が届くまで背伸びする

弛んでる絆を締めるハブニング

浮気などした事ないと言つてある

聞いてしまった本音は胸に仕舞い込む

本音らしい耳がびくびく動いてる

孝男

圭一郎

睦子

重忠

稔

はるお

かつみ

和枝

幸枝

茶子

菖子

清帆

一 粹

よしえ

幸子

和子

美恵子

扶美代

房子

希久子

千代

蕉子

光久

義子

妻の本音すすいでいます洗濯機

上司去りやつと本音も出る酒宴

明日あると今日の日記に論される

花たちは本音で四季を詩つてる

本音とは違う形で世は動く

お浄土へ行つたら本音言うつもり

豊中もくせい川柳会大匠 藤井 則彦報

はれ葉そろそろ効いても良さそうな

祝い酒浮いた噂も花を添え

浮き沈み思い出尽きぬ共白髪

ノーベル賞やつぱり無理か蛙の子

髪が抜け会いいたくないと友メール

運動場白線引かれ引き締まる

そろそろはまだまだだった慌て者

鋭角のことばを学び若がえる

手土産に思わぬ無理を包み込む

怖い敵強い味方を妻という

虎吠えるそろそろ夢の醒める頃

紙コップ二つ浮いてた離れ島

それは無理無い袖ふれぬ話です

これしきで尖るそろそろ倦怠期

存在感の妻に無重力の僕

みんなの恋食べてしまった曼珠沙華

稲刈りにちつちやな婆が浮いている

そろそろの古希白いカンパス私服

美智代

昌紀

たもつ

いわゑ

みつ子

楓 楽

則彦報

啓生

郁子

庸 佑

(辰) 玲子

佐和子

千恵子

(永) 玲子

きらり

隆

螢 柳

佳 恵

則 彦

都代子

幸 雀

求 芽

美智代

早 人

満 子

何となく「うん」と言わないのも夫婦

食の秋までも連休ダイエツト

引つ越しの手伝いに来たハイヒール

敬老日紅白饅頭小さくなり

セールスがそろそろ墓地を買えと言う

火の海へキャッシュカードが落ちてゆく

徘徊と間違えられた歩きぶり

もういいかそろそろ脱皮三回忌

浮世絵が気になりだした十五歳

ライバルのしつぺ返しが届く頃

そろそろと西方浄土の地図調べ

父母が浮かんで来ます曼珠沙華

年ですなも一度過去を振り返る

縄電車そろそろ虹をわたります

川柳塔すみよし大阪 岩崎 公誠報

春夏秋冬やっぱり夏が好きでんな

夕立が去り会えそうな予感する

夏でさえ爛にこだわる父の酒

暑気払い有馬の熱い湯もいいな

男気も夏大根も辛味消え

威勢よく雑草のびる夏の庭

夏が来たあなたも河馬になりなさい

一石二鳥ゴーヤにパワーもらう夏

ちよい太で夏バテ知らぬ妻が良し

むし暑い夏にはネジがゆるるんでる

堅坊

美義

寅次郎

志津子

尚士

満寿巳

見清

十八娘

勇治

宇乃子

公誠

千枝子

萬的

葉子

太郎

篤子

庸佑

ばっは

りつえ

舞夢

正太郎

桃花

(矢)五月

のん子

丁寧は夏帽子取りごあいさつ

脳みそに夏は暑いと言いつ聞かす

やはりいま旬の味出す夏野菜

夏空の浮雲ビールの泡に見え

汗だくに真夏の一票差し上げる

焦げる日に光る雷雲意気盛ん

腹巻きにされて不服な夏布団

夏大根母の小言の味がする

枝豆に生ビール腹たるむ夏

お手軽で喉爽やかな冷やっこ

夏の空球児の声がこだまする

この暑さ特別ですなと毎夏言う

Tシャツと短パン夏は安あがり

新しい恋ゲットした夏の浜

丸ごとの西瓜は買えぬ核家族

戦死した兄貴を偲ぶ夏の雲

極楽へ迷いこんでる夏の夢

炎暑から一直線に閉じる夏

本当は夏が一番好きである

負けん気の太陽こそぞと唱う夏

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

昭彦報

抜け殻を這い出て次の夢を見る

抜け殻がひよろひよろ町を散歩する

千の風抜け殻の碑に水と花

酒たばこ禁断の夫抜け殻に

温子

克博

かりん

チエコ

遠野

裕之

章久

柳弘

昌紀

定子

ヒロ

蕉子

まつお

美籠

(奥)五月

朝子

日の出

哲矢

芳香

公誠

いさお

康子

よしえ

日出子

快くぬけがらが目をさます酒

抜け殻と言わせたくない恋をする

抜け殻となつてあの世で遊びます

夜明け前せみの抜け殻生の跡

抜け殻を捨てて脱皮だ若返る

うちわ風だから近くに寄り添える

それなりに生きたのだから居場所ある

単純だから簡単に腹が減る

ど素人だから裁判変えていく

高齢者だからうしろに従いてゆく

子は宝だから三人産んでおく

酒よりも旨そうだから焼酎に

人頼みだから最後は苦勞する

真心をつくす看護の手が温い

味噌作り母さんの手は温度計

陶器焼く温度で変わる出来具合

一人寝の床へ温もり欲しい秋

温度差の違う夫婦ですれ違い

日々変わる温度に耐えず身もたぬ

いい湯だな鼻歌も出るエコの風呂

陰日向北と南の温度の差

夢という大きな水色の卵

ピカピカの卵行き交う永田町

卵など食わず泳いだ古橋さん

ほっこりと卵が焼けた妥協する

あきらめず平和の卵抱いている

克枝

和子

賀津恵

美栄子

瑞子

萩江

恭子

完司

玲坊

螢

茶子

泰輔

貞子

重忠

酔美蓉

由紀子

風露

京子

美津恵

悠子

祐子

石花菜

龍枝

けいこ

和枝

鬼一

あゝ上野駅 金の卵も遠くなり
まゝごとくに医者卵が脈をとる
目から火が間違ひと言う受精卵
お弁当無いと淋しい卵焼
地球ごと温度を上げる人の罪

川柳塔まつえ吟社(島根) 三島 淞丘報

うまそうな匂い盆用意する
五十年忌白百合匂う灯に座る
人間味あふれて匂う人が好き
サンマ焼く匂いあわふわやつてくる
新築の部屋にはのかな木匂い
コロン一滴葉に落とし本を貸す
宍道湖に研ぎすまされた月映る
牙ばかり研いでチャンスに遠くいる
役終えた砥石が雨に光つてる
笑つてはいるが神経研ぎすます
面白いうわさに耳も口も研ぐ
雑草に負けてはならぬ鎌を研ぐ
リハビリが教えてくれた生きる欲
リハビリをしても生きねばなるまいか
リハビリの効果嬉しい二歩三歩
リハビリに耐えて再起の春を待つ
リハビリの一つに朝の早歩き
リハビリの出来の良日は身も軽い
栄えてた頃は竜宮城に居た

次男 美代子 喜美子 英子 照彦 淞丘報

町紅 房子 長吉 蘭 和歌子 美智子 知恵子 桂子 禮子 たけし たえこ 静恵 寿代 螢 政子 スズコ 治代 宏 茂美

華燭の典挙げて栄える共白髪
不況風栄えた老舗灯が消える
政治家の栄枯盛衰ドキュメント
気分よく飲んで栄える長寿国
郵政が栄え元氣ゲンキのつまでした
ひと山も二山も縫う知恵袋
朗報に声もはずんで山も牙え
山ほどの愚痴を吐き出す電話口
私に立ち塞がった山がある
日記には山や谷越え八十路入り
民の声大きな山が動き出す

川柳塔打吹鳥取 野口 節子報

善人も奥の奥には悪もあり
何も彼もベッドで喋る善い仲間
もう一枚皮をかぶつて善人に
偽善者ぶつてきよきよと佑拾う
善人の隣であくび噛み殺す
胸の疵消し忘れて踊り出す
国会の古い狸は消えてゆく
大日本帝国の罪消さぬよう
カラフルなパンツ吊して楽天家
吊りあげた小兵力士の大相撲
金メダル吊るして料理人を呼ぶ
鯨鯨を吊るして料理人を呼ぶ
百グラム二センチ伸びた日記書く

幸 幸代 幸子 ちえこ 日出子 民子 ゆき 芳恵 多喜 注湖 淞丘

道子 善江 克枝 紀美恵 くにこ いさお 勝憲 照彦 禎元 美知江 重忠 玲坊 清

育児書の通りでないが元氣な子
育児袋を陽にあてるカンガル
少子化にパパの育児と支援策
孫育児プレッシャーない爺と婆
泣いている育児田畑にうば車
生き抜いて灰も残さず消す覚悟
氣紛れな風が吹き消す命の火
吊ったスダレ用なくなった日差し秋
架けた人も恐かったらうかずら橋
風鈴をしんみり鳴らす秋の風
軒下に吊るすてるてる不安がる
初盆に吊るすちようちん亡母に見え
父さんはメタボの腹でズボン吊る
蚊帳吊つてきようたい並び寝たあの夜
大根の首吊りを見た里の秋
子の寝顔見ながら反省する落度
育児から解放されて趣味三昧
無学だが溢れる愛に育てられ
子は宝先ずはしっかりと抱きしめる
子育てはやりわりとした格闘技
星を眺めて父と子の背くらべ

川柳やがわ大阪 籠島 恵子報

世の中がどう変わろうとさけ茶漬
好きやのに後の祭りやおすぎる
田圃みち吹くそよ風は母の色

富恵 みち子 滋 義人 小生 三津子 石花菜 泰輔 公恵 龍枝 勝誉 久柴代 貴恵 和子 孝恵 美代子 美美子 節子 よしえ 芳光 螢

錯覚の愛かも知れぬスベアキ
要らぬことしゃべるな口にカギカッコ
合鍵と一筆箋できた別れ

内緒事に鍵をかけて逝く

電源ヨシ元栓ヨシ鍵ヨシ

年金者民主の風はつめたそう

明日吹く風を信じて生きている

あれ以来鍵かけたままですハート

葉包紙寂しい鶴をまた一羽

金婚の記念に貰う旅行券

銭と言う万能鍵を持っている

鍵の束拾いとまどう交差点

友愛を看板にして船出する

あいらしい案山子に雀きとまる

記念切手貼るのが好きで手紙書く

看板の誤字や脱字を見て回る

人間を信じられない鍵の束

古希過ぎていのちの音がよく響く

人生というお祭りの主となる

言い勝つてさびしさこころ吹きぬける

吹く風へ羽根休ませるついの町

看板の9・11でまだいくさ

胸で鳴る人目忍んだ祭り笛

追い風に乗って言いたい事を言う

コスモスが鍵を握ってはなさない
抜けているところが好きといわれても

柳弘
秀雄

麗

ルイ子

賢子

尚世

忠央

修

弘一

三郎

弘風

かすみ

祥昭

朝子

さち子

銀杏

仁清

たけよし

郁夫

一風

茜

鈍甲

じゅんこ

博泉

恵子
寿男

どっち好きと言えない義理もある五歳
自「主張ぶどう一粒ずつの距離

堺川柳会大匠

河内

月子報

激痛の記憶ばかりの菌科の椅子

本場所ので勝つて稽古の恩返し

マシユマロのように手応えない男

メルアドをそつと教えてくれました

これも歳痛みもなしに毛が抜ける

何も言わないがもりもり食べてくれ

手応えが出るまで土を掘りおこす

棘ひとつの境に小島あり

雨の日も走り続けた差が光る

バックした手応え妻は信じてる

手応えのない仏にも御挨拶

痛い目に合うたび私強くなる

毎月なら手応えもある給付金

この痛み分けあう人がいてくれる

練習はない結婚も人生も

糖尿のくせにお酒は拒まない

年寄りを区別してええ事かいな

心太くちにとろりと恋の蜜

トマトって果物野菜子にきかれ

寝言まで明日の祝辞を言うてはる

突然に空気がかわる娘の帰省
痛い目にあって人間鍛えられ

寿子
雅文

公誠

雅明

朋月

玄也

好

像山

唯教

時雄

扶美代

さくら

半銭

舞夢

りつえ

冬虹

つづや

としお

天笑

綾乃

八千代

五月

千代

のん子

痛いところ一晩寝たらどこやった
美しく老いる話は耳痛い

母の手が包めば軽くなる痛み

とりあえず栗ご飯でも子の帰省

時ならぬことにの詛りが心地よい

旅の本見せても夫乗つてこぬ

僕の足踏んだメタボのハイヒール

痛いところ突かれたらしい怒り声

ワクチンが足りず頭痛の種かかえ

思いきり尻もちついてしゃがみ込む

楽しみは稽古の後の縄暖簾

良い歯まで削られそうで痛くなる

手応えはあった指先ふるえてる

山彦
日の出

俣子

みつこ

かりん

明子

愿

清晋

世紀子

雅子

進

政男

月子

「各地句会便り」

掲載について

川柳塔社の小集句会の紹介・ア
ピール・会の様子などお書き下さ
い。会員の集合写真を添えて下さ
い。順次掲載させていただきます。

行数―たて20字×54行

(1080字)

第29回

川柳塔鹿野みか月川柳大会

日時 21年12月6日(日)午前9時開場
場所 国民宿舎『山紫苑』2F大広間
課題と選者 出句締切二時半 各題一句

〔本音〕 河内 天笑 選(堺市)
〔あかり〕 森中恵美子 選(摂津市)
〔斜め〕 奥山 晴生 選(京都市)
〔原っぱ〕 池上 英之 選(岡山市)
〔太陽〕 小島 蘭幸 選(竹原市)
〔すぎる〕 竹治ちかし 選(出雲市)
〔奏でる〕 政岡日枝子 選(米子市)

＊席題なし

会費 二千元(昼食・発表誌・記念品 呈
賞 優秀賞杯(副賞付)他 出席者優先
投句 千円(発表誌呈・小為替・切手不可)
＊各題二句をB5大の用紙に住所氏名雅号ふ
りがな、左記へ送付 締切は11月16日(厳守)
＊応募先 〒689・0405
鳥取市鹿野町鹿野1279 中原 諷人

TEL 0857・84・2100

前夜祭 12月5日(土) 18時半 山紫苑

＊宿泊一万五千元 懇親会六千元

申込11月16日迄

主催 川柳塔鹿野みか月
後援 鳥取市 鳥取県川柳作家協会 他

おかげさまの投票

夫は91歳。脳梗塞のため13年間病
の床にある。私も後期高齢者で老老
介護の見本のようなもの。福祉のお
世話になり暮らしている。

先日の選挙で投票に行った。私た
ち夫婦は棄権をしたことがない。夫
は車イスだ。投票
所に行くまでの道
のりに二つ小さい
坂があつて、私の
力では上り切れな
い。いつもそこで
人様の手をお借り
する。



その日も前を歩
く男性を呼び止めて、お願いした。

快く押して下さり、ゆっくりと前を
歩いて行かれる。次の坂の所には、
信号がある。青なのに、その男性は
進まず、私たちを待っていてくれた。
次の青で、また車イスを押して下さ

ったことがうれしかった。

投票後、会場の出口は急な下り。
これもまた人様をお願いした。この
方も親切で、「校門のところはガタ
ガタしてるから、ついでにあそこま
で送りましょう」と言つて、道が平
らになるまで送つて下さった。本当
に助かりました。

介護4のおじいさんは投票を終
え、満足している。ご近所の方々も
優しく気にかけて下さるし、乗り物
に乗れば席を譲つて下さる。いつも
世間様から温かいお情けをもらつて
生きている。いや、生かさせてもら
っている。

「また選挙があつたら行こうか」
「それまで待たれたあかんよ」。これ
が2人の合言葉である。

大阪府八尾市

宮崎シマ子

主婦

84歳

朝日新聞9月14日付
朝刊より転載

全日本川柳誌上大会のご案内

(平成柳多留第14集)

日本の全柳人が、だれでも、どこからでも参加できる「全日本川柳誌上大会」(平成柳多留第14集)を開催します。日川協年次大会・国民文化祭文芸大会と並ぶ(社)全日本川柳協会の権威ある三大年間行事ですので、こぞってご参加ください。

社団法人 全日本川柳協会

会 長 今 川 乱 魚

出版委員長 河 内 天 笑

課題と共選者 (各題2句・連記)

「ロボット」	佐 藤 正	— 竹 森 雀 舍 共選
「消 費」	鈴 木 東 峰	— 塩 満 敏 共選
「 蛙 」	廣 島 英 一	— 進 藤 竹 生 共選
「儲かる」	渡 辺 梢	— 井 上 博 共選
「世 代」	堀 江 加 代	— 永 石 珠 子 共選

第二次選者 大 木 俊 秀 平 田 朝 子 川 俣 秀 夫
久保田 元 紀 新 家 完 司

参 加 費 2000円 (投句料・『平成柳多留』第14集代金含む)
賞 平成柳多留賞・川柳大賞・NHK会長賞
(社)日本青少年育成協会会長賞・(社)全日本川柳協会会長賞
全日本川柳誌上大会賞 (予定)

締 切 平成22年2月1日(月)〈当日消印有効〉

発表・表彰 第34回全日本川柳鳥取大会(平成22年6月)

参加方法 参加用紙(雑詠1句)と出句用紙(2通1組)に記入し、
参加費2000円(振替又は小為替)とともに下記へご
送付ください。

〒530-0041 大阪市北区天神橋二丁目北1-11-905

社団法人 全日本川柳協会

電 話 (06) 6352-2210

FAX (06) 6352-2433

振替口座 00970-9-3575

柳界展望

○9月11日、あかつき川柳会主催、鶴彬生誕百年記念川柳大会は、大阪市住まい情報センターにて開催。出席126名。同人の天位。

地の塩のひとつとなり
彬の死 木本 朱夏

ケアハウスの前で逆立ちしてみせる 木本 朱夏

○9月12日、西宮北口川柳会35周年記念川柳大会は西宮プレハブホールで開催。出席187名。同人の秀句。

先人の苦勞実った佳き日なり 川端 一步

荒海にもまれひとりの保険証 山本希久子
空白のページ開くと父の咳 西出 楓楽

実を結ぶやつぱり汗の量だろう 岩佐ダン吉
酒盛りになってしまった七回忌 穴吹 尚士

満点のきつねうどんがまだできぬ 小林 わこ

○9月13日、第23回堺市民芸術祭は堺市梅文化会館で開催。出席140名。同人の秀句。いつからか鳴いてくれない鳩時計 榎本日の出

○9月13日、第104回中部地区川柳大会。出席187名。同人の優秀句。

続編は夫と綴るかぐや姫 播本 充子

○9月27日、第17回和歌山県川柳大会はJABIL本館で開催。参加332名。同人の秀句。

家中の期待あつめて呱呱の声 黒田 能子
持ち味を煮込み足りないまま日暮れ 木本 朱夏

○9月27日、第42回吹田市民川柳大会は吹田メッセシアターで開催。参加139名。同人の秀句。

枯れ急ぐまいぞ命はまつ盛り 池 森子

▽御芳志御礼△
○小林和夫氏から、ご母堂

小林トメ子氏(同人・大阪市)の逝去に際し、感謝の印を拝受。

○濱野靖子氏から、ご夫君濱野奇童氏(参予・岡山県)の逝去に際し、感謝の印を拝受。

○美研アート様からちらし四千枚の寄贈を受けた。

▼計報▲

●高知川柳社会長川竹松風氏(参予・高知市)は、九月、八十八歳で逝去された。葬儀は親族のみにて執り行われた。

▽出版△

○春城年代氏理事・尼崎市は夫君春城武庫坊氏(参予)の一周忌に、遺句集「武庫坊」を発刊された。B6版121頁。序文河内天笑。

跋墨作一郎、奥田みつ子。
○吉村久仁雄氏(同人・羽曳野市)は川柳句集「命のほうび」を発刊された。朝日なにわ柳壇入選100句、自選200句。B6版140頁。序文西出楓楽。

新同人紹介

大隅 克博

裕之・遠野・楓楽推薦

森松 まつお

楓楽・一步・遠野推薦

吉内 タカ子

章久・楓楽・たもつ推薦

▽訂正とお詫び△

○7月号100頁上段10行目、常任理事会は9月28日(月)出席18名。85周年記念大会関連最終確認①同人総会(議案書、会計報告、議事進行)

○9月号79頁下段9行目、七年間、ピアノの蓋が重くなり、七年目ピアノの。

▽新誌友紹介△

高槻市 庄野 澄子
紹介者 河内 天笑
神戸市 長川 哲夫
紹介者 山口 光久
次回(臨時)常任理事会は10月26日(月)13時半

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 みちのく	14日(土) 午後5時締切 初雪・暗号・どっきり	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳 藤井寺	15日(日) 午後2時締切 届く・責任	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	15日(日) 午後1時半締切 穴・恐れる・錯覚	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	16日(月) 午後1時50分締切 匂う・調子・ちぐはぐ・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	17日(火) 午後1時から 柱・四季・すっきり・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
川柳塔 すみよし	21日(土) 午後2時半締切 意味・男・パン	住吉区民センター 南海高野線沢之下下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
南大阪 川柳会	21日(土) 午後6時から 拳・なめる・ちょっと・スペア	住まい情報センター (大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
岸和田 川柳会	21日(土) 午後1時半締切 現金・こびる・さらさら ジュース	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
はびきの 市民会 川柳会	22日(日) 午後2時締切 ワンマン・かさかさ・はがき 食べる	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	22日(日) 午後1時より 今夜こそ・急ピッチ・糸口	鳥取駅2F シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
松露 川柳会	23日(月) 午後7時半締切 墓・魚・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
京都 塔の会	24日(火) 吟行句会 集合10時半 だから・散る・反響・当日雑感	嵐山「船遊び」本誌11月号46頁参照 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
川柳クラブ わたの花	27日(金) 午前9時半から 息・帯・話・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0834 八尾市萱振町1-16-1-501 田邊浩三
和歌山 三幸会 川柳会	28日(土) 午後1時から 本物・カード・灯	和歌山商工会議所4F 第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
東大阪市 川柳会 同好会	28日(土) 午後7時締切 友達・開ける・ホテル・難	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

11月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	3日(祝) 寝屋川市民川柳大会 1時締切 毒・ポスト・居酒屋 ゆっくり・弱点・薬	本誌10月号99頁参照 寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 な	5日(木) 吟行句会 2時締切 膨らむ・箸・単独	生駒市「くろんと荘」近鉄・学園前駅南口10時 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北 川柳会	7日(土) 午後1時開場 瞳・信じる・したたか・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	7日(土) 午後1時から 未満・空白・自由吟	富田林市中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0072 富田林市高辺台3-3-18-105 古田千華
倉吉 川柳会	7日(土) 午後2時締切 漢字・道・飲む	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
八尾市民 川柳会	8日(日) 午後2時締切 料理・群れる・もしもし・雑詠	八尾神社内 西郷会館 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳 わかやま 吟社	8日(日) 午後1時開場 東ねる・油断・するする ます(助動詞)	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
西宮北口 川柳会	9日(月) 午後1時開場 泡・リング・つかむ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅 南出口 徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼崎 川柳会	10日(火) 午後2時締切 もし・演歌・置く・自由吟	尼崎女性センター テレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	10日(火) 午後1時半締切 店・当てる・ばらばら	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
堺川柳会	13日(金) 午後1時から 撩る・以上・「よいち(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
あかつき 川柳会	13日(金) 午後2時から ベルト・暁・燃える・時事吟	クレオ大阪中央(多目的室4階) 地下鉄谷町線「四天王寺前夕陽ヶ丘」駅①、②番出口・北東へ徒歩3分 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳大阪	14日(土) 午後1時から 響く・宝・反省	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳 塔 まつえ	14日(土) 午後2時締切 塩・弁当・読む・ざわざわ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳 塔 打吹	14日(土) 午後1時から 蓋・泰然・焼く	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光

編集後記

☆同人総会と川柳塔まつりに出席できなかった仲間、その臨場感を伝えたいと思いながら10月12日の一日を過しました。嬉しいことに、予想をはるかに上回る88人と309人のご参加を得ました。

☆総会では議事内容を出るだけ詳しくお伝えするのことに主眼を置きました。

川柳塔まつりでは、竹本先生の「嘘の効用」という愉快なお話、句会のピンと張り詰めた雰囲気、懇親宴の会場が一体となった盛り上がり、そして新旧の出席者のご意見感想などを、編集部で一、二日のうちに纏めて今月号に掲載しました。

努力した割りにはどこまで皆さんに伝えきれているのか、些か疑問ではありますが、時間が追われながら懸命に纏めました。

☆九月号と十月号でお伝え

しましたが、編集部員のメンバーが少し入れ替わりました。人は替わりましたが、編集で最も大切にしている、皆様から寄せられた川柳を正しく「川柳塔誌」に掲載するという目標に、変わりはありません。

そのために、何人もの「眼」で何回も何回も校正するのですが、残念ながら百点満点にはなかなか到達しておりません。毎月、川柳塔欄から各地柳壇まで、四〇〇〇句を遙かに越える川柳を、投稿の柳箋と校正のゲラとを突き合わせながら、繰り返し繰り返し読んでいます。

☆誤植をゼロに近づけて皆様の川柳を間違いない掲載するために、誠に申し兼ねますが、誤字脱字当て字の無いように、楷書の読み易い文字で丁寧に書いて頂きたい、そして郵送の前に一度見直して頂きますようお願い致します。

(尚)

ひとこと

辞書を片手に

川柳を勧められ見学の気持ちで伺ったのは「メダカの学校」開校初日でした。元より文系は苦手な私。ましてや川柳は触れたことのない世界でしたが、雰囲気の良いと持前の好奇心がムラムラ。今「メダカの学校」で溺れそうなところを助けていただきながら泳いでいます。

ここで一役も二役も買ってくれているのが「電子辞書」。川柳との

出会いにより、遅まきながら購入しました。シャープのDaxrus。名付けて「パピーちゃん」です。さまざまな情報を提供してくれるこの魔法の箱は私の必需品。川柳を作る時は勿論のこと、旅先でも豊富なメニューで退屈知らずです。

川柳と出会い、辞書を通して言語の幅の広さや正確な使い方、また四季・物事の現象の表現を改めて学習する日々です。

指導者様のもとメダカの学校で楽しく泳ぎたいと思っております。

(竹山千賀子)

★菊の壺

薔薇の壺より物
薫風

心に記念事業「麻生路郎読本(仮称)」の編纂もかた

い百円のを買って雨の中を歩く。透明で視野も明るく

★十月十二日、八十五周年記念大会は、華やかにつつがなく終えることができた。北海道から四国からそれ

他、全国各地から同人、誌友が集い旧交を暖め、あらためて川柳塔の絆を、川柳の和を噛み締めたことだらう。来秋には塔誌通巻千

号の記念大会が開催される。同人乗原道夫さんを中心

として、折り返しを五十五センチの大きな傘は二

★クリップや付箋など文具

を買いに百円ショップへ。幾つか買って表に出ると小

雨……。もう一度店内に戻り傘を探す。折り畳みや五

十センチの大きな傘は二

★平均の魅力は安さと品物の豊富さ。物価が安くなる

ことは消費者として大歓迎である。しかし、下げ続け

るデフレスパイラルの悪循環に陥り景気は浮揚しない。平均の原価を思うとな

ぜか佐しく切ない。

(朱)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

発表(1月号) 地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとらせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

紙 用 句 投 抄 様 樟

「赤 い」 (11月15日締切)

1月号発表

高田美代子 選 — 共選 — 牛尾 緑良 選

B		A	
地名 市都 県道府 姓雅号		地名 市都 県道府 姓雅号	

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

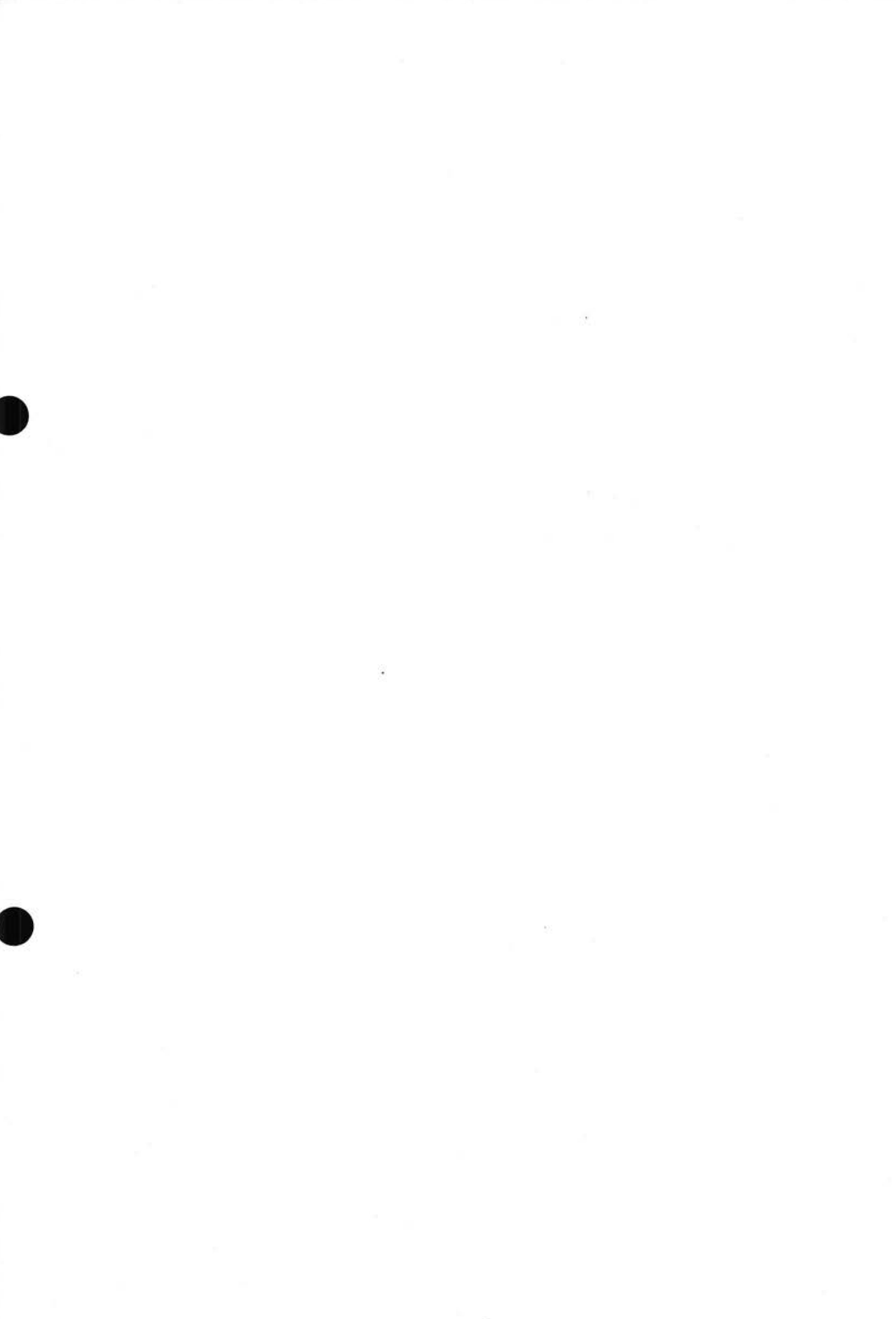
氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 一	 		年 年
	月から半年 月から一年 5000円 9800円			
該当の方に○をつけて下さい				

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201
 川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 009804-298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

初歩教室 「鉢」(3句)
 一路集 (3句) 「奇跡」 「願う」
 檸檬抄 (2句) 「赤い」
 愛染帖 (3句) 高田美代子 牛尾良共選
 水煙抄 (8句) 新川上大輪選
 川柳塔 (8句) 河内天笑選

1月号発表(11月15日締切)

2月号
 檸檬抄 「打算」
 一路集 「見直す」「階段」
 初歩教室 「越える」

本社11月句会

とき 11月6日(金) 午後1時開場・2時締切り
 開催時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
 ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
 おはなし 「笑いましようよ」
 兼題 「缶」
 席題 「グルメ」
 会費 1000円
 投句料 500円(切手可)
 河内天笑選 前西古吉村加
 内天笑選 口今岡上島
 天笑選 たもつ 蕉子 修樹 由一
 (各題2句以内)

本社12月句会

7日(月) 午後1時から
 兼題 「幻」「減る」「かたい」
 「追伸」「結論」

第28年度 夜市川柳募集

第6回「監督」新家完司選
 ハガキに3句 11月末日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお問い合わせいたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
 一年分 九千八百円(同)

二〇〇九年(平成二十一年)十一月一日発行

発行人 河内権治

編集人 穴吹尚士

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

TEL 06-6779-1349

振替 〇〇九八〇四一四八四七九番

オニザキの すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50余年。
オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) 6771-4861(代)